773-94
1200501600074
773
7

旅の力・奈良

吉川速男 著

玄光社 刊

昭和五十年度 玄光社

773
94

目次

はしがき……七
奈良の四季……一六
興福寺に來て……二三
興福寺の春……三三
○美しい三月堂の邊り……三六
○春日神社にて……四四
春日神域の夜……五〇
明朗な奈良の寺々……五三
物語「春日野繪卷」……六三
「大佛開眼」の撮影に就いて……一一五
南都の火災……一二五
奈良の北隅……一四三

朱雀大路の春……一五二
古い土塀に身を倚せて……一五七
唐招提寺の秋……一五九
西の京の秋景色……一六二
藥師寺の夕ぐれ……一七八
垂仁天皇の御陵……一八六
法隆寺詣で……一八九
夢殿……二〇〇
聖德太子の御德を偲ぶ……二〇八
龍田川の溪谷へ……二一〇
耳成山に歩む……二一三
藤原京の地に……二一九
飛鳥川のほとりに立つて……二二七
神武天皇御陵道を……二三一

謹作「橿原神域にて」……二三五
久米仙人の寺……二三八
長谷寺と談山神社附近……二四〇
奈良の旅籠屋……二四二
奈良とカメラ……二五三
何故寫眞撮影を禁ずるのか……二五七
あとがき……二六二

はしがき

奈良、法隆寺、橿原神宮附近を歩いた私のカメラの旅の感想と作品とを集めたもので、從來の拙著と違つて寫眞技術上の事は殆ど書いてない點を豫め御ことはりしておく。たゞ平城の舊都に深い愛着を持つ方にのみ見て戴くつもりで作つた。

私は何處に旅をしても寫眞のアルバムの内に自分の好きな繪を描いて入れたり感想文などを自由に挾んだりして記錄のやうなものを必ず一册作つて居る。

寫眞家でなくとも寫眞を寫して樂しむ事が自由であると同樣に、畫家でなくとも繪を描き、文章家でなくても文を作る事は惡くはない筈である。又詩人歌人でなくとも詩や歌を樂しむ事が何んの差支もない事と思つて居る。

春日野にて

時々フイルムの入換を必要とする。春日野の杉の大木の蔭を選んで落ついて行ふ。日向の明るいところで平氣で入換する人を見ると他事ながらひやひやする事がある。私は旅では二度と寫せない事もあるので，フイルムの入換には非常な注意をするのである。

私の寫眞書は今迄大抵御存じであると思ふから、別に本書のやうに稀に技術本位でないものを出版して見る事もよいと考へるがまゝに、茲に思ひ切つて變つた方式を採つて見た。

然しなにしろ今は出版が苦しい時で、紙も不足であり、人手も足りず、電力も乏しい。本來もつと立派なものにして出版したい希望であつたが、斯樣な戰時版で我慢しなければならなくなつたのである。從つて折角色彩版で入れるべき油繪や水彩畫、パステル畫等の全部を取除くより外はなかつたのは如何にも殘念であるが致し方がない。何卒御許しを乞ふ。

――憧れの地に――

又私は奈良に來て居る。

此前こゝへ來た時は獨り足に任せて法隆寺の邊を逍遙した。また忙しくホテルのバッカードで春日の奥山を早朝に一巡りした事もあつた。今日は何んとなく輕い疲勞を覺えて居り持ち慣れたカメラさへ重く感じて歩く氣もないので、此時こそと人力車夫の勸めに從つて素直に車に乘つてしまつたのである。そして車夫が暗記して居るやうに、たゞ機械的にすら〳〵と口から吐出す名所古跡の説明に落

着いて耳を傾けて居られるのが却つて嬉しいやうに思ふ。

想へば二十五年になるが、大阪に二年程暮らした當時、暮の迫つた十二月の或る寒い日に奈良に遊んで未だ紅葉が殘つて美しかつた事を記憶して居る。又一二年前の眞夏の夜、猿澤池畔で大勢の夕涼みの人達と共に明月を賞した愉快な事もあつた。又春日神社の直ぐ傍らの彼の紅のやうに濃い枝垂櫻に譬へやうもない美しい奈良を見た事がある。さて冬の奈良は、何んでも無闇に生駒山にぶつかつて逆に吹く空つ風と、ひどい底冷えがすると聞いたが、大雪の日に、ひと氣のない大佛殿にでも行つて見たいやうな氣もする。兎に角奈良は何時來て見るのが一番よいのか、尤も、四季それぞれの趣があつて決定した事は云へないであらう。試みに案内の車夫に尋ねたら霜が充分に降つて春日山の一帶が綿に染められた時だ、毎日こゝに居る私達でさへ、あゝ綺麗だなと想ふ、と即座に答へた。成る程それには無條件で肯けやう。

私は年々二度か三度程、それも僅か一兩日しか此地に居ないのであるが、此處に住む人々は何んと羨ましいことであらうと常に想つたりする。然し遇に來るから一層親しみが深いのか、僅かの暇に何

もかもと餘計神經を尖らせて血眼になるからこそ、眞劍に其味が判るのかとも思ふ。若しこゝに住むやうになれば却つて氣が緩んで感覺が鈍く散漫になつてしまふかも知れない。

歷史家ではない自分、たゞ何んとなく千三百餘年の昔の香を慕ふだけ、又文人墨士に非ず、さりとて宗教にも全く素人である自分が、たゞ口には言はれぬ憧れを感ずるの餘り、何時もぶらりとカメラにスケッチブックと云ふ輕裝で、プランも何も無しに來るだのけ事なのである。恐らく自分は一生涯凡そ體の利く限り、此上ない慰安を求めるつもりで此地で、同じやうな想を以て繰返し繰返し遊びに來るに違ひないのであらう。毎度家人なども又奈良ですかと嗤ふのである。

本書は奈良のほんの表層的の觀察といふよりも、寧ろ趣味からカメラを持つてあてどなく廻つた記錄に過ぎない。

奈良は到底こんな小册子で盡せる程に内容の貧弱なものでない事は勿論で、私一人が偶さか遠方から出かけ、一日か二日滯在して見て來るぐらゐでは、眞に舊都の價値は判るものではない。

歷史の知識、建築上の理解、美術の心得、繪畫の觀識眼、工藝技術の批判がある一流の專門家が相

寄り、且其上に文才あり、畫才に富む人々が集まつて、今日まで熱心に研究してさへ尙足らず、今後幾百年間、大勢の專門家が研究を續けても、盡くる事を知らぬ程に豐富な內容を奈良の地は抱含して居るのである。

私の寫眞だけでも玆にあるものは皆一つも碌なものはないと云つてよい位の出來である。然し今後改めて撮影を行ふ準備は完了して居るので、其時こそはもつとよい作品を揭げて續篇を出す事にしたいと思つて居る。

其前に京都附近と琵琶湖畔のものを出版する事に極めてある事を申しておきたい。

カメラの旅・奈良

奈良の小路

博物館邊りの春日野を歩いて四ツ辻を左に曲れば南大門へ突當ると云ふ少し手前の小路に來た。恐らく奈良に住む人のみが味ふ事が出來るとでもいひたい特有の風景に接する事が出來た。白壁の塀に豐かな日を受ける住宅の向うに大佛殿の屋根が森の上から覗いて居る。

ベビーパール　ヘクサー f 3.8　絞 f 5,6 $^{1}/_{50}$ 秒

偶作・奈良の四季

秋に感ず

七堂伽藍の幻を追ひつ
我れは立つ苔むせる礎石に
朽ち果てゝ奇しくも残る
をちこちの御堂の中には
古き御佛の金色の瞳が
眩もせず我れを見守る。
落葉つむ御寺を廻りて
誰人に問はん推古の御代を
聖なく百敷の大宮人もなくて
崩れたる築地の紅葉は夕映ゆ。

春に寄す

さあれ春日野に雪消する朝
ひさかたの光御堂のとぼそに洩れて
御佛の夢を靜かに醒す時には
太宮人の踏みけん地の面より
破れし甍など祕むる大地より
天平の古き芽の孜々と萠え出づ。
鶯よ來よ五重塔の芝園に
すみれ摘む小女等の歌に和して唄へよ
誰れぞ我が耳もとにいま
法の尊き理を說くは
靑丹よき頃を語るは。

夏に想ふ

見よ山の端は明るみ初めて
銀盆の明月は浮び出でたり

仲麿の靈祀る人もあるなか
南圓堂又飛火野のあたりに
圓扇もて螢追ふ人影の動く。
友よ來よ大佛の道は明るし
遙かなる斑鳩の里を訪ねて
その昔聖の君がとかれし
有り難き導きを得んか
寢られぬまゝに我れは筆とり
御佛に歌なと献げん。

冬に贈る

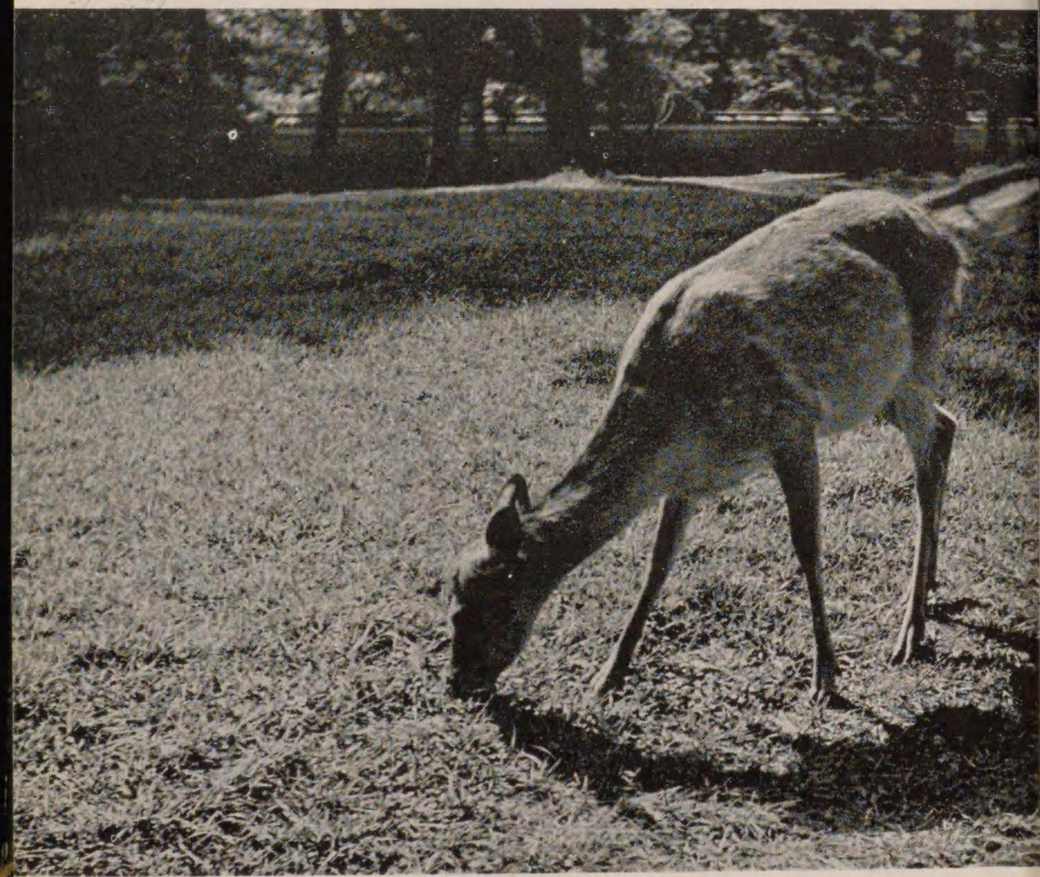
霜雪の魔神都大路に狂ふて
春日野に鹿呼ぶ人も絶えたり
猿澤の水面も固く凍りて
葛城の峯に白衣は動かず

我れはまたうもれ火を掻きたて
燈火の下に奈良の御代を偲ぶ。
今人の世は今日明日と遷りて
人の心とめどなくはやれど
千古を誇る舊都の榮は
永久に尊くもあるかな。

興福寺の原

春の朝私は興福寺の附近を歩いた。そこに鹿を逆光線赤フイルターで寫して見た。鹿の寫眞は隨分作つて見たが，中々思ふやうに行かぬものである。これは割合氣に入つて居る分である。

ベビーパール　ヘクサー f 3.8　絞　4,5
フイルター　赤 1 號，さくらパン F



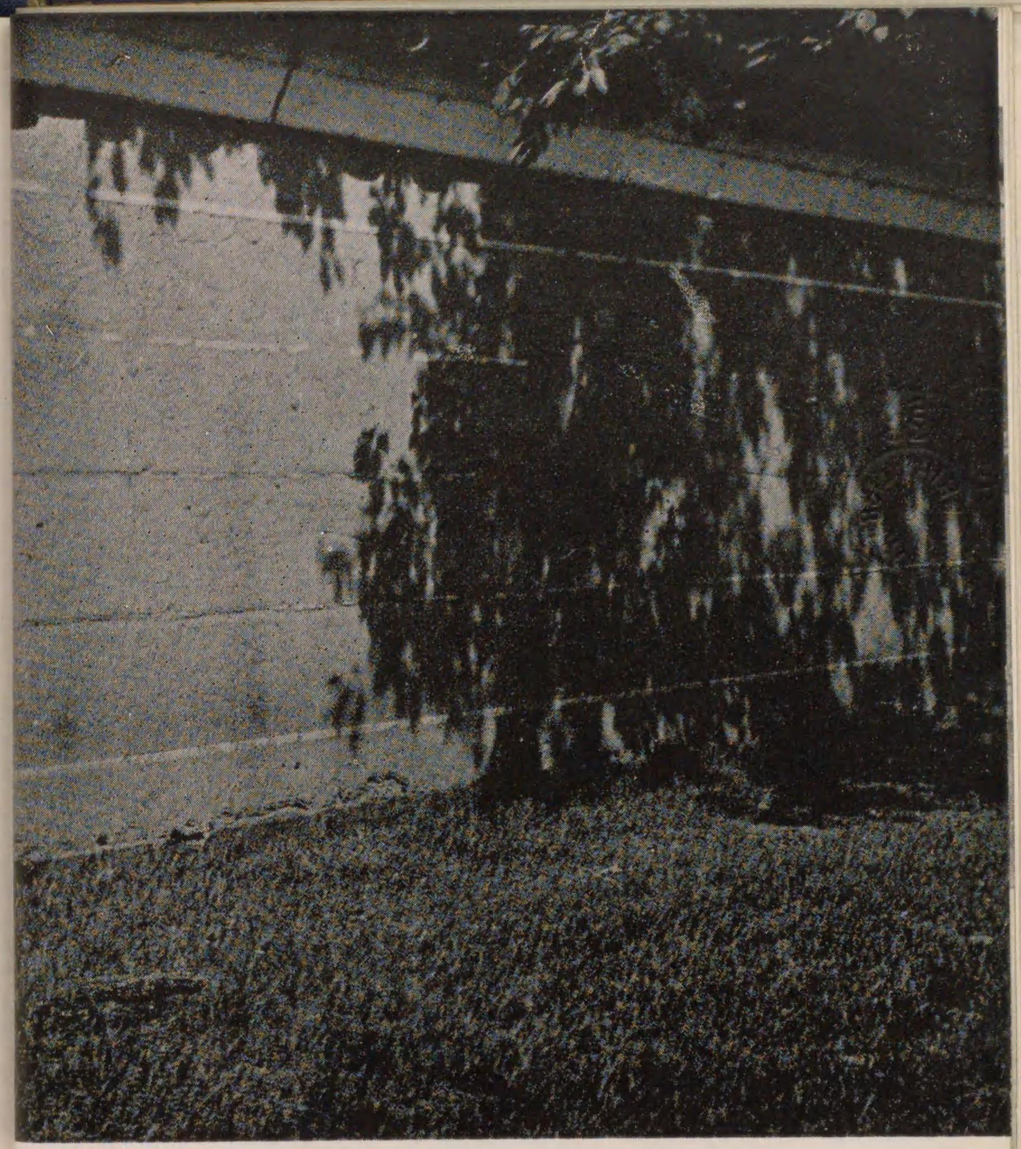
興福寺三重塔

興福寺に來て

興福寺は猿澤の池畔から、池を越して枝垂柳の間から眺めるのが一番美しい。

世に云ふ南都の七大寺は即ち東大寺、西大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、法隆寺となつて居るが、興福寺は其一つに數へられ、寺の起りは非常に古く和銅三年（皇紀一三七〇年）に奈良に都が奠められた其以前に既に高市郡の厩坂にあり厩坂寺と稱して居たと云ふ古いものであるが、藤原氏の氏寺として榮えた昔の建物は今は何一つなく、皆比較的新しいものばかりである。

奈良の興福寺を訪ねる人はそこの五重塔と南圓堂に大概注意するが、三重塔と北圓堂とを見ない人が多いのは惜しい。南圓堂の背後に割合小さい姿の大分日本趣味に傾いて造られて居る三重塔があり又其近くに北圓堂があるが、此二つの建物の姿の良さは到底五重塔や南圓堂の比ではないと云つてもよいのである。



春　光

興福寺の土塀に春の朝の太陽が暖かさうに當つて居る。私は何んとなく心が朗らかになつた。奈良の落着いた秋の風物もよいが，春の晴れた日のこゝら邊りのそゞろ歩きこそは譬へやうもなく嬉しいものである。

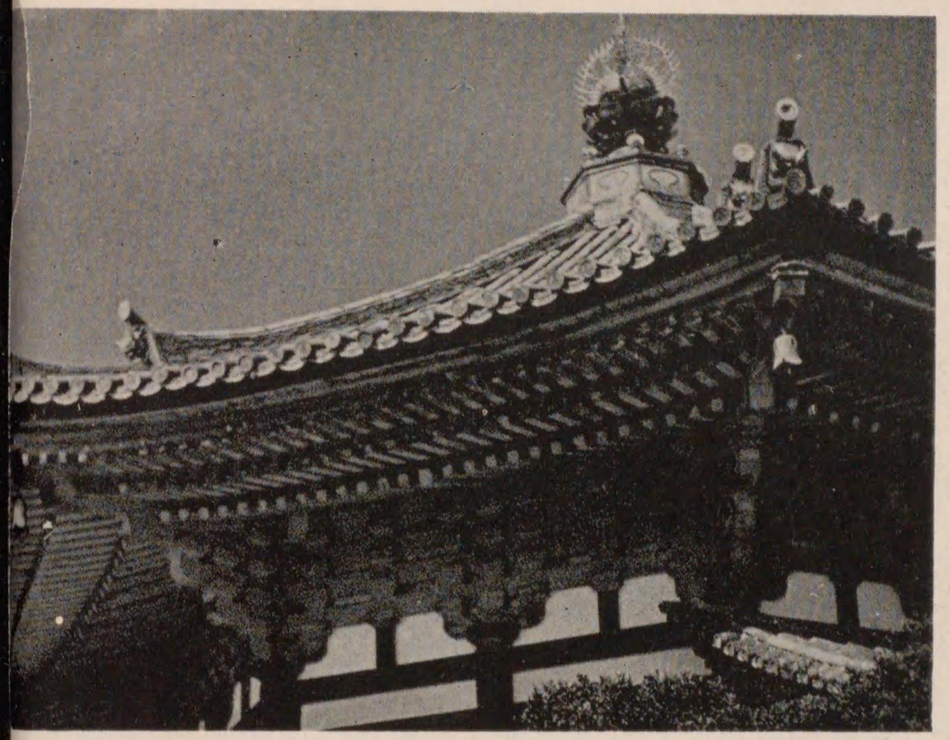
西の京の或る民家

南圓堂と云ふ名は何んと云ふよい響きを持つて居るであらう。然し堂の前に立つて靜かに眺めて居ると其屋根が急峻で一寸不均合な感がして來る。また正面の突出た軒が後世の寺臭さがあつて感じが惡い。そこへ行くと北圓堂の方は建築美に於て法隆寺の夢殿に劣らぬ良さがある。私は春の花吹雪を潜つてこゝに遊んだ事もあり、秋の黄葉の頃遠くこゝまで遊びに來て居る鹿の頭を撫でながら見とれて佇んだ事もある。

こゝの芝原に續いて春日山の方に歩を進めて行けば、そこが飛火野であつて、路傍の朽ちた杉の幹の近くにある僅か凹んだ水溜りになつたところに雪消澤と記した石の標柱が立つて居る。皆奈良朝の歌によくある名所である。

興福寺と云へば直に僧兵の事を想出してしまう。僧兵は佛教の餘りに隆盛になつて權力を持ち過ぎた其弊害の産物の好標本である。

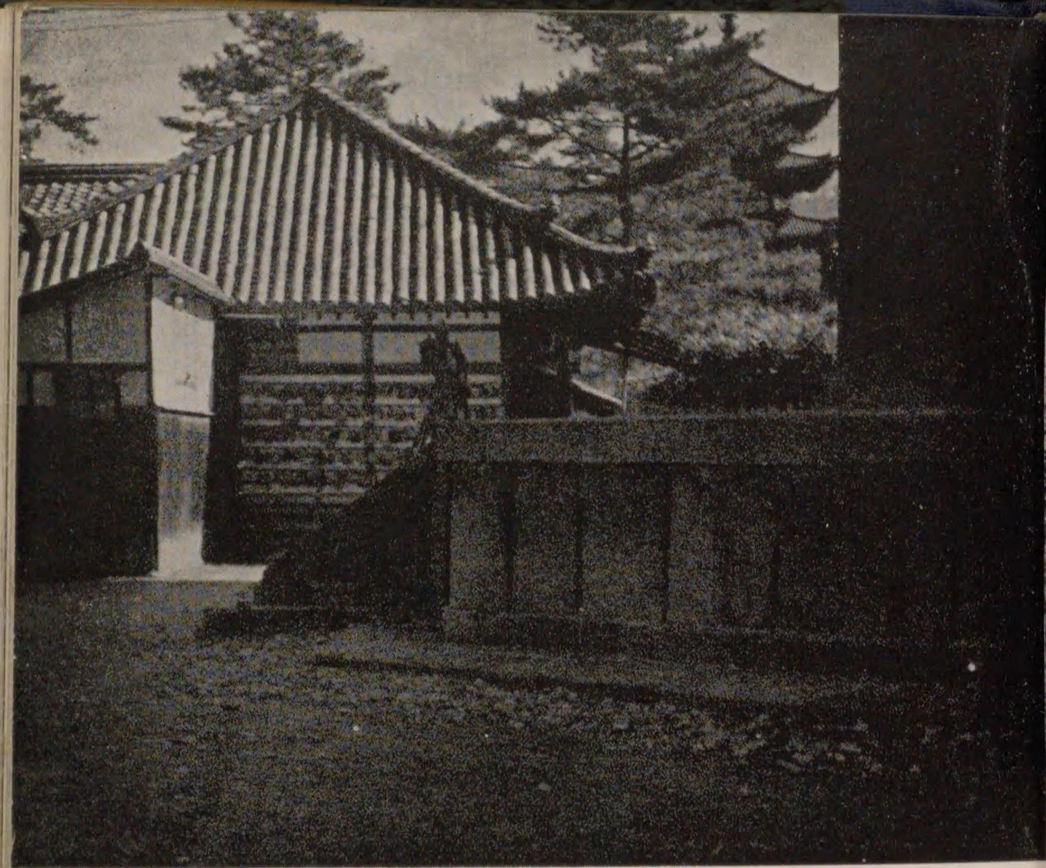
方々の寺々は其所有する寺領を力で守らんとして、勢ひ武力を持つ事から僧兵なるものが生まれた。寺領同志で爭ふならばまだしも、時には京都の朝廷に無理な願を持出す交渉にも出かけて白河法皇



南圓堂　ベビーパール　ヘクサー f 3.8
さくらパン F　赤フイルター 1 號，f 3.8，1/50 秒

を煩ませ申した事は小學生達もよく知つて居る話である。

其内でも興福寺の僧兵が勢があつた。時には官主などを交へて延暦寺の僧兵に向つた事もある。南都と北嶺との爭は彼等の行爲で、奈良朝から平安朝になるに及んで佛徒の目的が斯くも變化して來たのは、社會上から見ても大問題であつたに相違ない。彼の春日の神木を勝手に擔ぎ出してデモンストレーションした暴擧はよく院展の日本畫などにもあつたものである。



南圓堂にて

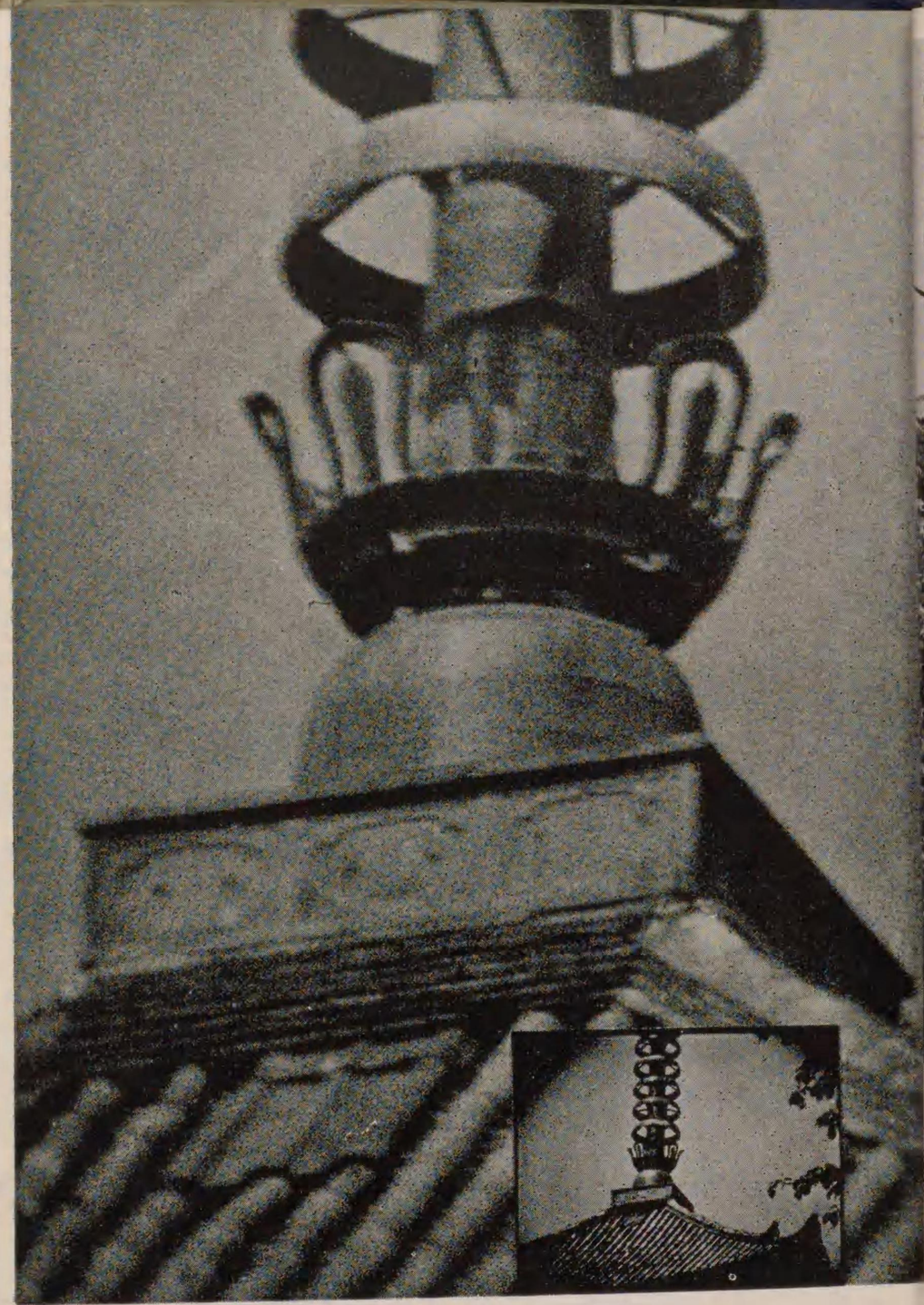
南圓堂の軒下に立つて暫し憩ふ。奈良の寺の屋根は何處もゆるやかな線を現して何んとも云へぬ落着がある。興福寺の五重塔と春日山がほんの僅かに眺められる。

ベビーパール　オプター 4.5　さくらパン F
黄色 2 號　フイルター　綾 f 4.5　1/25 秒

北圓堂の春　興福寺の北圓堂と云へば餘りにも名高い。南圓堂より美しいアウトラインと屋根の勾配の何んとも云へぬ緩やかな建物に見入るばかりである。堂は治承二年四度目の建立と傳へらるゝ。そこに默然と伏目勝ちな高僧に會ふ。

興福寺下の民家

夕暮散歩(画上方年筆スケッチ)



興福寺五重塔の印象

ベビーパール　ヘクサー 3.8
さくらパン F　絞 f 5.6
1/50，黄色 2 號フイルター

普通に寫してカビネ判に引伸して見ると此程度である。私の双眼鏡利用の望遠アタツチメントをベビーパールに附けて屋根の九輪をぐつと引寄せてみる。驚くべき擴大である。

（次圖，絞 f 5.6 約 2 秒，三脚使用）

偶作・興福寺の春

春酣の興福寺
山に綠の水の音
野に紫の藤の色
大和の野邊は花盛り。

木の下がくれとぼ〳〵と
歩み疲れし巡禮の
白衣の背にとり〴〵の
お寺の印のあざやかさ。

あゝ人の世をのがれ來て

老の身なれど卷脚絆
すげ笠姿雄々しくも
袖に涙のしげくして。

我れも旅人苦勞人
どれ〳〵奉謝進ぜやう
亡き子のために父母のため
心をこめて祈るかな。

先きを急がぬ旅なれど
今宵のとまり思はれて
たゞ口ずさむ御詠歌の
鐘の響きに花が散る。

「春の日は南圓堂に傾きて三笠の山にはるゝ薄雲」

興福寺遠望

ライカズマール f 2
パン X フイルム
絞 f 5.6 1/50 秒
黄 2 號フイルター,
奈良ホテル附近から

美しい三月堂の邊り

奈良へ來るものは其飛び離れた方々の寺々まで廻る事は少いが、二月堂から三月堂を必ず見物するに違ひない。

私はこゝにある美しい佛像をいつも格子の間から感激して見入るのであるが、此三月堂、即ち東大寺法華堂は奈良市内にある建物の中では最も古いものとして特に注意されるのである。

三月堂の建物をよく見ると其全體は一つの堂であるが半分が繼建てられた事が判るであらう。即ち後半分は奈良時代のもので、前半分の禮堂は後に鎌倉時代の增築である。

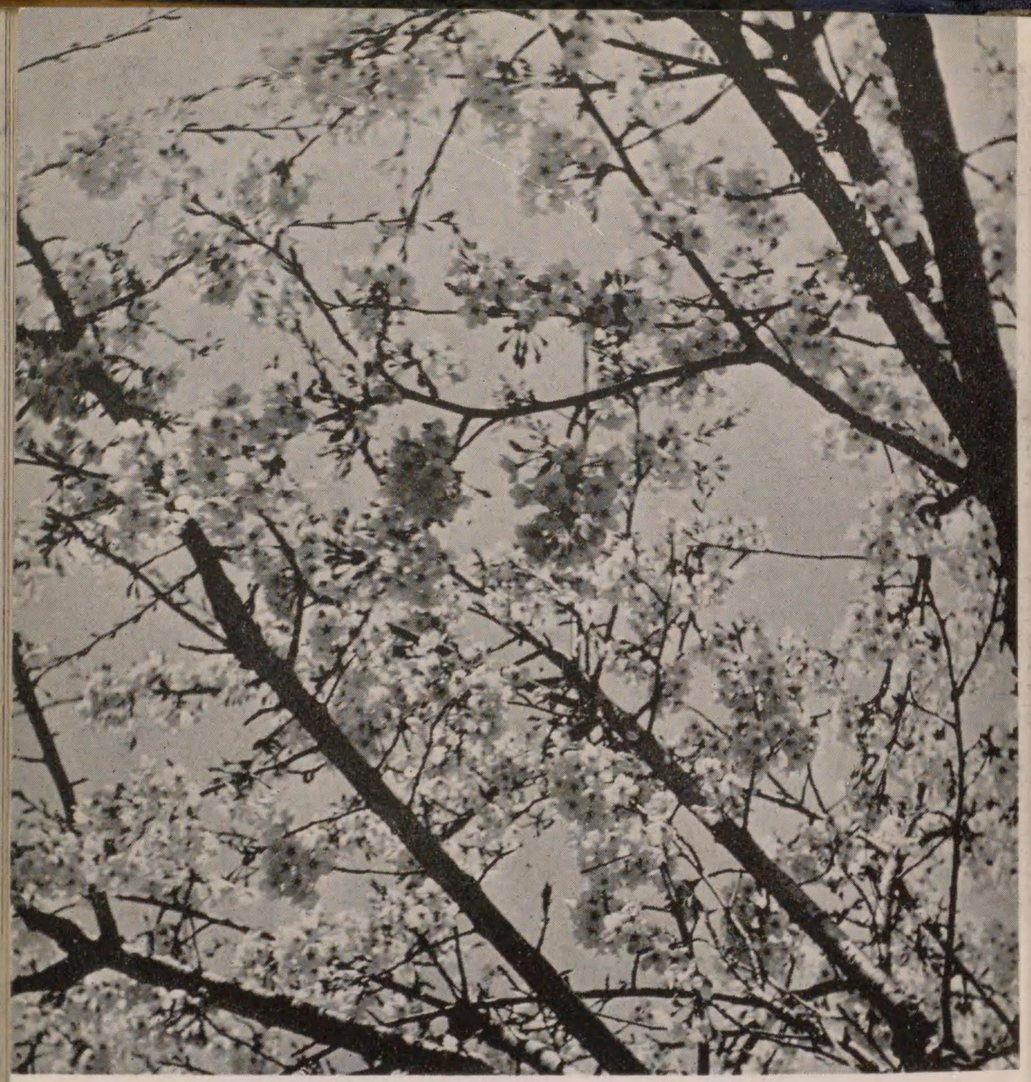
今こゝに奈良時代の古い建築を一まとめにして見ると、第一に法隆寺の東院夢殿があり、又其傳法堂がある。其他唐招提寺の金堂、藥師寺の東塔、東大寺の轉害門、正倉院、新藥師寺の本堂、當麻寺の東塔、榮山寺の八角堂など數々ある。尙其内にある佛像又は美術品等の古いものを求めれば、限りがないから建物だけを擧げて見た。

先年、この三月堂の御本尊の觀音像から怪賊が寶石を盜み去つた事があるが、佛罰によつて必ず憐れむべき最期を遂げるであらう。何んとしても此やうな心ない人間があるのを惜しむものである。尙嘗て宇治の平等院の本尊を拜觀したが、其佛像の基座の彫刻の中から金銀の象眼を完全に拔取つてある有樣を見た事がある。これは戰國時代の荒廢に任せた間の古い出來事であると聞いたが、古いものは二度と得られぬものであるだけに、保管に萬全の注意をして欲しいものだと、つくづく感じた。

天平の餘光

古いが好きな作品の一つである。暫らく休めて居た私のステレオカメラ數臺は此冬から久し振りで根本的に新様式に改造を行つた爲，これから大いに活躍させる考である。いづれ數年の後にはステレオだけで奈良を寫し直さうと思つて居る。こゝ三月堂に就いては本文に記した通りであるが實に春日山附近では一番魅力あるものと思ふ。

ステレオ　ポリスコープ　テツサー4.5　絞 f 6.3　$^1/_{50}$ 秒



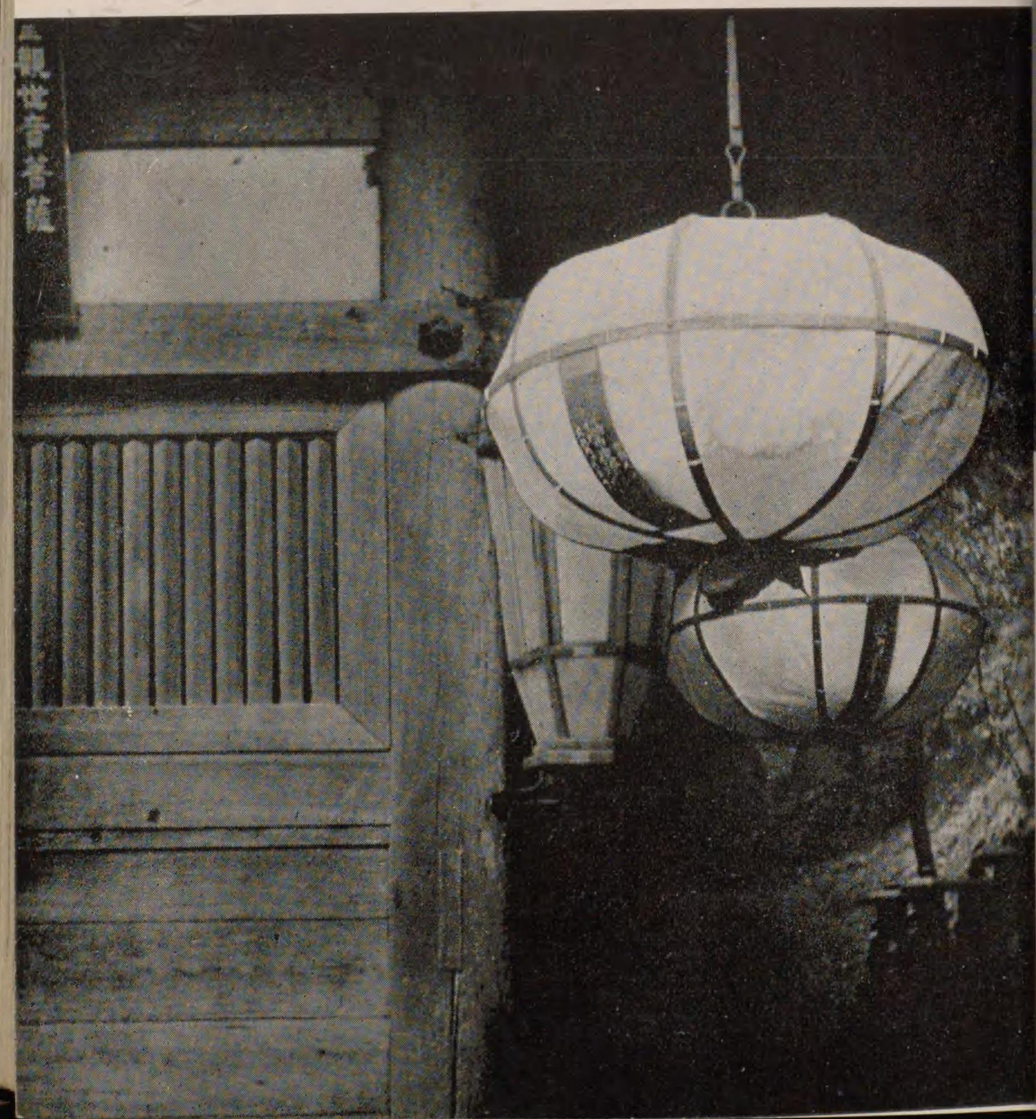
昔ながらの春

ベビーパール　ヘクサー f 3.8
さくらパン F
絞 f 8，$^1/_{50}$ 秒
フイルター　黄色 2 號

二月堂にて

三月堂の直ぐ上にあるのが二月堂である。こゝの堂から見おろせば大佛殿も眼下で實に眺がよい。堂の軒にはこゝ特有な大きな紙張りの燈籠がいつ來ても慕はしいものである。

ロライフレツクス 4×4 テツサー
さくらパン F, 絞 f 5.6 1/25 秒



ロライフレツクス 4×4
テツサー f 2.8 絞 f 5.6 1/50 秒
さくらパン F, 黄色 2 號 フイルター

日曜日

三月堂の邊りは日曜日京大阪邊の人や遠國からの見物人で隨分賑はふ。堂を寫すには少し前の空地が狹いので，私は態々細い道にさがつて見た。汚れた土塀の上から綠の葉が覗き暗い背景の森に丹塗の堂が浮び出て居り，實に何んとも云へない色彩美である。

二月堂にて

小雨そぼ降る日二月堂の御水舎の近くを一人歩む。寒い冬の霜夜に行はれる御水取りの行事と云へば今でも奈良の年中行事として名高いが，私は未だこれを見てゐない。

二月堂の鹿

二月堂の急な階廊を下りつゝそこに一疋の鹿の遊ぶのが眼についた。古い作品の一つであるが自分には氣に入つて居る。二月堂の御本尊十一面觀世音は觸れれば人肌の溫味を持つ祕佛ときく。

春日神社にて

私が此前春日へ來た日は丁度秋の十月十七日の事であつたが、此日圖らずも赤い柱の間から美しい花嫁の一行を見かけた。其一行が軈て神殿本社の前の清い砂利の廣場に打並んで莊嚴なる神前結婚の式を擧げるのを群衆と共に眺め、コダクロームによる天然色映畫で寫したのであつた。

「愛宕山、櫧(しきみ)が原をよそに見て、月に雙ひの岡の松、綠の空ものどかなる、都の山を跡に見て、是も南の都路や、奈良坂越えて三笠山、春日の里に着きにけり。晴れたる空に向へば、和光の光あらたなり、それ山は動かざる形を現じて、古今に至る神道を顯し、平安の巷を見せて、人間長久の聲滿てり、誠に御名も久堅の、天の兒屋根の世々とかや、月に立つ、影も鳥居の二柱、御社の、誓ひもさぞや四所の、神の御代よりの末うけて、澄める水屋の御影まで、塵に交はる神心、三笠の森の松風も、枝を鳴らさぬ氣色かな」

とは謠曲の春日龍神で、御承知の美しい文句であるが、あの清らかなる泉が社殿を廻つて流れるあた

奈良坂のあたり

奈良の町の北方奈良坂のあたりから三笠山のスロープを遙かに眺めると，圖抜けて大きい大佛殿の屋根だけが聳えて見える。奈良附近の戰記を見れば此邊はいつも激しい戰場になつて居た。曇り日の早朝私は自動車を飛ばせながら此記念寫眞を一枚スナップして置いた。

ライカ　エルマー 3.5
パン X　フイルターなし
f 5.6　$^{1}/_{100}$ 秒

り、春酣の頃には山門の傍にある枝垂櫻の色も濃く、丹塗の柱、白壁に照り榮える眺めこそは、何に譬へやもないのである。

それが秋ならば又手向山つゞきとて紅葉が社殿の屋根を飾つて暗い背景の森に浮出したやうな風景美を描き出すのだ。

抑々春日神社の建立によつて此奈良時代に春日造と云ふ新形式が起つたと云はれる。こゝに藤原氏が氏神として鹿島神を奉祭したときく。

神社と云へば日本固有の簡淨な白木造りを見慣れた眼には、この春日の多彩の美しい神社に氣がつかずには居られない。五彩の塗料に金銀の華麗を極むる裝飾を施した寺院に近い形式のものは、全く佛教の寺々の建築の影響で、春日神社の外にも石清水の八幡宮などがある事も想起す。

佛寺のみに眼が眩んで居る吾々は、こゝにやはり神々の存在の別である事を悟るものであるが、藤原氏がその全盛の赫々たる威權の下にあつて、此社の勢力の大きかつた事を忘れてはならない。彼の僧兵が、春日の尊い御神木を擔ぎ出して示威に使つた事などの關係もよくよく考へて見ねばならぬと

思ふ。また神道と佛教とが此時代に如何なる關係にあつたかと、奈良へ來るとふとして考察して見たくなる。

聖德太子の御理想なり精神なりを解さなかつた偏狹な儒者や國學者の或る者は、太子を外國文明の心醉者とした不都合な事があつた事は眞に畏い限りと云はねばならぬ。佛教の傳來によつて神國日本固有の神の道が、其尊嚴に於て少しも影響されなかつた。佛教が如何に榮えても、神社は神社として嚴たる存在であつた。

太子は萬一佛法を信ずるのあまり、神を敬ふ事を忘れてはならぬと、推古天皇の十五年未だ春も酣なる二月九日に、天皇の御名を以て神祇祭祀の詔を下し給ふた。即ち「昔我が皇祖が世を治め給へるや、天に蹋(くぐ)まり地に跼(ぬきあし)してあつく神祇を禮拜せられ、周く山川をお祭りになつた、されば これによつて陰陽が開け和らぎ、造化の萬物が總て調つたときく、今朕の世に當つて神祇をお祭りする事を、何うして怠る事が出來やう、故に群臣と共に赤誠を籠めて崇拜せねばならぬ」と仰せられた爲に佛教崇拜者や歸化人までが神樣に對する崇拜の念を起し、津々浦々に至るまで四方拜や元始祭以下の年中行事に祭祀を取行つたと云ふ事である。神國日本が何處までも儼然たる存在をつゞけ

ロライフレツクス　4×4
テツサー f 2.8
さくらパン F
フイルターなし
絞 f 5.6 $^{1}/_{25}$ 秒

春日神社に來て

此日は天然色コダクローム映畫を主として寫して居たが，其間に寫した一枚の作品である。後で聞けば此邊りは何故か撮影禁止の由である。色彩美の對象をモノクロームで寫したものたりなさを感じる。

て來たのも、太子の聰明なる御考によるものに外ならぬ。

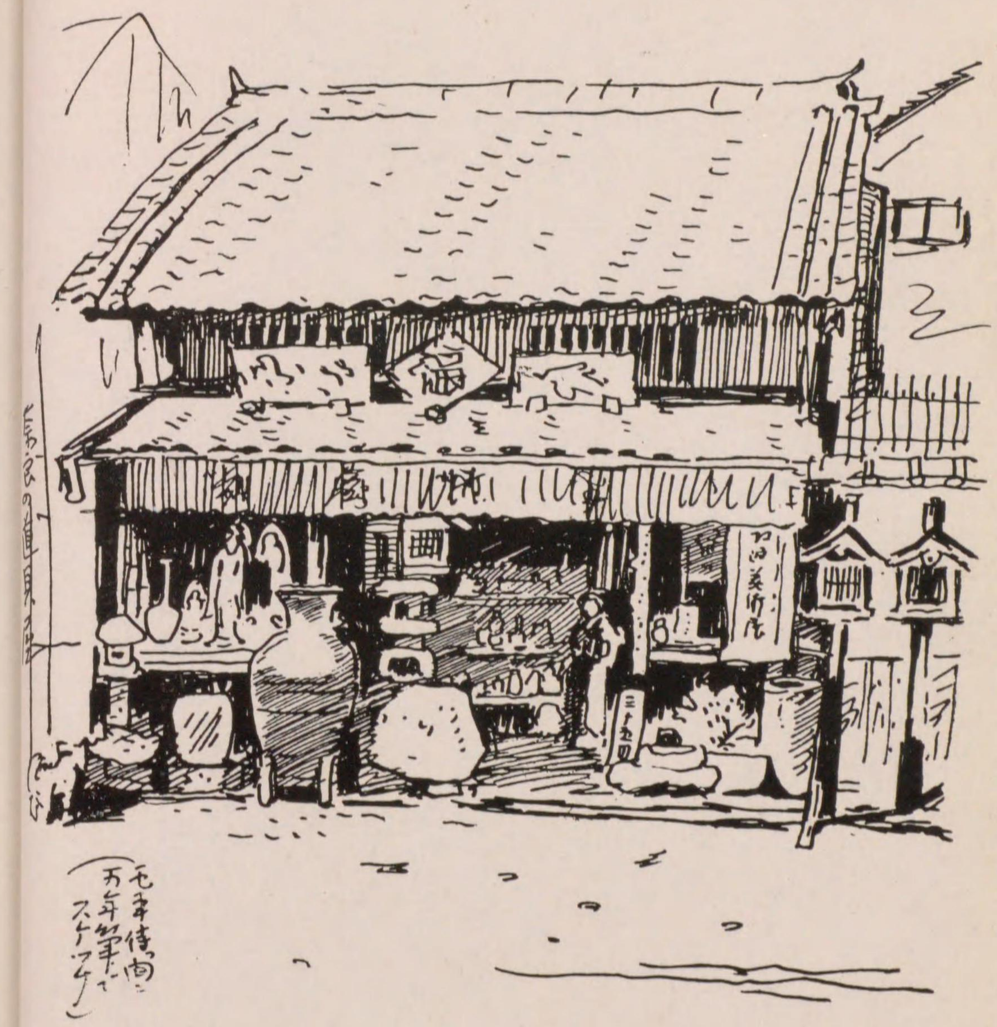
春日神域の夜

或る日私は京都の宿にあつて今夜春日の燈籠にお明しが點くのだと云ふ事をふときいた。節分の夜の事である。私は四條から夕暮近い頃電車で奈良に急いだ。

三千餘基の石燈籠に火が入るとは云へ、晝さへ尙暗い春日の杉並木の靜かな廣い境内の道の事であるから、華やかな都會の電燈飾の如きではない。ぽつとほの暗い光が道の左右の兩側に何處までも續くが、人の氣配もない森の中に自分の靴の音のみが氣になる程によく聞えるばかりである。手向山の邊りから白藤の瀧の邊りまで、かなり淋しい道を一人で歩んで見た。

鹿の姿もなく、鳴く音もきこえず、潺々たる小川の清水の音を杉の林の奥の闇にききつゝ神々しさ身に染みて歩をすゝめるのであつた。飛火野の邊りに來た頃、奈良の町の電燈の光でぽつと明るい空に興福寺の塔が影繪の如くに描き出されて居るのを杉の間に見出した。それは思ひもよらなかつた春の夜の奈良の想出として今も心に殘る。

此夜の燈籠のともし油は二〇〇リーターも要るのだとあとできいた。そして其煤から作り始めたのがこゝの名產の墨であると云ふ話もきいた。それから私はいつも古梅園の墨を土產に買つてくる事にして居る。



明朗な奈良の寺々

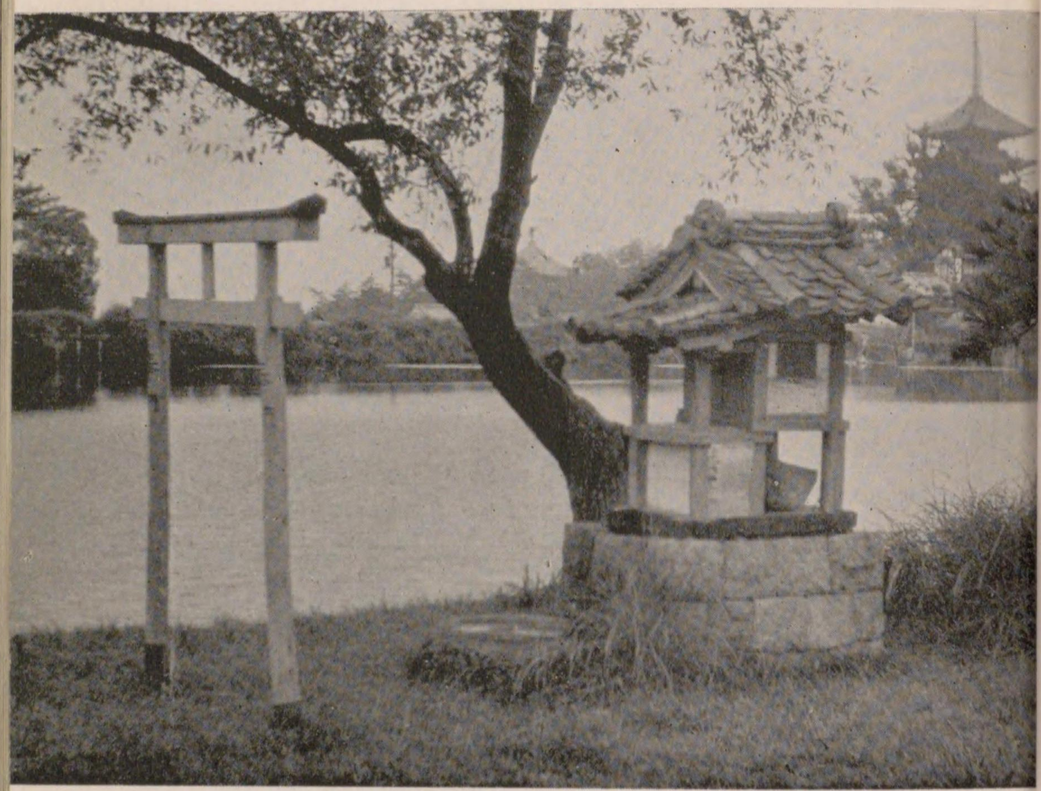
國史を時代的に見て行くと奈良朝の前に大和時代がある。其大和時代に第二十九代の帝であらせられた欽明天皇の頃、即ち皇紀一千二百十二年に既に我が國に佛教の傳來があつた。それから更に後世になつて第三十三代推古女帝の御時に聖德太子が攝政であらせられ、此頃佛教は非常に隆盛になつて居て、今日の奈良で幾多此時代の文化を眼のあたり見る事が出來るのであるが、これはまだ大和時代に屬するものである。或は時代的にもつと狹く區切つて推古時代などと其一部分を特に分けて研究する場合もあるやうであり、又美術史上などでは飛鳥時代などと云ふ名稱で或る時代を專門的に研究したりして居るやうである。兎も角も所謂奈良時代と云ふ時代までになる前、既に約半世紀も昔に佛教が充分に發達して居たのであるから、奈良時代にはもうかなり多くの寺が出來てゐたものである。

一體寺と云ふものは何處でも陰氣なものである。例へば淋しい畑の中とか藪蔭とかいふところなどに亂塔坡と苔蒸した墓石とが生垣の上に首を出して、破れた無地の提灯がバクリと口を開いて居て、

尖つた茅葺屋根か何かの本堂から此世のものではないやうな木魚の音や鐘の音が讀經の聲に交つて聞えて來る。朽ち果てて倒れさうになつた破れ瓦の門からは、腰の曲つた爺さんや婆さんが、無闇に南無阿彌陀佛と口づさみながら出て來れば、頭上からは風もないのに落葉が降つて來る。森では鳥が思ひ出したやうにカアと氣の拔けたやうに鳴く、これでは大抵滅入つてしまふ。だから寺などときくと若い人達はいやがる。若い人でなくとも緣起が惡いとて嫌ふのも道理である。

私なども毎朝佛壇に燈を上げ、線香を焚いて祖先や故人の事を想出しつゝ拜んでは居るが、別に自分は何宗だから何うのと云ふやうな深い宗教的の考などはなく、碌々拜み方も知らず、御經の文句も心得ては居ない。しかし毎朝必ず斯うして拜む時には、遠い先祖や、父に對し、私は責任を以て後を引受けますと誓ひ、又若くして私に先だつた我子に對しては、お前の分までも働いて正しく生き通すぞと誓ふ。

左樣な考の私が奈良の寺を見ると非常に氣持がよいのである。何んとならば奈良の寺には陰氣臭さが少しもないからである。京都の寺では何んとなく陰氣其物と云ふところが多い。何うしてさう云ふ



荒池の眺め

奈良ホテルの近くにある美しい池である。そこの畔に小さい赤塗の柱の祠があつた。芝生を踏んで其邊りに立てば興福寺の塔と南圓堂の穩やかな屋根が繪の如く浮き出して見えた。

ライカ　ズマール f 2
さくらパン F
絞 f 5.6　1/60 秒
黃色 2 號 フイルター

事になるか、私は奈良の古寺には墓場と云ふものを殆ど見かけないからであると思つた。墓の無い寺ならば吾々の家と同樣にも考へられる。それが而も美しく朱や綠に塗られ白壁が明るい陽光に映えて千餘年の昔の樣を眼の當り示して居り、驚くばかりの寶物が其内に藏せらるゝと云ふならば、それは陰氣どころではなくて、私には博物館や美術展覽會の如き感がして來る。そして其尊さが恰も美しい澄透つた水晶の玉を手の中に支へて落すまいと大切にして眺めて居るやうにも思はれる。

又奈良の田舍を歩いても街の辻などでも、迷信の產物らしい雜多の物が何にも眼にとまらぬから、風景は至極朗らかである。それは京都や大阪否東京などの町々の方が餘計見出されるものである。

そこらの辻の十字路に淋しい地藏さんが立つて居たりする景は奈良には餘りない。却つて他の田舍などに多い迷信が外觀的にも少い事は、奈良を明朗にする大なる原因の一つと思はれて來る。

辻堂の繪馬、緣結びの紙片、子育て地藏の石像、陰陽石、稻荷樣の鳥居や名も知れぬ祠などは奈良には餘り眼につかぬ。街も野邊も實に綺麗でさつぱりした感じがする。

一體迷信と云ふものは不思議な事に文明國にもあるもので、殊に世界第一の科學國獨逸などは實に

世界第一の迷信國と誰れやらが實證して述べたが、科學文化とは關係なく存在するものらしい。社會生活が複雜化する爲か、其形式に於て昔の迷信とは違つた形式を採るにしても、迷信は立派に存在をつゞけると思つてよいのである。東京などでも、日常の生活にかなりの迷信が、今も衰へるどころか盛んに繁榮して、これが爲に電車の增發さへあるから興味が深い。

昭和の現代がこれである以上、千年も昔には理の當然かも知れないが、さりとて奈良に少く、奈良朝以後に於て多くなつて居るのは、當時の社會觀、人生觀、宗數觀等の然らしむるところでなければならない。今奈良に於て少く京都に於て著しく多いのは、先づ以て奈良朝の佛教と平安朝の佛教とを根本的に比較して見る事によつて明瞭となつて來るかと思はれる。

玆には平安朝佛教の研究までには立入らぬが、是非他日此意味で平安佛教を研究したいと思つてゐる。平安朝に入つて源平の對立、次で鎌倉時代武力の世に公卿の無力、權力の推移は日に月に定まらず、殺伐たる世情に民衆の困苦は遂に厭世思想や、定めなき浮世の感を深くし、只賴む西方極樂淨土に念佛を以て救はれやうとする淋しい心になり、個人の成佛を只管にたのむと云ふ風になつたから、宗教と云ふものに對する見方が大分變つて來たし、寺其物の態形や仕事も自ら其れに應じて變化して來る。一方弘法大師、傳教大師、又法然、親鸞、其他高僧の說く教理までは大分奈良朝のものとは違

つて居るからに外ならないやうな感がする。

けれども一度奈良佛教の方に眼を轉ずると、決してそんな弱々しいものではなかつた事が知れる。もつと氣の大きい線の太いもので、寺と云へば葬式を營むところだと云ふ位に思ふ私等の今日の考とは全く別の大きな意味の宗教に發したもので、寺は新しい立場から人生觀を說き、佛教の教理を研究する道場、今日の意味では大學校とか政府の中心機關のやうな役割を勤めたものと解してよいと思はれる。即ち奈良朝の佛教は、平安朝以後今日までも見る如く、個人の成佛を說くよりか、國民は佛德によつて福德を受ける、そして國家はこれにより平穩になると云ふ鎭護の目的であつて、當時の皇室の御仁政の表れであつたのである。これによつて政治的に見て其頃の帝都である奈良を中心として中央集權的に我國體は一層强化されたのである。即ち、此奈良時代は政教一致、つまり政治と宗教とが一致して居て、國家の安寧、國民の福利を齎す事は、全く佛德によるものであるとされ、寺院は政治機關として國家の安穩を祈願する所と云ふ譯であつた。これで初めて奈良の寺に墓場を見ない事や、寺が明朗で、寺臭くないと云ふ私共の感じの理由が判然として來るのかと思ふ。然し斯う佛教が政治にまで勢力を持つ結果は轉て色々の弊害を生じ、僧兵などの面白い問題も起つて來るが、それは平安

朝時代の事になるから本書には取扱はない。

然し我日本には古から一貫した日本精神があり、神の道がありながら、何故外來の佛教が斯う一般に採入され、はびこりもしたかと云ふ事は、研究すれば興味ある事に違ひない。私など奈良に來るといつも佛教と神教との關係が當時何うなつて居たものかしらと、やはり相當の疑問を持つ。

これに就いて本地垂迹說（ほんぢすいじやくせつ）と云ふ事を聞いて、成程と思つた事がある。

其說と云ふのは、「天竺の佛樣は衆生濟度のために神となつて日本の地に現たのであつて、從つて佛樣は本地であり、日本の神樣は垂迹である。つまり佛が先にあつて神が後になる。佛を敬する事は即ち神を敬する所以で、偏に神のみを信ずるのは佛を敬する所以ではない」と云ふ、まことに佛教を弘めるに勝手な言ひ分であるが、誰れがこれを唱へ始めたのかは判らないと云はれる。

然し考へて見るに、敬神尊祖を根源とする日本精神の强い日本で佛教を盛ならしめるためには、信仰上の衝突をさける爲にこんな事を云ふより外はなかつたのであらう。今續日本紀の天平勝寶元年十二月の記事によれば、聖武天皇が大佛造營についてまだ御決心のつかぬ折、宇佐八幡の神官が神の託宣だと云つて、「神は大佛鑄造に同意せられ、天神地祇を率ゐて必ず完成せしめん」と云はれたと奏上

手向山の秋色

雨　天
ロライフレツクス　4×4
テツサー f 2.3
スーペリアフイルム
絞 f 2.8 $^1/_{25}$ 秒 フイルターなし

申上げた。そこで朝廷では其神を奉迎して春日神社の傍らにあの 手向山八幡を起されたのであるとの事であるが、面白い事にこれは宇佐の神官と南都藥師寺の僧とが氣脈を通じての根もない作り事であつたと云ふ事が後にばれて、それ〴〵流罪になつたと云ふ。然しもう佛教は無事に其隆盛の道をたどるのであつた。

これより古く佛教傳來の當時には崇佛は神慮に背かず、否神は佛法の擁護者であると云ふ考の下に神佛併せて敬ひ、其接近調和を圖つたものが、後に段々轉化して佛を上段に見るやうになつた。つまりそれが本地垂迹說と云ふのであるさうだが、それは平安朝の初期以後になつてさうなつて來たものと見られるのである。今日の我國の思想から見れば、勿論こんな說は根底もないものである。こんな事を考へながら奈良の寺々を見ると興味がある。但し佛教の隆盛の御蔭を以て、あれだけに文化が發展出來たと思へば、神佛兩者の關係などは別として、佛教の功績は大きなものであると思ふ。

早　春

春日野を東に下つてあてどもなく歩いて見ると，思ひがけぬ氣持のよい眺めに接する事がある。綺麗に作られた畑には綠の若菜が毛氈を敷いたやうに擴がつて居る。私につきまとつて居るかの如く，こゝに來ても興福寺の塔がこちらを覗いて居る。

雲天朝　ライカ　エルマー　SCM
パン X フイルム　絞 f 5.6 $^{1}/_{60}$ 秒

偶作・物語『春日野繪卷』

乾草の間に固く凍つた水溜りが底の方から少しづゝ解けて行き、細い霜柱の一つ〳〵にも陽の光がほんの僅かながらに強まつて來る。遠い霞の中に梅の花だけが時の笑顔を一番に見せて居るこゝは奈良とは云へ都の片ほとりの或るさゝやかな刀劍師の家である。

家人とては今は老いては居るが長い胸まで達する程の白鬚の筋骨もしつかりとした、何んとなく氣品ありげな老爺一人と年頃の美しい娘のたつた二人暮し、家の四方を圍らす低い土塀、潜り門を覗くと簞目も清げに掃かれた庭には數本の梅の木がまだほころび切らぬ白い蕾の玉を一杯につけて居る。其向うの奥の方には注連を張つた仕事場らしい小舍が見える。小舍の横には土ばかりの空つぽな地面に小さな畑が出來て居り、葱が目立つて青々と伸びて居る。

主人である老爺は家の奥に居るらしく姿は見えないが娘はしとやかな姿で勝手元に出たり入つたり

村落殘光

奈良郊外の農家のタイピカルな建て方が此寫眞でわかると思ふ。底冷えのする寒い郊外の爲か窓が少い。それだけに室内の溫かさが又思はれるのである。

ライカ　エルマー 3.5
パン X フイルム
黄色 2 號 フイルター
絞 f 3.5　1/20 秒

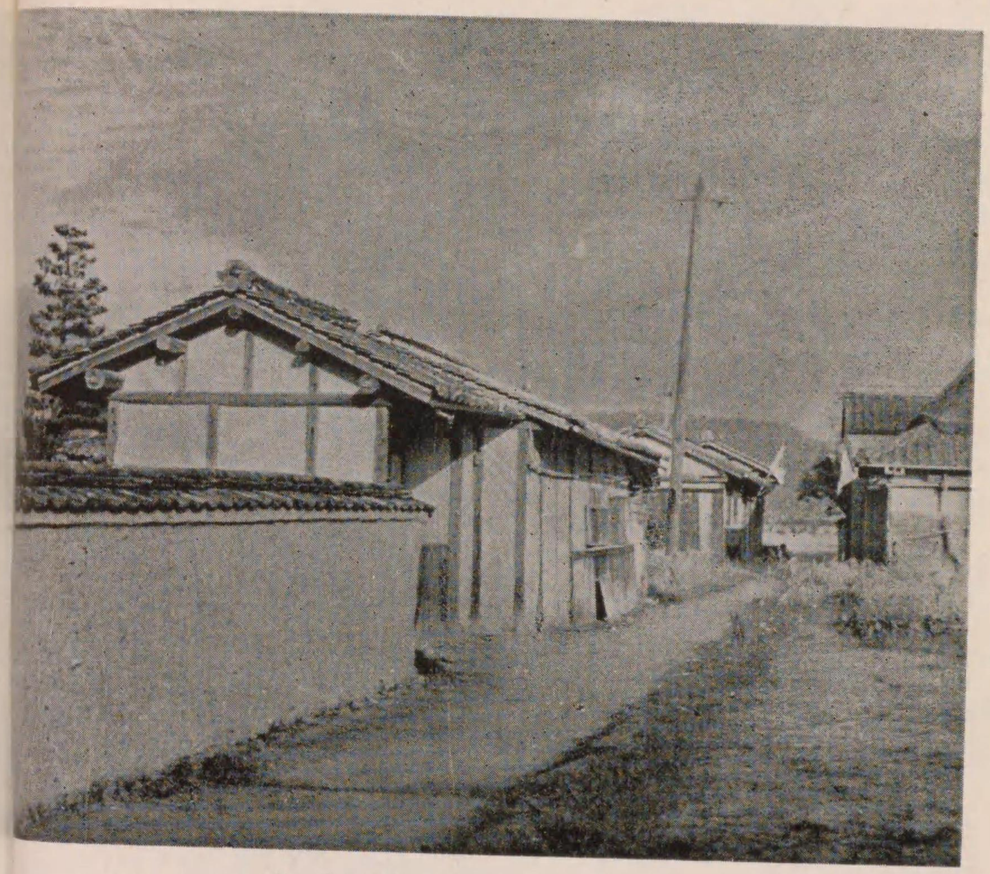
して居る。大方晝飯の仕度であらう。

明るい光が東南の端から障子越に爺の背を溫ため、卓を挾んで娘と靜かにいつもの如く別段變つた話もなく食事が始まつて居る。

「私も考へればよくもこれまで生きて參つた。婆を失つてから何年になるか。あゝそちの兄も今頃此私と一緒に生きて居たならば、どんなに家中も賑やかで、樂しいことであつたらう。……然しみんな世の中の事は人間業では出來ぬ。神樣の御指圖なのだから仕樣もないさ。これも私の愚痴と聞いて置いてくれ。まだ己れとて體は利くし、たゞ時々昔を想ひ出しては、思はずつまらぬ事が口から出てくるのだ。」

爺は眼に入れても痛くない可愛い一人娘相手の話しで、いつもの極まり文句で娘も氣にする樣子はない。

「だがなア、そちも、そろそろ何んとかせねばならぬ。何時まで此私の事ばかり心配して居る譯に



寒村祭日

西の京の部落の薄日さす新嘗祭の日であるが通行の人もなく，それでも軒先に國旗が夕陽を受けて照り映えて居る。遠方に春日山が遙かに見えて居る。殊に左側の家の建て方を見ると古い奈良の民家の俤が偲ばれる。

ライカ　エルマー f 3.5
パン X フイルム
フイルターなし
秒 f 6.3　$^{1}/_{40}$秒

も行かぬのだ。そちは其やうに申しつゞける。又私が此眼鏡に叶つたそちの夫にしたいと話して居る若者とて何う云ふものか私にはつきりとした返事を今以てして居らぬ。いつもたゞ有難う御座るの、身に餘る幸なぞと申して、笑つて居るが、私はそれが一つの大きな心配になるのだ。何んとかはつきり返事しさうなものと思つて居るが、さればとて、そちを嫌と云ふ風には見えぬが、そちは何う考へて居るかな。」

と問ひかけたが娘は顏を紅らめ、ちよつと父の顏を覗き見たぎり、又眼を膝に落して默つて居る。

軈て食事は濟んで膳などを娘は勝手元に下げて、

「御父様こちらが暖かう御座ります。」

と縁端に厚い座蒲團を敷いて座をすゝめて、表の方へ廻つたらしかつたが、そこには誰やら不意に訪れる人のあるらしい足音が聞こえる。はつと思ふとたん見慣れぬ五十に近いらしい然し力なささうな疲れを顏に見せて居る人の姿を見出したのである。

「何誰樣で御座いますか。」

娘は問ひかけた。

「私は旅の者で御座いますが、まことに厚かましい御願ひでは御座いますが、白湯が一杯頂戴致したくつい御伺ひ申したので御座います。先程から腹が急に痛み出しまして持藥をと思ひましたが、痛む腹に冷い水は却つて痛みを增しますと存じ、御願ひに出ました次第で御座います。」

との話を、誰やら來客らしいと感じて、此時老爺は入口に自ら出て來たのである。

「此御方は私に何かの御用事かね。」

と娘を顧みて尋ねれば、娘は旅の人の今の言葉を父に傳へる。

「いやそれは御氣の毒、白湯もあれば少々は藥の用意も宅にはあります。御差支なくばゆる〳〵御休みになつて行かれるがよい。私は今は格別急ぎの仕事もない身じや。さあ何うぞこちらへ」

と自ら先に立つて先刻日向ぼつこをして居た緣先に案內して、娘の提ぐる座蒲團をすゝめた。

「勿體ない事に御座いますが、然らば暫らく御言葉に甘へまして休息させて戴きます。長の旅に衣も何も汚れて居りますが、失禮は何卒御許し下さいまするやう」

と想ひがけぬ人の情に旅人は安んじたか、無理しつゝ歩みつゞけた爲に起つた腹の痛も軈て薄らいで段々と元氣づいて來た。

老爺は

「あなたは御見かけ申すところでは遠國の御方と見えますが、御生國はどちらですか、此地に御い

でなされたのは、どちらか御知り人でも御訪ねでありますか。」

と問へば

「いや〳〵、私は近江信香樂（しがらき）の者で御座います。家は代々農事を營み、つい過る年までたつた一人の息子を相手に婆と不足なく暮して參つたのですが、伜がふとした事で病にかゝり醫者よ藥よと騒ぎましたが、病は重らぐばかり、或る人のすゝめで遙々祕法を持つと云ふ不思議な女行者のもとへと行く事にしました。

行者の堂は小高い山の頂の森の中にありました。私共が訪れるや否や行者は私共の名を呼んだのです。何うして私共のそこへ來る事が分つて居たのでせうか、私共は餘りの不思議さに且は驚き且は其通力こそは伜の病を救ひ、私共の惱みを消して呉れるものと信じ切つたのであります。女行者の眼は皎々と鋭く輝いて、それが眞に氣味の悪い力で私共の顔を覗き見ては何事かたゞ口の内に唱へ言でもするやうに見えました。

其血の氣なく筋張つた手には見るも恐ろしい鋭い針が光つて居ます。それを見る間に伜の太股に深

晩秋の頃

此寫眞を見るといつも無氣味な想出が起る。道ばたから離れた草叢に分け入つた時，私の立つた足元に墓標らしいもの，それに缺け茶碗に水が入れて具へてあつた。新しい自殺者か行き倒れかなにかの供養だつたらう。逃げやうと思つたが，其時此一枚を寫した。

ライカ　エルマー 3.5

パン X フイルム

絞 f 5.6 $^{1}/_{50}$ 秒

く骨まで通れと突差したのであります。伴は苦痛に眼をとぢ夢中で私共の名を呼びつゝ、これも病を直して貰ひたさの一心から忍ぶのでせう、齒を喰しばりつゝ叫んだ其樣の恐ろしさ。

病はそれだにも直らうとはせず、却つて氣力は衰へる一方、間もなく此世のものではなくなりました。

彼の惡みても餘りある、鬼とも蛇とも譬へられない女行者の手にかゝり無慘にも死んで行つた人が他にも澤山あると云ふ事を後に里人から聞きました。然し誰一人それを咎める者とてなく、今以て惡事を繰り返して居る事でせう。そして、根こそぎひとの持ち物を取り上げてしまふ非行こそは。あゝ私共は大切な伴とそれに祖先からの持ち物は悉く奪はれ、田地田畑、何一つ最早我が手にない憐れな境遇に落ちてしまひました。これを因緣と云つて何んで諦らめられませう。毎日婆と二人で泣き暮らして參りましたが、婆は遂に病む身となりました。

病の床に婆の申すには、御身は奈良の都とかに參つて、心から御佛に御祈をしてくれ、必ず有難い御惠みが戴けて救つて戴けるかも知れないと申すので、ふらりと私は國を立つて參つたので御座います。」

と身の上話をこま〳〵とするのであつた。そこで老爺は靜かに口を切つて、

「さて〳〵御話を承りまして、御歎きは御尤もに存じます。だが御不幸は決してあなた御一人ではありません。凡そ人間として一人殘らずがいつかは同じ想ひをせねばならぬと存じます。さう云ふ此私も過る年たつた一人の息子に先立たれ、今の御言葉の一々が皆自らの事のやうに思はれて參つた。

暑きにつけ寒きにつけ、此老いたる私を勵まし祖先傳來の刀作りの祕法を日に月に身に體得して行く其有樣を傍らに眺めては樂しんで居た私であります。或る日召されて夷の國の御軍に從つて天晴武勳を立てゝ戻つたのも束の間、此父を殘して歸らぬ旅路に立つてしまつたのであります。

老いたるが先に死するものと其時までは心得て居たものを、逆を見ましたる其情けなさ。張り切つた弓が折れたとは此事か、まさに魂を込めて振り上げた劍打つ鎚が根本からぽつきりと折れて地に落ちたる心地、多年辛苦に鍛へたる私の業も、あゝまゝよ何うにでもなれと云ふ心で打捨てるまでになつたのです。

人々は慰めて呉れました。篤い同情を寄せてくれました。御諦めが何より肝腎と云つて呉れる親切の言葉は却つて私にはつらいものでありました。他人だからこそあんな事が云へる、自分の心が判らないから平氣で私に諦らめろなどゝと云ふのだ、失禮な奴等だと、今申せば御恥しい話だが私は人樣を怨んだものです。

日は經ち月は重なり、其間に仕事の方も休む譯には行かず、手にすれば、自然魂を込めての作業に段々と私は心の平靜を取り戻すやうになり、朝の心地よい日射しを喜んで迎へ、人々も笑顔の一つも見せ、又夕暮の緣先で靜かに伴の姿を幻に浮べ、己れの運命などを考へたり、又反省するやうにまで幾分の落着きを取戻したのであります。

さて〳〵今日から想ひますれば私は人間でありながら、餘りに人間が判らなかつたのでした。判らぬばかりに私は自分の死んだ後にあゝせよ斯うせよと常に息子に語りきかせ、それが如何にも用意周到であり行屆いた考のやうに思つて居たのです。今思へば皆それは私と云ふ人間が自分で勝手に極めて居た考から割出して居たに過ぎなかつた事なのです。

死は若い者を奪つて此老人を殘して行つたのです。嘗ての計畫はそれで悉く畫餅に歸してしまつたのです。

あゝ人は生物です。生物は生まれゝば必ず死と云ふ事が其時に既に約束され、その死は實に嚴然たる事實であり、これ程確實な事は恐らく世にないのでありませう。それを私共は皆忘れて生のみを見て居り、生を喜び、生の長かれと心に念じ、自分には死のないものゝ如く何時までも生きられるやうに考へて、たゞ一言の死と云ふ言葉を日常口にしても厭み嫌つて居たのでした。然しそれが間違ひで

した。何故私はたゞの一度でも死と云ふ事をもつと早く眞面目に考へ、又見つめなかつたのか。若し假にさう考へて居たならば、あれ程までに心を痛め歎きを見ずに濟んだものと思ひます。あなたばかりではない。つまり悟りが私にも足らなかつたのです。即ち眞に人間と云ふものを考へて居なかつた罪だと思つて居ます。

さう感じた或る日、私の心は急に明るくなりました。

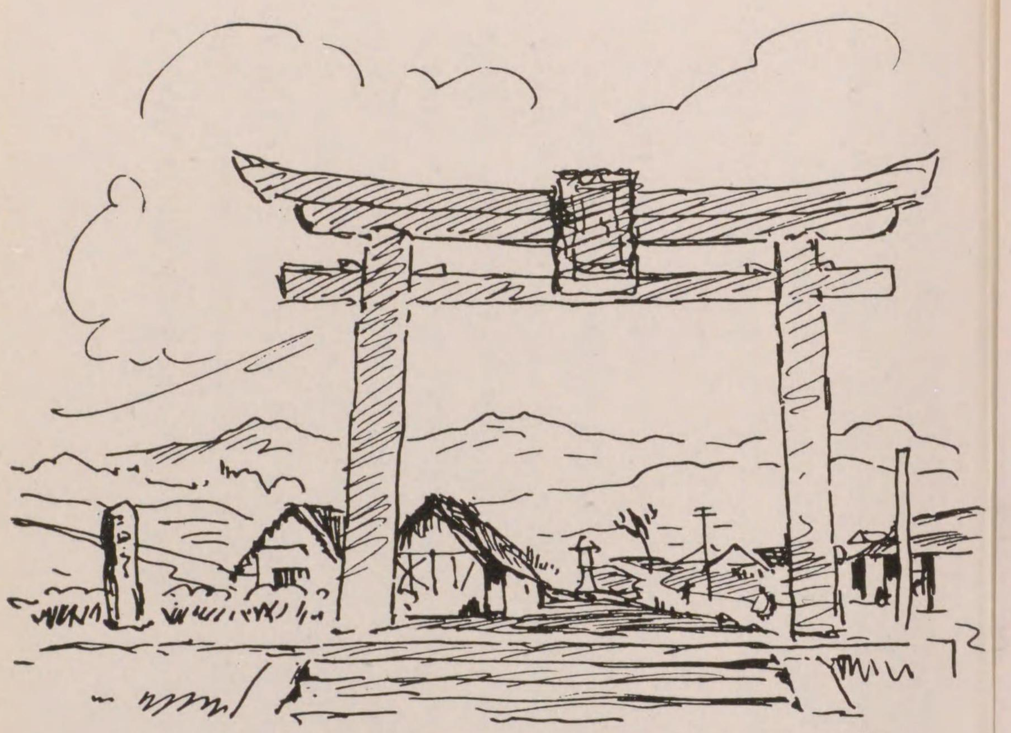
人の生死こそは吾々の手で何うにもならない、それは天の約束と云ふものか、或は吾々の知らぬ或る大きな力に支配されて居て生まれる時から壽命と云ふものはちやんと約束が出來て居ると考へられるやうな氣がして來ました。老いたるものが先立つものとは決して極まつた譯ではなく、皆其人々の持つて生まれた運命とそれを申しませう。ですから、今日となつては致し方がないと云ふばかりです。私は息子の死によつて當初想ふにたゞ二つの道を選ぶより外はなかつたのです。悲しんで悲しんで悲しみ拔いて我身も共に失ふまでに陷るか、又一方、反對に生き殘されたものゝ責任を感じ、息子の分も引受けて二人前の働きをする爲に奮起するか、たゞ此二つの道あるのみと考へたのです。そして私は無論まだ體が利くし元氣もある爲か、後の道を選びましたが、それが今思へばよくも自分は選擇を過らなかつたと感じて居るのであります。

私は朝に夕に伴よ此私の體を共に利用しくれよと念じます。そして父は御前の心を今悉く汲む事が出來るぞ、御前は父の心を理解して吳れよと聲かけて居ます。更け行く夜半の床の中に、私は既に御前と別れはしたが、これは決して永久の別れではない、かりそめの別れ一時離れての生活である、必ず父がそこへ行つて御前に又遇ふ時がある。その時こそは永久に離れずに住む事にしやうと言葉を強めて語る事にして居ます。

私は今は樂しみもし笑ひもします。それは最早私一人の樂しみではなく笑でもなく、伴と私の二人の心からであると思つて居るのです。

伴の肉體は既に野邊に朽ちて居りませう。それは確かに失はれては居ります。然し、精神は此世に私と共に尙も留まつて居らぬとは誰が考へられませう。靈魂は死後に殘るとも殘らぬとも證明が出來ませぬ以上、有ると思へば有り、無いと思へば無しでも通りませう。私はそれ故有ると信じて居り、又必ず有るに違ひありません。

魂が立派に殘つて何時迄も家にあり此世に有りと考へてこそ朝夕亡き人達に供養する事も理に叶ひませうし、祖先の位牌に對し誓をたてる事も出來、祖先の靈を時に應じて迎へて供養したり、忠臣や偉人の靈を敬ふ道理になり、身は死しても魂は國を護り、家を守るやうに考へられて參ると思ひます。



とつ見てつ主に苫居島ハ一の北神山淡
る元見が山恐波市にく遠

これ永久に我が國の良風美俗の基であると考へて參るならば、たとへ世が如何に進むか知らないが、靈魂が死と共に殘らぬなどとの考でも起る時は、それこそ我々の精神の基が無くなつてしまひませう。あなたの御子さんと云ひ私の伴のいひ、靈は立派に私共と共に今もあると固く思ふべきです。さうではありませんか。

私はいつも伴に遇ひたいと思ふ時、私は必ず夢に伴と語らひます。伴は何時も滿足な面持で元氣に私に言葉をかけて呉れます。此老いたる父が此頃益々腕も冴え、一しほ業にいそしむ事の出來るのは伴が身を殺して私に與へてくれた教訓と思ふのであります。

今あなたは失禮ながら迷つて居られる。心が極まつて居られない。まことに御氣の毒なことであります。家鄉を後に遙々此遠い都に來られたのも全く御佛の御導きによるものと有難く思はるゝがよい。そして本當の信仰を得て土產になさるがよい。信仰は力です。信の無い人の心は浮草の如きものです。してまた奈良の都と一口に云ふものゝ中々に廣く、彼處の村に此處の野邊にと御寺の數々も中々に多く、御廻りなさるも容易の業ではなりません。斯うやつて、御互に愚痴などこぼし合ひまするのも何かの御緣、御差支なくばゆるゆると此家に御泊りあつては如何。初めての客人を迎へて飛んだ長話をきかせてしまひまして御無禮至極で御座いました、これも老人の常、自分の身にとつてせめて此上な

い慰めの一つ、又伴への功德、御詫やら御禮申上げたいやらで。」

平常はたゞ用の口しかきかぬ何か物想ひに沈み勝ちであつた老爺も、此時は別人のやうに、それからそれと語りつづけ、了つてほつと一息ついたのであつた。

「左樣で御座いましたか、斯う承つて居りました間に私は初めて何物にか觸れた心地がして參りました。今まで人から色々に聞かされましたが、今と云ふ今程心銘じた事は御座いません。結構な御話で私は何んと申してよいやら判りません。全く私があなたの御話を承る事が出來たのも態々こゝに參つたからであります。これこそ有難い御佛の御導と申すより外はありません。只今まで、私は大きな夢を見つゞけて參つたのでした。そして自分だけが世にも一番不幸な人間と悲しんで來たのでした。だが今と云ふ今、凡そ人として貧富の差別や位冠の高下は全くなく、皆平等に大いなる力の前にさらされてある事が判りました。

私は生きて居る限り伴の爲と自分の爲に立ち上りませう。此の世の中に生命を戴いて斯うして日の目を拜んで居る有難さがはつきりと判りました。

斯う悟りをあなたから戴いた上は一日も早く國へ歸りまして自分の仕事である農事に再び、それこそ甦つた氣持でとりかゝる事に致します。」

と旅人の面には見違へたやうな明るさが見え、體中には赤い血潮が勢よく流れ始めたかのやうに見受けられるのであつた。

老爺は語を繼いだ。

「さても肉身を失つての悲しみといふものは、私等御互自分を中心として考へる事から起るのでありませう。私には最早男子は無いが然しこゝに娘が居る。其娘が軈ては子女の母ともなれば、私の家の血筋と云ふものは立派に繼がつて行く譯であります。

小さく云へば私共一家の血筋となりますが、よくよく思へば、私共がこれまでに來るまでには現在私が他人と思つて居る他家の人達と源は同じ血筋に溯る事になるに違ひないではありませんか。して見ると私共が一家として、たとへこのまゝに了つたとしても決して決して私共は永久に消え去つてしまふと云ふ事にはなりますまい。これこそ國家の全部の人達が日本人として同じ血潮を受け、同じ國を想ふの魂に滿ちて居ると云ふ事が判つて參るのであります。

今私の家も此私で了りとなり、又あなたの家にしてもあなた限りで了るとしても、他人と思つて居る多くの家に子供が澤山に生れて、それが皆それぞれ一家を爲して榮えて行くならば、大きく日本人と云ふものの繁榮となるのでありませう。

私共は人間として感情を持つ限り常に自分に最も近い人達にのみ氣を取られ、悲しんだり喜んだりして居るのですが、もつともつと心を大きくして同じ自分の國家とか國民とか云ふところに心を配つて見る事が何より正しい道ではないでせうか、使ひ古した道具は軈ては壞れて行きます。すると又新しい物を求めませう。人間とても壽命の限りは生き軈て死の時が來れば自ら去つて新しい者に代つて行きます。一つが失はれる代りに二つが生ずれば、全體としては決して悲しみではなく大いなる喜びと想はねばなりますまい。」

旅人の眼は輝いて來た。老爺の說く事の一々が道理あるやう胸にこたへたからである。そこで彼は老爺に問ひかけた。

「一々御尤に存じます。さればあなたには尙娘さんが御ありだ、然し私には最早息子も娘もありません。それでは何うして一家の血筋が繼がれて行くでせうか。」

熱心に問ひかける旅の人。

默然と耳傾くる老爺の姿は薄暗い燈心の光で照らされて居る。老爺は暫しあつて靜かに頭を上げ旅人の顏をぢつと見つめて曰ふ。

「成る程御考は無理もないところ、然し私が今申した事柄はもう一層廣く押し進めて考へていたゞきたい。自分の後を子孫に繼がせる事は單に同じ血緣と云ふだけでよいものではありますまい。血を繼いでさへあればそれで人間としての役目が濟むと思ふならばそれでよいが、國の爲や世の爲にならぬ子孫がいくら澤山出來て繼いで呉れたとて、それが決して人たるの誇りをもたず國への奉行となる譯のものではないでせう。それよりも今申上げた肉體とは別に精神力と云ふ事を考へて見て下さい。

あなたの御子さんが生きて居られた間にどんな事を爲されたが、早世される方だけに近所、近鄕の人達に必ず尊敬される程の方であつたに違ひない。正しい御考の方、よく働いて勵まれた方、又あな

た方御兩親に及ぶ限りの孝養を盡された方、我身を忘れてひとに親切に盡され、然も將來國家の爲に美しい御働きをせられるやう固い覺悟であつたに違ひない。如何です、恐らく私の申す事は親御としてあなたもさう考へられて居らるゝでありませう。

そこです。そのあなたの御子さんの人格、つまり健全なる精神力こそは、他人の心の內に深く〳〵浸み込んで、多くの人々に好い感化を與へられたのであります。つまり決して無駄に生きられ、それ切りで了つたのではなく、肉體が失はれたにせよ精神が廣く他人に深く移つて働いて、今でも旺盛に活動して居ると考へられなければなりません。人は一代名は末代とは云へ名ではありません、精神力です。私の伴と云ひ、あなたの御愛兒と云ひ、決して犬死にされたのではないと思つて居ります。

此親の眼をはつきり醒させる爲に身を犧牲としたと考へなければ相すみませぬ。徒らに何時までも歎き悲しむ事が何んで子供の冥福となりませう。折角子供が死を以て親に教へて呉れた其心根を充分に汲取つてやつてこそ此上もない供養でもあると申されます。」

旅人の眼は曇つて涙が光つた。然し心の眼は益々輝き始めた。老爺は旅人に湯をすゝめた。自分も茶碗に一杯ぐつと呑み干して言葉をつゞけた。

寒村夕暮

奈良から法隆寺へ行く道すがら，右へ折れて法起寺から法輪寺の後の夕陽沈む丘に歩いて見ると，昔乍らの靜けさで音一つない。偶々カラスが頓狂な聲で竹藪に鳴く。其昔奈良の人々は此邊で杜鵑を聞いたのであらうか。

ライカ　エルマー 3.5　黄色 2 號 フイルター
パン X, 絞 f 6.3 $^{1}/_{40}$ 秒

「だが私はそれ程までに喜んで戴ける御話を致したとは覺えませぬ。お恥かしいほんの身の上話です。然し此土地に參られてあなたはより一層の強い人生觀と本當の力とを得て御歸りなさるがよい。人は如何なる境遇にあつても、常に自分は最も幸せな人間だと思ふ時にこそ道は啓かれ、發展があると考へます。それはともかく御疲れでもありませう。日頃語り合ふべき友とてはなく、たゞ斯うして娘相手にさゝやかに餘命を送る私として、偶に語り相手を得た事につい調子が乘つて、くだらぬ事を申上げたやうな始末では御座いますが、夜も早や更けて肌寒くもなりました。今夜はこれで御休みなされるがよい。また明日と云ふ日もある事ゆゑ、御遠慮は要らぬ、心ゆくまゝに今夜は御休み下さるやう。」

春とは云へ尙底冷えのする奈良の夜は厚い夜具を深く被るも寒さ身に浸む程である。燈の油も殘り少なになつて居るのを見て旅の客を一間に導き、娘と老爺とは互に此日の珍らしい出來事を思ひ浮べつゝ床に就いた。折柄閣を傳つて遠く近くの寺々の鐘の音が互つて來る。

◇

「昨夜は飛んだ御厄介になりまして忝う存じます。」

雨に明ける春日山

奈良ホテルのヴエランダから早朝の春日山に卿ふ雨雲を眺めた。春日野も未だ睡つて居るらしい。

ライカ　エルマー 3.5
パン X フイルム
絞 f 6.3 1/40 秒

春の陽は麗はしい朝である。遠近の山の枯木の肌は暖い陽を受けて赤々と輝き、霞のとばりにぼんやりと見え、早や庭前に鶯の初音も清い。老爺は心地よげに旅人の會釋を受けて居る。

「御早い御目覺めではないか、もちつと御ゆるり休まれたがよかつたに。幸ひ今日は天氣もよし近くの山にでも御案内申さうか、いやもうこゝがあなたの根城と當分極めて置かるゝがよい。老いたる吾々が斯う打とけ合へるのも何かの因縁に違ひないと思ひます。」

ハハハ……と、心からなる笑は老人の口元から輕く響いた。粗食ながら娘の給仕に樂しい朝食は濟んで、尚も盡きぬ物語の内に二人の姿は春日山つゞきの高い丘にあつた。

「御覽あれ、いともうららかなる此眺め。こゝに參つていつも私は盛大な都の姿を見る事を何よりも樂しみにして居るのであります。そらその足元に見えるのが造營中の東大寺で、二つの見事な足場は七重の塔大伽藍であるとの噂で、やがて大佛様がそこに開眼されるのでありませう。ちよつと左手に遙か遠く甍を連ねる邊りは、畏くも大内裏様であります。又左手に近く麓に見えるあの一帶の森と

廣々とした野原が春日野、そして向うに遙か見渡される山續きが葛城山で、こゝからは見えないが左手に遠く其山麓に太子様の御建立になつた彼の立派な法隆寺が御座います。如何です、此大和の地は國内否三國に比類の無い御盛大な都と申されるのも御得心がゆきませう。」

大内裏の北を東西に貫く北京極の大路から南へ一條二條と數へて九條大路、即ち南京極の大路に至る整然たる町割り、それに今二人の足元を南北に伸びて居る四坊大路、即ち東京極大路から漸時遙か遠く四坊大路、即ち西京極の大路にまで限られた此都の堂々たる街路と家並み、それが美しい土塀に圍まれて、白壁に丹塗りの柱、青瓦に照り映える美しさ、今さらに代々の帝が御即位にも都遷しを遊ばさぬやう御決定されて、廣く全國に向つて御政治の實を擧げさせられやうと、熱心に御力を入れられて營まれたパノラマが一大繪卷の如く現實に、今眼前に展開されて居るのである。老爺は旅人に向つて云つた。

「凡そ人として或る仕事に志す場合、事の何事にせよ、遠い〳〵先々の事を考へてせねばならぬと、私は常に若い者に云つて居ます。それだに今日若い者と云ふものは年寄りの言ふ事を考が古いなどと

申して聽いてはくれませんが、私共から見れば皆餘りに其時々々の考しか持つて居らぬ。大體近眼のやうな人間ばかりが多く、また何うでもよい小事にのみ心を配つて、少しも大局から物を見ぬ、つまりこせこせとして居つて、本當の大きい人物と云ふものは少いと私は常に感じて居るのです。

僅かの日數で少しばかりの想ひつきや働きで出來るものに何んとて碌なものが出來やう。少しばかりの仕事をして直に滿足したり得意になつて誇りもする。又それをえらい事のやうに褒めそやす邊りの人達も悪い。誰にもやれる事では到底大業は爲せるものではない事が一般に判つて居ないらしい。

然し人間と云ふものは、心掛け一つでどんな事でも出來ない事はない不思議な力を具へて居る。力を伸さうと堅く決意しさへすれば、先づ無限に伸びるに違ひないでありませう。多くの人々はそれをせずに居るだけと云へば實に國の爲にも世の爲にも勿體ない話です。

それには遠大なる考を持ち、こせこせする人間にならぬやうに自ら反省してかゝるより外はないでせう。年寄りの考は間違つては居りますまい。

又人の生命には限りがある。いざ働いて充分に力を現はさうとする頃は、既に中年から老年に入つて居る。そして間もなく其人は此世には無くなる事になる。

だから本當に大きな仕事と云ふものは、父から子、子から孫、孫から又次々と幾代にも重ね、承け

繼いで行く位の大きな覺悟が要するものだが、今の人達は、たゞ目先の事のみしか考へて居らぬやう私は思つて居るのです。

私の家業の刀作り、僅か一本の刀を打つに云ふに云はれず語られぬこつと云ふものがある。それが我子とて手を取つて斯うせよと教へられぬところで、自然自分の身邊にあつて共に働き見習つて居る間に自然に體得するものであります。知らぬ人は祕法と呼びますが、決して祕法と云ふ譯ではなく、忍耐と入魂の此二つしか種はなく、飽かず、撓まず、傍目も振らず、慾や名利を忘れてこそ、先づ一本の刀が作り上げられるのであります。名人と云はれやうなどと思つて掛かれば既に初めから間違つてしまう。何うかして自分一生の願ひの名劍を作り上げて見たいと思ふところに仕事と云ふものは伸びて行くのでありますが、魂を入れて事に當るどころか、僅かの間に人に知られやう、金を作りたい、よい身分にならう、高い位に上らうと、蟲のよい考をしてをつて、それが當然の結果ながら旨く行かぬと見れば、直にもやめて轉業したり、祖先の地を離れたりする。新しい慣れぬ仕事に轉業したりして、さう簡單に思ふ通り行くやうなものは世の中に在りはしません。若しさう旨く行くやうな人は神樣でなくば此上ない器用な人達に違ひなく、又其やうな仕事は、誰にも出來る程度の小さい仕事であります、又平凡なものに違ひないでせう。それで出來た結果は表層(うはつら)だけと云ふ深味も味も値打もな

い事にしかならない筈であります。

今御覽なされる此奈良の多くの寺々も、又其處に納められて居る數限りない佛像の一々には、それこそ父子代々の魂の籠つて成つたと云はれぬものは一つもない事をよく〳〵考へて見て戴きたいのです。さすればこそ此都の尊さが判り、一朝一夕に此榮は見られない事が御判りになると思ふのです。

たゞ一つの佛體すら仕上げぬ間に此世を去つた人達が、私共の知り人の間にも大勢數へられます。其子や孫までが、今其仕業を承け繼いで居ります。何んと云ふ感心な事でせう。然しさうあるのが當然です。

何年か何十年かの後には、其堂なり塔なり、物像の一つ一つが完成して行くのですが、誰がそれを見るのでせうか、今働いて居る人達は、何百年何千年先の遠い將來の人に自分の本當の仕事を見て貰はうと眞面目になつて居るのです。肉體としての存在は短くも、精神は何時までも働く譯です。

其堂が軈て數千年の後に幸にも世に今のまま殘つて、時代の尊さがつき、風雨の洗禮に遇つても變らぬのみか、芯の芯から仕事の出來榮えが人々の眼の前に開かれて現れると云ふ時にこそ、初めて今働いて居る人の志と云ふものが世の中に知れるのです。然し其人々は遠い昔に土と化して褒められる言葉も聞かれず、酬いられるところとてもない事になつて居ますが、そこに人間と云ふものの心掛け

の偉大さと尊さとがあります。私は時々さう一人想つては感じ入つて涙をとゞめる事が出來なくなるのです。

千年二千年と云ふ遠い將來の事は想つても及びません。然し其頃には之等の寺々や佛像は何うなるでせうか。人々に何う取扱はれるのでせうか。今私共が現世で行ふ事は佛教では死んでからも皆業(ごう)と云ふ力となつて何時までも其人の魂につきまとひ、次の世に生まれたとしても自分の幸ともなり、或は不幸の種となり畜生に生まれるか知らぬ因緣となる事が說かれて居ります。佛教と云ふものが人々の心の此世での不安を取除いて、惡い事はせぬと云ふやうになつて此方、世の中は和やかに暮らせる事になつたのですが、今のままに數千年後も人の心と云ふものは同じやうに何時までも穩やかであるか何うですか、それを私は考へ及ばない事ながら常に心にかゝるのであります。

若し一朝心のすさんだ人々の手にかゝれば、寺であらうが佛像であらうが、それは少しの値打ない代物になつて、或は取壞されたり、燒かれて灰塵にも歸しませう。實に勿體ない事だと、そんな事まで心配して見るのも老人の常であると感づいては、心の中で己れを嗤ふやうな時もあります。

幸ひにも此都は榮えて何うあつても彼の向うに見える廣々とした右京から先に續いて居る野原などまでが、家で一杯になつて、到底こゝの地では間に合はぬと云ふ御盛大になつての遷都ともなれば、

其時こそは恐らく國威は限りなく伸びて、唐、天竺は愚かなこと、廣い世の國々の庶民まで皇威の仁政の下に正業に服して此上もなく御目出度い事でありませう。然し其時が來ても、何うか今私共の時代の心ある人々が力の限り御造營申して居る此都の一つ〳〵が、是非とも此まゝ大切に保存されるやうにして戴きたいものだと、それのみ念じて居ります。」

老爺は力强く言葉を結んだものゝ、兩眼は時世を想ふあつい涙で濕つて居るのであつた。旅人は始終默つて聞いて居たが、いつか老爺の心と完全に結ばれて居た。

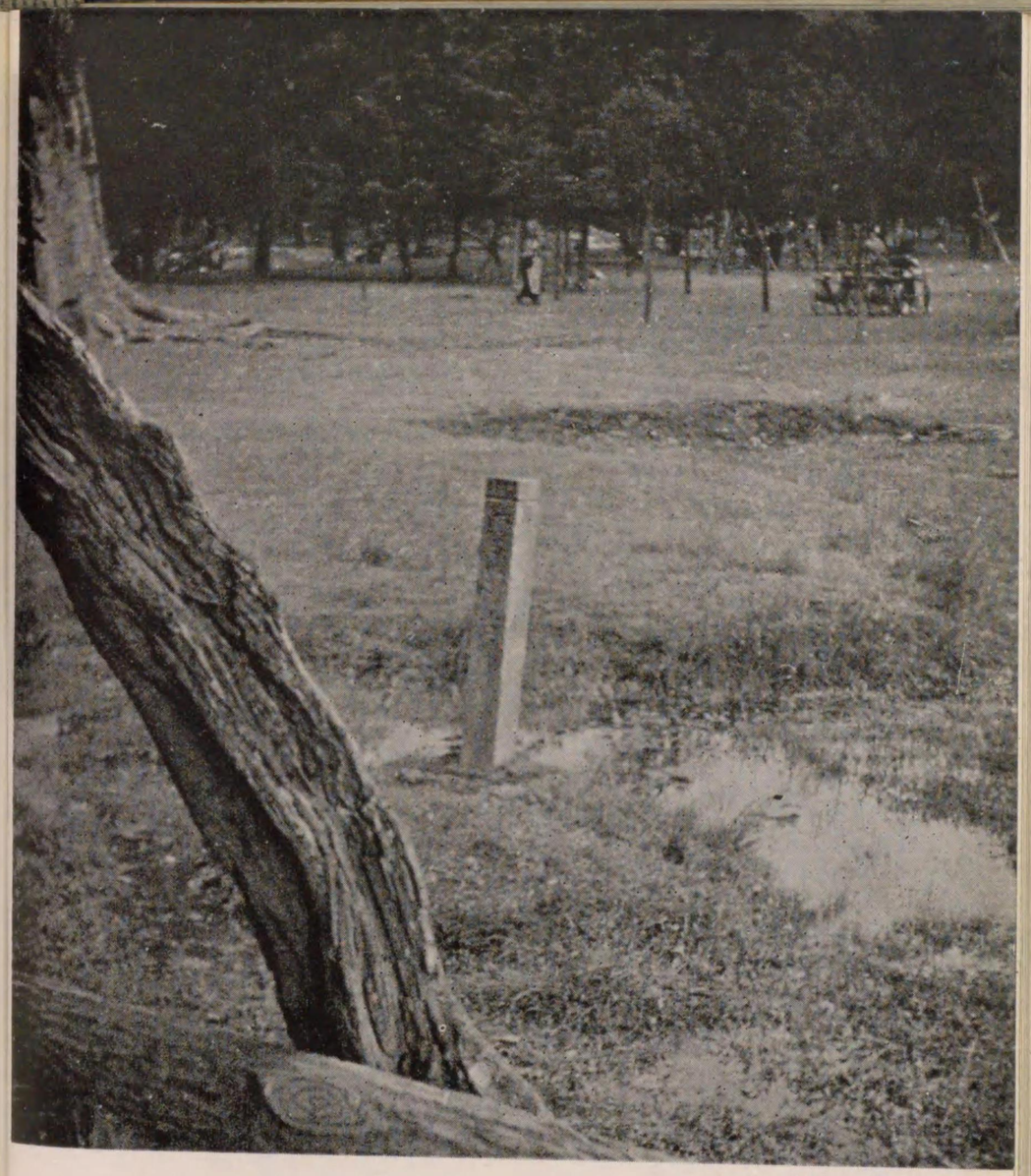
「それにしても、過ぐる推古の帝の御代から思へば、今の佛像も寺院も大分我が日の本の國の心持ちが加へられて來て居るのです。それと申すのも、決して私共は隋や唐の人達に何時までも導かれて居るのでない事が判ります。私共には私共の魂がある。それが技術の何處にか、自然に現れて參るのでせう。さうなければならぬ筈です。飽くまで私共は日本人として業に勵む事こそ人としての勤めであり、體の動ける限り、頭腦の働く限りは、事々に國家を忘れずに、どんな苦勞でもしなければならぬと思ひます。初めてお會ひした節のあなたの御樣子は、失禮ながら元氣の失せた廢人の如くに思は

れました。たつた一人さう云ふ力の無い方があるとしても、大きく考へますれば、國家の爲には何にもならぬ人と申されませう。今私共が自分の身を中心として考へる小さな問題などは何うでもよい、いつも何百年、何千年、先きの此國此世が何うなるかを考へて行くのが本當と思ひます。

私共は御互に老人ですが、老人とて決して徒らに月日を送る事は許されませぬ。共に勤めて勤め拔いて倒れるまでやらうではありませぬか、幸にも私は、偶然あなたと云ふ方が現れたので、殊に日頃の考を判きりとする事が出來ました事を此上もない事と存じて、心から御禮申上げたいのであります。

これからも尙此都の彼處此處と御案內申しませう。百餘年の前、推古の帝の御治世に、一世の天子聖德太子樣が御殘し遊ばされた數々の御治蹟を示す幾多のところを、是非御覽になつて戴きたいものと存じて居ります。私の家で充分其間おくつろぎなされ、そして鄕里に歸られる時は、失禮ながら別人になつて行かれたい。さうすれば恐らくは御連合の御心持も變られ、御力を得られて御病氣が御直りになるかも知れないと思ひます。」

嚴として所信を述ぶる老爺の口からは、又限りない同情と慈悲の言葉が溢れ出て盡きるところもない有樣である。



雪消澤

春日奥山

樹齢幾千年かと思はれる巨大な老杉晝尙暗い春日奥山の早朝である。今は見事な自動車專用道路が出來て居るので，私共は難なくこゝに來る事が出來る。十人で抱へ切れない程に太い杉の大木の彼方の深い谷底から，かすかに水の流るゝ音がきこえて來る。鶯の瀧と云ふのがその邊にあるときく。

ライカ　エルマー 3.5
パン X フイルム
絞 f 3.5 $^{1}/_{20}$ 秒

春日野にて

今も昔のまゝ廣々した春日野の氣分を寫したに過ぎない作品である。作風から云へば古いが，然しそんな考で寫したのではなく，氣分を味はふのが目的であつた。

ベビーパール　ヘクサー 3.8
さくらパン F
f 5.6 $^{1}/_{50}$ 秒

春日野に春の光は輝を增して來た。雪消澤と人の云ふて居る地には名殘の氷も夙くに消えて、天にすく〳〵と伸びて行くかの如き杉の並木の間には、早や綠の芝草が今年の奈良の野を飾る用意が整つたと云ふやうに、競つて地面から萠え出て居る。

春日の山には其昔より神樣が住まつて居られると人々は敬ひ尊んで登る人とてはない其神祕の境、奥山から時々里人を訪れて來るのは可愛らしい鹿の群であつた。

今此杉並木にちらりほらりと長閑な春を喜ぶ都の人達の間に淸楚なる衣服に被り物、氣品に富んだ面持、筋肉の確かりとした强さうな男子と少し遲れ勝ちながら共に歩んで居るうら若い女性がある。その女性こそは彼の老爺の一人娘であつた。

父は無論己れの可愛い娘の唯一の婿君として此青年を選んだのである。

青年は名ある佛師の家の子と生まれ、當時既に父の業を繼いで、天賦の技術は父の上にあると噂高く、而も己れの腕を誇らず、飽くまで人に謙讓なる態度を持つ稀れに見ると云つてよい立派なる人格者であつた。彼は長子として家を繼がねばならぬ。故に彼女は時來れば此青年の許に嫁して行く事に

なる譯なのであるが、青年は其やうな事には今以て彼女の父にも又娘にも話を進めないのである。

何故か、それには譯がある。彼は今一生の仕事とも云ふべき肝腎な事業が胸にあつたからである。常に愼重なる態度の彼は、輕々と人の耳には入れなかつた。

勿論彼は娘を充分に愛して居た。そして何時か自分の滿足する時期が來れば、進んで結婚の申出をする考へでもあつたが、若し迂濶に斯樣なる問題を口にしては娘にとつて申譯ない事があるかも知れないと常に心にかけて居た。それは一に關係して居る仕事の成否に外ならない。

勿論當時は男子十五歲、女子十三歲にして婚姻を許されたので、それは唐の開元二十二年に規定された制度を模倣したもので早婚であるが、一方絕體に自由結婚は許されて居ない。然し結婚する本人から仲介者を經て兩親に意志を表示してまとめる形式であり、親が適當な嫁を見出して息子を說服する形式ではなかつた事が後世とは餘程變つて居た。勿論人間である以上、昔とて戀愛はある、男子が美婦と相識つてこゝに至るまでには色々の問題も自然生ずる。「いつまでにいかに命ぞ大方はこひつゝあらずは死ぬるまされり」と情熱に燃える心を訴へた歌が萬葉集に殘る通りであつて、或は夕暮時に道ゆく人の談話などにより吉凶を判ずる辻占と云ふものをたより、眉の根が搔いと云つてもそれは戀ひ慕はれて居る證據だなどとも云つた。

娘としても心に映る青年の姿は消えやらうにもなかつたが、二人は理解ある老爺と、又青年の父の溫情とに公に交際を許されて居て、既に心は互に幸福に結ばれて居た。

「寧樂の都は陽炎の靑にしなれば、春日山、三笠の野邊に櫻花、木のくれ隱り、貌鳥は間なくしば鳴く、露霜の秋さりくれば羽買山、飛火がたけに、萩の枝を、しがらみ散し、さを鹿は、妻よびとよめ、山見れば、山も見かほし、里見れば、里も住みよし」と、又萬葉集にある歌のまま、殊に美しい長閑な此頃の奈良の都の人々の遊び場所の春日野は、今二人が樂しい語らひの土地であつた。

青年は明るい空を仰いだ。そして空に向つて勢ひよく伸びつゝある杉の若木が幾千年かの齡を保つ頃の此の春日野がどれ程美しく、又偉觀であらうかと思つた。そしてその時まで自分の今の仕事の變りなく保たれるやうに心の中に大きな希望の輝きを感じたのである。

◇

時は來た。聖武の皇の御代、卽ち天平十九年の九月二十九日、皇紀一四〇七年、玆に靑年が豫ての願ひであつた東大寺大佛の鑄造が開始される事になつたのである。

抑々此大佛は金銅盧舍那佛で、聖武天皇の勅願によつて天平十五年十月に鑄造御發願の詔を下されたのであるが、最初は奈良ではなく、近江紫香樂に離宮を營まれてあつた關係もあり、其地に安置せらるゝ御豫定であつたらしくも拜察されるのである。

けれども東大寺と御決定あつて、この地嘗て僧良辨が創立した金鐘寺の寺域を擴大されて東大寺になされたところであるが、先づ天平十七年の八月二十三日に帝は金鐘寺に大佛の鑄型製作の準備を開始される事になつた。鑄型は一年餘にして出來た。そこで鑄型の大佛に對する供養が天平十八年十月六日に元正上皇及び皇后樣の御臨場の下に行はせられたのである。式は午后八時から四時間もかゝり像の前後には一萬五千七百餘燈が點ぜられ、數千の僧が脂燭を捧げて像を照らすといふ壯觀である。

翌十九年九月二十九日愈々鑄像が始まる。青年にとつては其腕の冴えを示す日なのである。

さて數千年も數萬年も後に傳へやうとの固い決意になるこの大佛の巨像は、何うして一度の流し込みで出來上らう。

これよりさきに聖武の帝が鑄造の發願をせられた時に餘りの巨像なので、進んで其設計に當るものが無かつた。然し大佛師國中連公麻呂が遂に此大役を御引受けする事になつたのである。彼は百濟人の子孫であるが、彼を援けて、專ら大鑄師として働いたのは高市眞國と高市眞麻呂と柿本男玉である

春日野の春

春日野を新藥師寺へと歩む道すがら左手をふと見上げた時，思ひがけぬ牡鹿の姿を見出したので瞬間にスケッチした。

ロライフレツクス 4×4 テツサー 2.8
パン F Y2 フイルター
絞 f 56 1/100 秒

が、青年の父たる人は勿論、青年自身もそれらの人と共に力を併せたのである。

見よ東大寺の敷地の内廣場一面に建てられた山の如くに高い足場、それに上り下りする大勢の人々、地上に設けられた湯釜の中には、銅、白鑞即ち錫、練金、水銀などが、それ〴〵に熱火を以て熔かされ、炭火の煙は天に冲して居る。

銅と白鑞とで青銅になる。又練金と水銀とは鍍金に用ひられるのである。

青年の頭には既に餘事は無い。無論娘の事など想ひ出す暇はなかつた。

世に最も偉大なる事業を實現させて、全國津々浦々にまで人の心を善導せんと計畫せられた帝の尊い御信念、それに己れの魂を打込まうと云ふ名工のやみ難い希望とは一つに凝つて、凡そ世に在る總ての物に超越した巨大なる佛の御姿と成つて、こゝに其外觀の偉大さも、又尊き教の力の根源となるのである。この巨體を納めるべき建物の建築が又如何に大事業であるかも想像に値する。

最初木の骨組で出來た大佛の全像の形、其上を土で塗り固めてこれが原型になるのである。

其上に鑄像の銅の厚さだけに熔け易い錫を先づ全部着せられた。

秋雨の東大寺南大門

剝げかゝつた丹塗の柱，古びた甍，黄色な葉，綠濃い松林。大佛殿の表玄關とも云ふべき南大門の秋は美しい。私はコダクローム天然色映畫にする傍ら，これを寫した。南大門の建築は奈良でも今は珍らしい天竺樣と云ふものである。

ロライフレツクス 4×4 テツサー 2.8
パン F, Y 2 フイルター 絞 f 5.6 1/50 秒

錫で被つたので既に大佛の外觀は見られる事になつたが、更に其上を又土で厚く全體を塗りあげてしまつた。

さてこれからが本格的の大佛鑄造である。人々は一層緊張して來た。愈々銅は熔かされた。高熱の銅の湯は巧みな裝置によつて二枚の土壁の間へとすさまじい瓦斯煙をあげつゝ流し込まれて行く。

高熱の銅の流れは熔け易い錫を忽ち熔してこれと置き代つて行つた。

此操作を三ヶ年間八回に分けて巨像の下部から次々と行ふて漸く出來上つたとき、內外から土を剝ぎ取り、遂に鑄銅だけで出來上つたがらんどうの大佛が生まれた。この驚くべき巧妙なる方法が此古に人々の頭腦で考へられ、且實行されつゝあるのである。

重い銅の巨像は此まゝでは自重に耐え兼ねて歪む心配があるので、木材で更に內部に骨組を作つて支へなければならない。

天平二十一年（天平勝寶元年）の十月二十四日鑄造は故障なく完成した。これに要した熟銅は七十三萬九千五百六十斤、白鑞が一萬二千六百十八斤、練金一萬四百三十六兩、水銀五萬八千六百二十兩の巨額と傳へらるゝのもさこそと感ぜられる。

然し鑄造の完成に先だつ事僅か同じ年の二月に陸奧に產金の事あり、これが朝廷に獻ぜられた事は、

どれ程此大事業に貢獻したか想像の外である。

「皇の御代さかえんと東なる陸奧山に黃金花さく」

と時の歌人大伴家持は御祝に詠じた。

見よ、五丈三尺五寸の巨像は茲に出來上つたばかり、鍍金の輝きも一きは美しく、これこそ遠い世の人々にも、奈良朝の誇を傳へる唯一の製作物である事は勿論である。

茲に世に誇る大佛の尊像は出來上り、又それを收む更に驚くべき巨大な堂の建築は猶も續行されて居た。

そして天平二十四年卽ち天平勝寶四年（皇紀一四一二年）四月九日の吉日を以て、愈々佛作つて魂を入れる大佛開眼の儀式を執り行はせられるまでに順調に運んだ。

春日山の山裾が漸く平らかに伸びたそこは飛火野や春日野あたりの一帶の廣々した芝原である。常の如くそこには靜かに鹿が群を爲して遊んで居り、森の杉に交つて櫻の花が眞盛りで、繪の如き風景とは凡そこれを云ふのであらうと思はるゝ美しさ。

明るい陽の光は豐かに地上の一切の物にふりそゝがれ、それに今日こそは奈良の地は勿論、遠い國の人々の心さへも歡喜に湧立つ盛儀の日である。野のそこ〻には上流の子女達が芹や若菜を摘みに集まつてゐた。眞赤の上衣の童兒、總角（あげまき）の髮の娘、さては無地の鬱金色の上衣に白地に單純な花模樣の裾の處女らしい樣々の女性などが嬉々として戯れ、そよ風はながく垂れた衣服の紐や肩からかけた薄物の領巾（ひれ）をゆるがせる平和な日の事である。折柄餘韻を杉林に曳いて力强く鳴り響いたのは東大寺の鐘であらう。此人々ははつとして、けふぞ東大寺の開眼供養の日である事を想ひ出した。

飛火野から南大門へと人々は歩を向けて急いだ。すでに道には平城京の庶民が集つて、烏帽子に袴の老人や、又粗末な草履に粗服の女達、勿論上流の人々も居たに違ひない。筵を敷いて坐し、式の進行につれて有難さの涙にむせぶ有樣が想像されて來る。さて聖武上皇は光明皇太后と共にこれを御喜び遊ばされて親しく軈て始まる大佛開眼の未曾有の御式へと行幸相成るのである。

大佛に面して三つの高座が設けられ、屈强の衞士の固めも嚴かに、中央には孝謙天皇、右には聖武

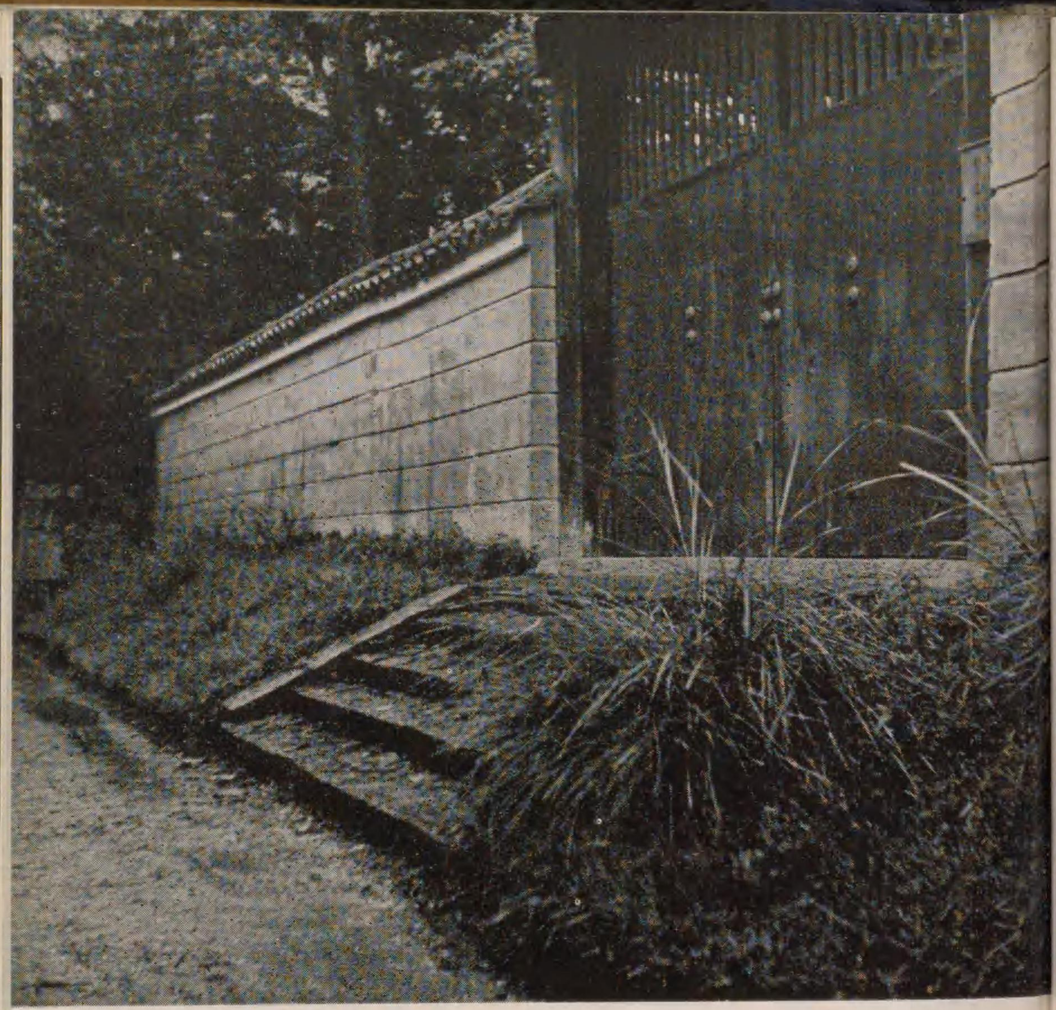
上皇、左には光明皇太后が禮冠禮服を召されて着座せられた。其下の左右兩側には吹通しの厨子があつて、右の方には良辨僧正、左には隆尊僧正が着座、又其下の方にはお三人の帝の女官やら儀式に關係した役人等、殊に眼を惹くのは一萬人の參列僧と何千人と云ふ高貴の人々、流石に廣い東大寺の境内も立錐の餘地ないと云ふ有樣である。

大佛樣の膝の下には印度から來た婆羅門僧正が着座、愈々式が始まる。式の次第は凡て正月元日の儀とかに準ぜられる筈。

そこに居並ぶ人、式に列した人達が一齊に咳すら洩さめやうに靜まつた。式の開始である。

春日の山を背景とする杉の木立に木魂して奏で始められた天樂のやうな樂は高麗樂、唐樂とか云ふものときく。其間に誦經の大合讀が交る。古今未曾有の萬秋樂と云ふのであるさうな。開眼と云ふほり、大佛像が僧正によつて御眼の瞳に大きな筆で墨が入れられる。御佛にこれで魂が入れられた事になつたのである。

あゝ、こゝに單に宗教的意味のみではなく、國家を護らうと云ふ政治的に又思想的に大きな役目を持つ總國分寺である東大寺が完成したのである。堂の內外壁も、柱も天井も眼もあやなる極彩色と繪模樣で眞に極樂世界をさながらこゝに見るかの如き美しさ。



大佛殿の裏門

餘り人の行かぬところであるが，私はいつも此邊から正倉院の邊りを好んで歩く。古びては居るが，朱塗の扉の門である。

ロライフレツクス 4×4 テツサー 2.8
パン F, フイルターなし 絞 f 8 1/25 秒

大佛殿裏道の秋

落葉は地上一面に敷かれてゐた。私はそれを踏む事さへ惜しい心地であつた。

曇 天
ロライコート トリオター 3.5
パン F 絞 f 8 1/25 秒

若草山より望めば、眼前に展開する奈良の都には、今や五十有餘の塔が林の如くそこ〳〵に聳えたち、殊に此東大寺の如きは三百二十尺に及ぶ七重の塔が東西二基、森の上に突出て居り、たゞたゞ眼を瞠らしむるばかりの壯觀であり、如何に天平時代の奈良が高渾富麗であつたか想像させずには置かないのである。

此事あつて暫らくの後の或る日、青年は多年自分の心から全く忘れて居た娘の事を想ひ出したのである。

功名を誇らぬ彼とは云へ、成し遂げた大事業の見事なる成果を見ては、凡そ生ある者として、優れたる人間としての眞心よりの喜びが止めどもないのは尤もな次第である。

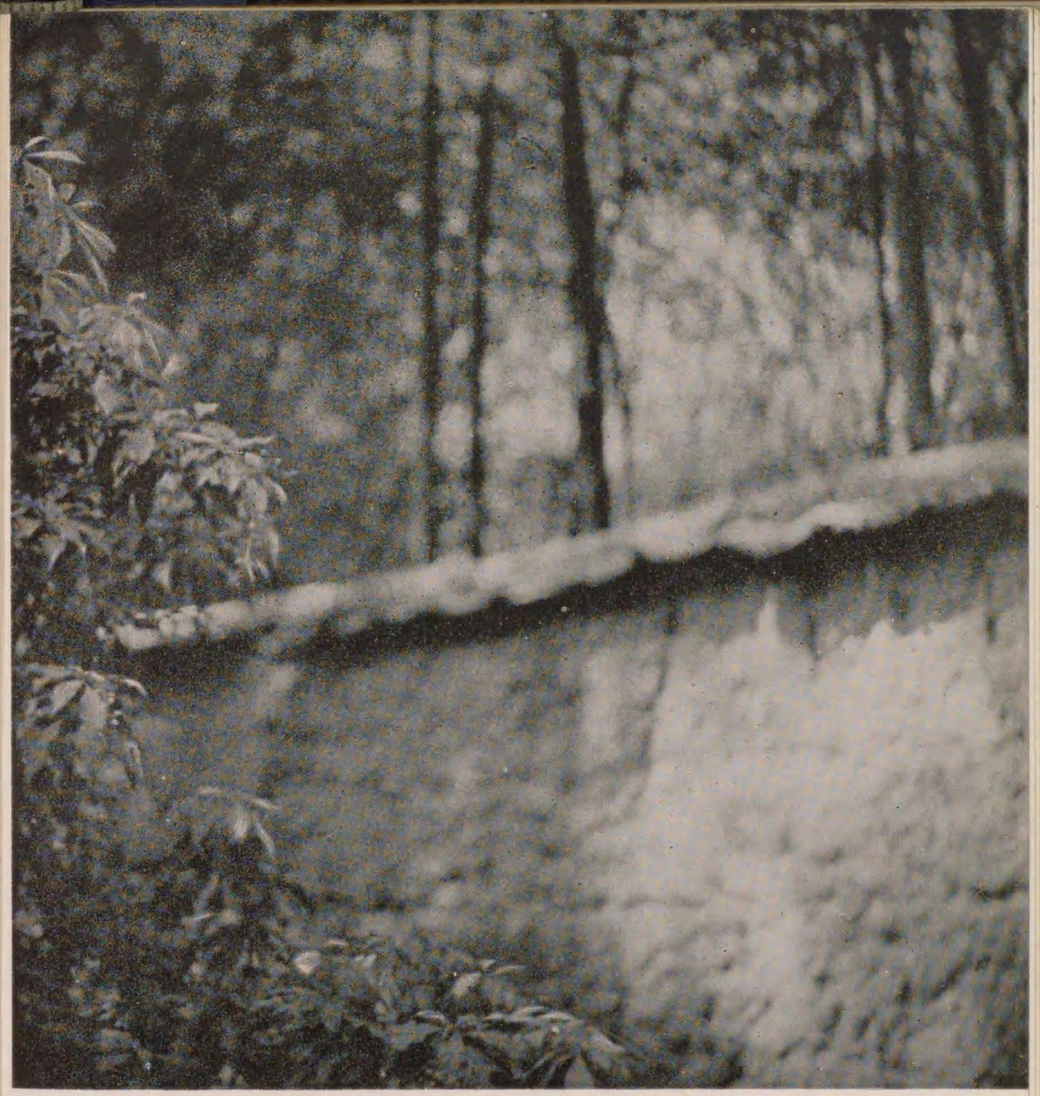
この喜びに加へて、今や青年と彼の日の娘とは固く〳〵結はれる幸福さへも實現したのである。

それにしてもいつかの旅の人は其後如何になつたであらうか。

◇

私は今正倉院前のひと氣ない貯水池の畔の軟かい芝生に坐して櫻の花吹雪を滿身に浴びつゝ創建當

時よりも小さいとは云へ、猶巨大な大佛殿を背後から靜かに眺めながら往時に想を馳せて此物語の筆を執つて居たのである。これは私がこゝでほんの一時心に浮んだ物語の筋に、多少歴史に傳へられて覺えて居た事柄を織込んで書き上げたもので、充分其後に史書に照らし合はせたものの、素より淺學の私の事であるから考證上の過失も或は有るかと虞れる次第である。一言こゝに御ことはりして此項を了る事にする。



馬　醉　木

奈良の景を飾るものは馬醉木であらう。春日山のあたりは勿論大佛殿の居廻りにも可憐な白色の鐘形の小さい花を咲かせて居るのを見るであらう。此時には折惡しく花が無かつたが，私は大佛の南大門の外の竹藪でこれを寫して來た。　ベビーパール　ヘクサー 3.8　パン F　Y 2 號 フイルター　絞 f 3.8 1/50 秒

「大佛開眼」の撮影について

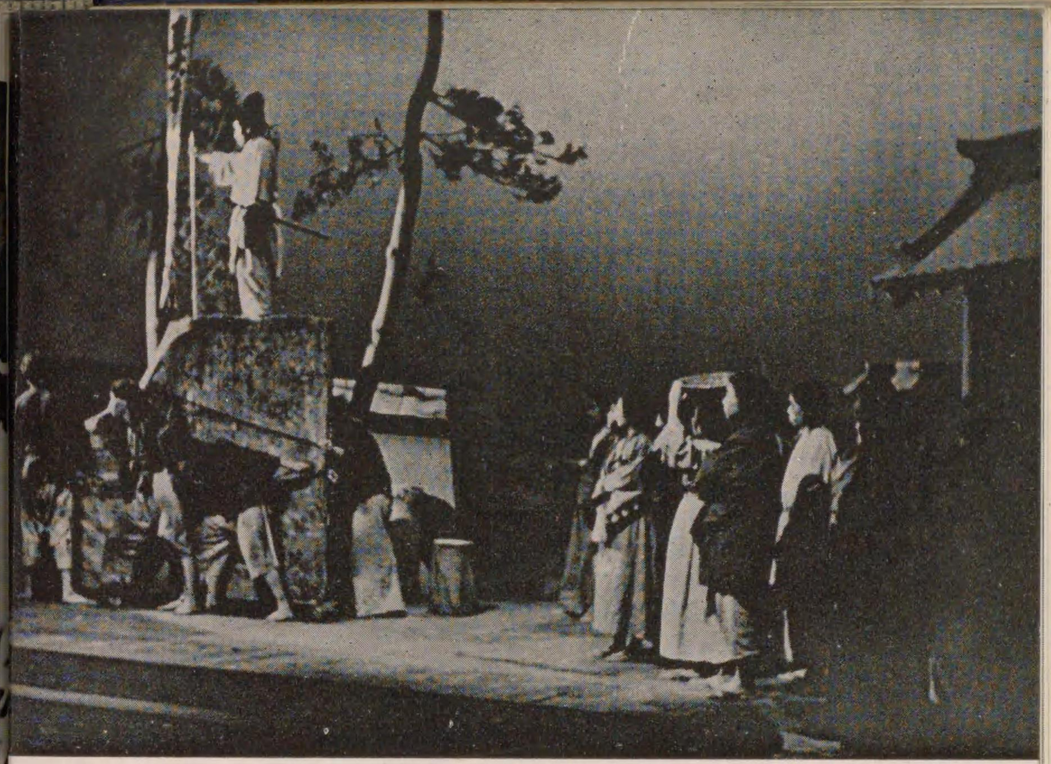
本書が既に印刷半ばに當つて、偶然にも私が「春日野繪卷」中に扱つた大佛開眼の場面を彷彿せしむる劇が、築地小劇場に於て新協劇團によつて「大佛開眼」の題名で五十有餘日間滿員の盛況裡に演じられる事になり、私共は幸にも劇團とオリエンタル社の好意によつて、三月十三日その撮影の機會を與へられた。此「大佛開眼」と云ふ劇は大正八年に長田秀雄氏が御作りになつた戯曲であると聞くが、私は今回初めてそれを知つた次第で申譯ない。私の春日野繪卷は此見事な戯曲のある事を知らず私が二年前に全然別に奈良で感じたまゝに筆を執つたのであるにも拘らず、餘りにも私の記事の挿畫に近い場面を眼の當り示された爲に、私は特に當日其旨を劇團の瀧澤修氏に若し印刷中に間に合へば挿畫にこれを用ひたいと話して、御承諾願つた次第である。多年氏とは寫眞の上で屢々御會ひして居た仲でもあり、又特に寫眞に就いて深い理解を持たれる新協劇團の事でもあるから、私の希望を勿論即座に容れられた事を非常に幸と思つてゐる。

「大佛開眼」の筋書はそれ自體非常に立流なものであるが、遺憾ながら紙數の關係でこゝに採錄は致し得ない。たゞ其澤山な場面の中に私は特に私の記事に出て來るものと同じ當時の有樣を示す材料になると思はれる場面のみを玆に解說を附せずたゞ挿畫として並べる事にした。此日私の使つたカメラはキネエギザクタ、テッサーf 2.8（焦點距離5センチ）付で必要に應じてマイエルテレメゴールf 5.5焦點距離15センチを併用したのであるが、テッサーの方は常にf 2.8を開放して1/25秒で用ひ、テレメゴール望遠の方はf 5.5開放で1/10秒を以てした。同時にフイルムは割合使ひ慣れて來たアグフアのウルトラスピードを用意して行つたが、此時初めて手にしたオリエンタル社製パンXフイルムリーダー付のものゝみを用ひ、現像液はアルスの微粒子現像藥を使用した。タンク現像器はキング35ミリ專用器である。

さて結果から見ると、電力不足の爲に、餘り舞臺の照明が明るくなかつた爲か、又私の現像技術が下手であつたか、要するにハイライトには非常に肉が乘り過ぎ、暗部は極端に不足で、つまり私自身にも非常な失望を感ぜしめた程にコントラスティーな出來榮えであつて、到底人前に出せる自信などのないものである。たゞ私の最初からの止むに止められぬ希望のまゝに是が非でも何んとか寫眞に作り上げて挿畫にして見たい心から、玆に甚だ拙作ながら數枚を掲げる事にしたのである。

私が常に撮影會などの經驗で感じて居る事は、やはり私の如く遙か後方に遠慮しつゝ、前の頭を避け肩の間から無理にもカメラを覗かせて寫して居るのでは到底希望するポーズ或は構圖など得られるものでないと云ふ事であるが、此時もこれと同じく又殊に15センチの長焦點のテレフオトレンズを付けて1/10秒と云ふ遲いシヤターを、カメラ手持で扱ふ事が如何に無暴であつたかと云ふ事と、更に斯樣な舞臺撮影には少しでも明るい卽ち大口徑レンズを持つ事が有利であると云ふ此三つの事柄であつた。但し、私は日常芝居や、レヴュウ等を殆ど寫す事がなく、大抵野外風景のみを目的として撮影して居る爲に、こんな場合には私のカメラの力が如何に足らないかと云ふ事も考へられた。

折角各方面の御骨折にも拘らず、眞の拙作にのみ了つてしまつた事は、劇團の方々に對しても申譯ないと感じて居る。玆に一言御禮旁々心から御詫び申上げたい。



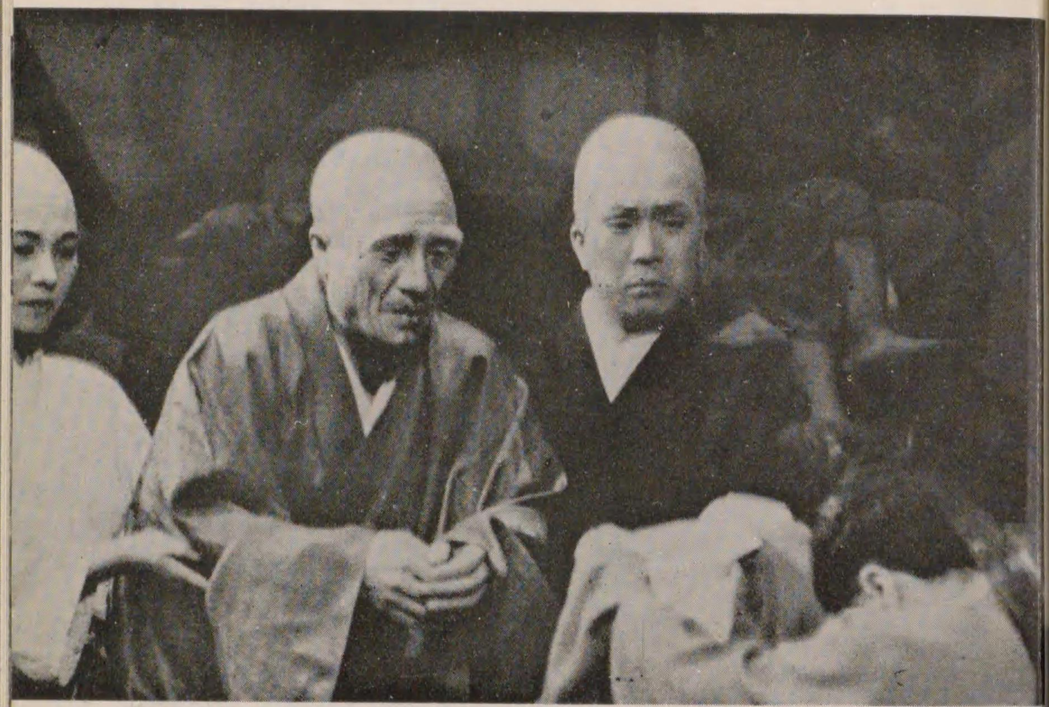
1. 山背國木津の部落
驛丁前の道路

（大佛造營の物資を運ぶ道筋）

パンXフイルム
テツサー f 2.8　5cm レンズ 1/25 秒
ロングで寫したが，感光が不足してゐる。

2. 見物の庶民達

パンXフイルム
テツサー f 2.8　5cm 1/25 秒
近くから寫したが之も感光不足。
無理に現像を押したので，ハイ
ライトのみ肉が乘り過ぎてしま
つた。

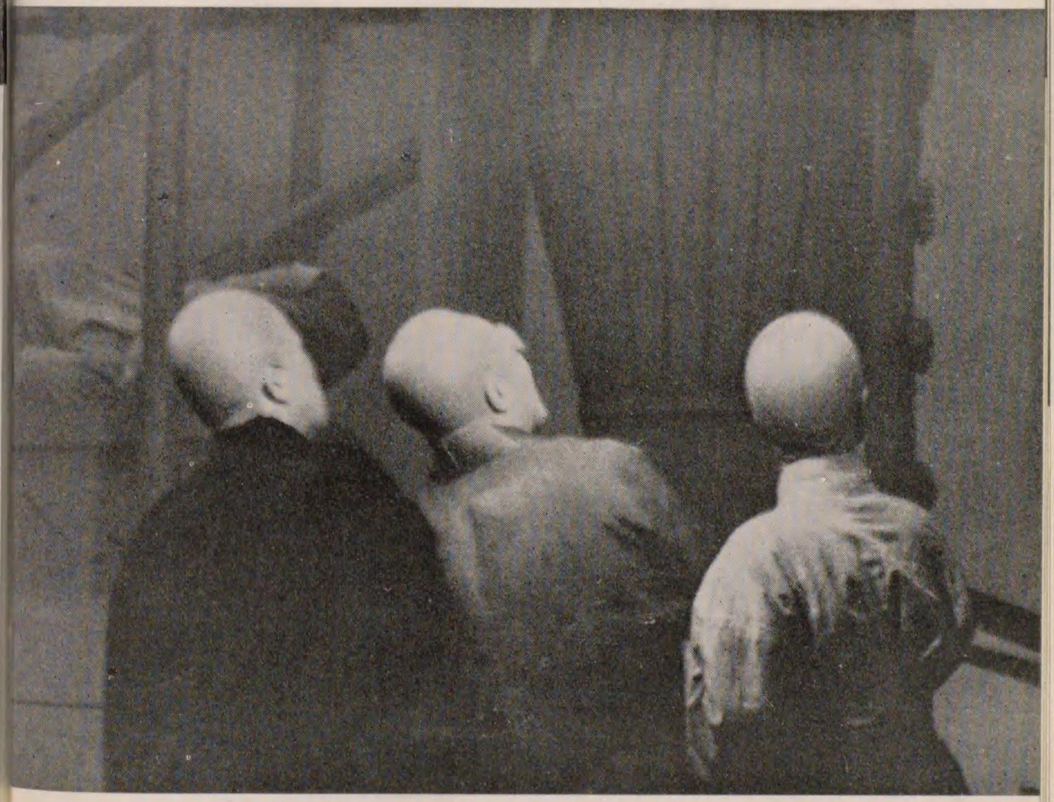


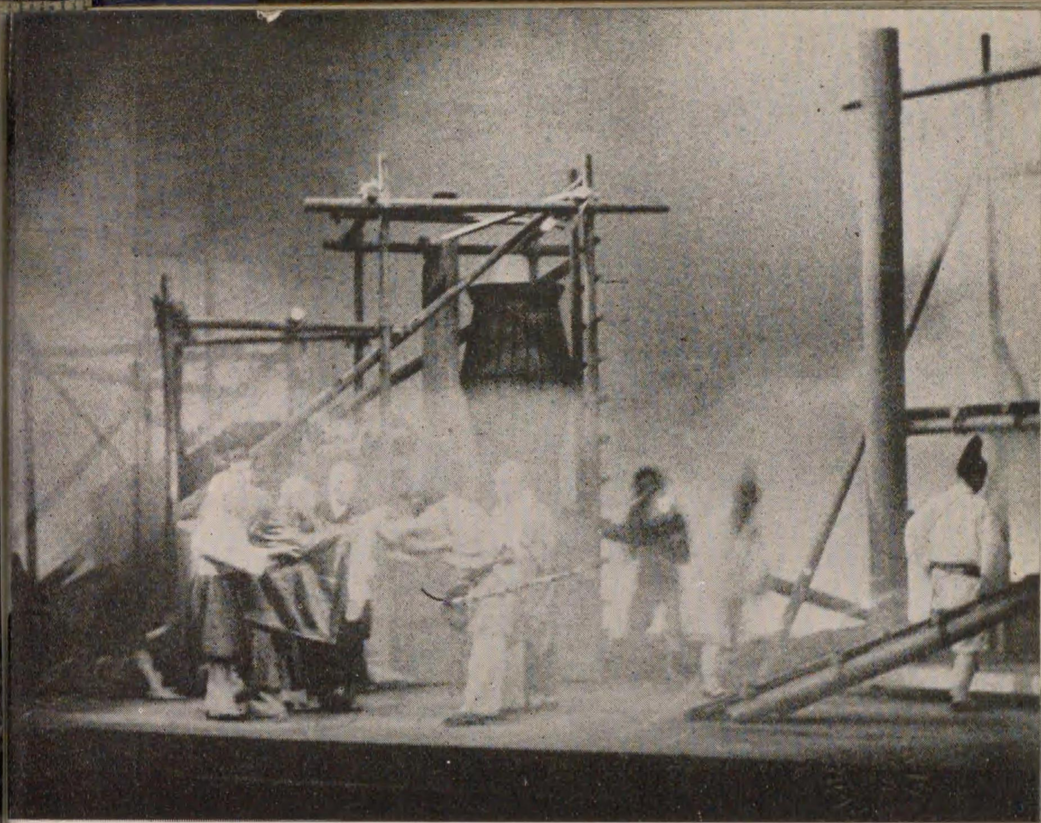
3. 大佛鑄造を見上げてゐる僧侶

パンXフイルム
テツサー f 2.8　5cm $^{1}/_{25}$ 秒
光量不足の爲か，露出やゝ不足であつた。ライカ判中の割合小さい範圍から引伸す。

4. 瀧澤　修氏の扮した左僧正行基

パンXフイルム
テレメゴール望遠 f 5.5　15cm $^{1}/_{10}$ 秒
カメラ手持で約10米の距離から寫す。
カメラは少しづれたが，止むを得ない。

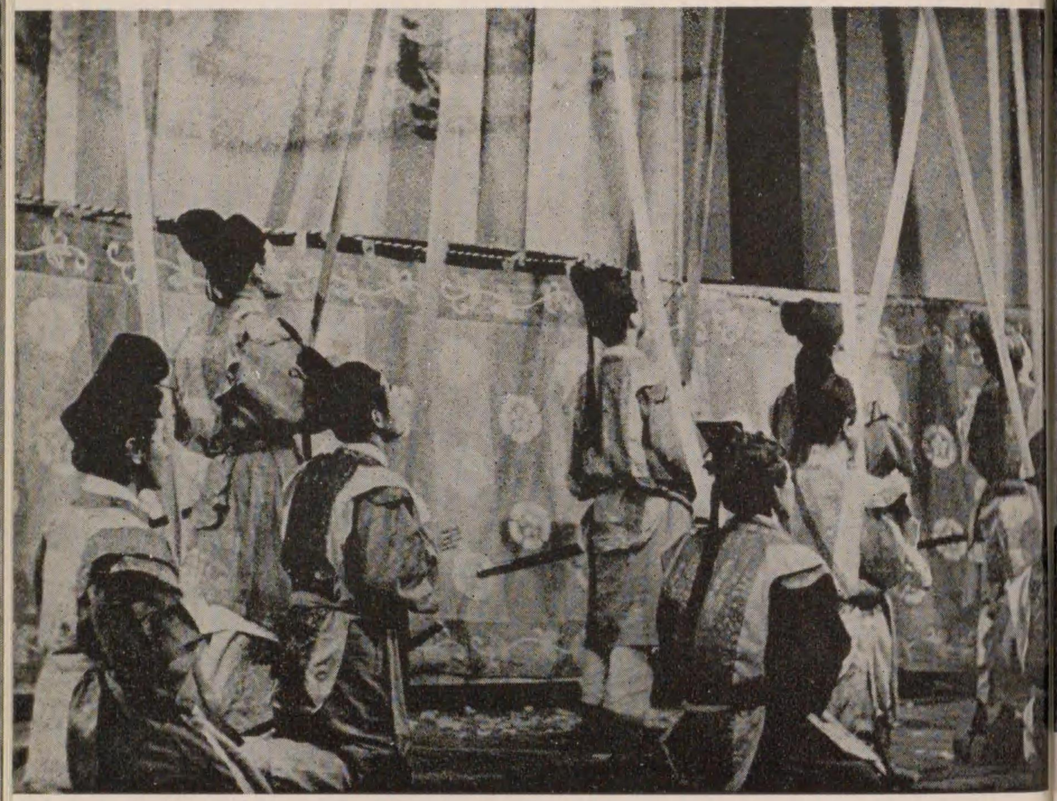




5. 大佛爆發

天平十九年五月鑄銅の際，左少辨の奸計によつて，ひそかに湯口に水が注がれた爲，折角の第一回の鑄造が失敗に歸した。其時の爆發直後の光景である。——數枚撮影のうち，態態動的觀あるものを採つてみた。

テツサー f 2.8　5cm $^1/_{10}$ 秒
ロングで寫した。小範圍から引伸した爲，少し荒びてゐる。全面が現像斑のやうに見えるのは爆發の煙である。



6. 開眼の式典

パンXフイルム
テツサー f 2.8　5cm $^1/_{10}$ 秒
此感光は理想的であつた。たゞ美しい色彩美がこゝに單色の寫眞としてしか見られないのが遺憾である。

7. エピローグ・大佛の掌に踊る女

演出者伊藤道郎氏は，日本一大きい大佛の芝居を日本一小さい築地小劇場の舞臺にのせる事の大冒險である事を言はれてゐるときいたが，私は此舞臺面を見て實に心から感激した程の素晴らしさ，全く堂々たるものであつた。恰も吾々が引伸の際に小部分から力强い感じを以て構圖を選ぶ事と，此舞臺面のスペースの全部とが少しも違はないやうに覺えた。

パンXフイルム，テツサー f 2.8 $^1/_{10}$秒，ロングで寫す。
感光は適度。引伸は小範圍より。

南都の火災

如何に私共の如き粗末な家であつても、火事で燒けて見れば、保險金位では償へぬものが澤山にある。よく燒け肥りなどと云ふ言葉を聞くが、私は絶對に火事で得をするものとは考へない。灰に成つて此火から失はれた品物なり家屋なりは、もう此世に存在して居ない。假に私の品物にして見れば、一つとして自分の心が働きかけ、自分の眼がそれに注がれないと云ふものは一つもない。殊に國寶的の美術品や古建築物になると、巨匠名工が心血を注ぎ、一生をそれに投じて作られたものであるから其價値の大なる事などは論ずるも及ばないのであらう。

法隆寺などは防火の設備が全しと云はれるが、他からの火事はよいとして、內からの火事には何う云ふ心配がしてあるかを想ふのである。

冬になれば寺では火鉢も用ひやう、炊事の火も扱ふ。煙草も絶對に寺內で喫まぬとは限るまい。又此間の山科醍醐寺の火災の如き附近の山林からの山火事のやうな事もある。時々火事を出した高野山

の如きも惜しい事をしたと云ふ位で諦めたり、天災などと云ふてしまふ譯には行かぬと思ふ。要するに火事こそは大部分人の不注意と不用意に基くと云はねばならぬ。

さりながらそれが絶對に防止されたと保證し得ない限り、せめて寫眞だけでも撮らせて置けば、形なりと後世に傳へられると思ふので、度々寫眞撮影の禁止の愚に對する反省を私は叫んだのであるが何んとしても火災にかゝらぬ寺は此奈良にも少い事は歴史を調べて見れば直に判る事である。

法隆寺の再建非再建の問題が討議の的となり、最近又新聞紙上に現れた事など、今以て其確證を擧げ得ないやうであるが、これも火災が根本になつて居るのである。即ち一方には推古天皇第十五年の創立のまゝだと云ふ説と、他方には天智天皇九年に燒け和銅年間に再建されたと云ふ説とがある。

法隆寺發行の書物『法隆寺の建築』の中にも此事が掲げられてあつて燒けたのならば地面の中から燒瓦などが出る筈だのにそんな痕跡が無い、又金堂が當時用ひられて居た高麗尺によつてのみ各部分に完數の得らるゝ事や、中心柱の下の大空洞などの問題を擧げて反證の種にして居たり、未だ研究の餘地が大にあるなどとされて居るが、幸にも實物が現存する限り、將來研究の結果何れにか確定する

ものと云へやうが、これ程に千年以上前の火災が今日猶問題を吾々に投げかけて居る位に、火災の影響と云ふものは大きいのであると云へる。

但し燒けたにせよ燒けなかつたにせよ、其時代の差は僅か百年程のものであるとの事ゆゑ、樣式が立派に飛鳥時代を現して居る以上、吾々はこれを世界に誇り、飛鳥時代の昔を偲ぶよすがにする上に少しも變りはない。斯くも尊い國寶は是非不注意などによつて失つてはならぬ。

多くの寺々が火災に失はれた中に今こゝで興福寺の五重の塔が胸に浮ぶ。奈良の想出と云へば何人にも彼の猿澤池から見上げた此塔の強い印象があらう。關西線の汽車で見ても電車で眺めても、先づ第一に眼につく程に大きい此高さ十六丈五尺餘の五重塔は、成る程日本の五重塔中第二位に數へらるるものと云はれるだけあつて、非常に強い印象を人々に與へるが、此塔などは五度も燒失して居るのである。而も落雷による火災に三度、其他の原因で一度、又兵火に一度と云ふ有樣で、高い塔であるだけに落雷に見舞はれ勝ちである。私も數年前の夏、此塔の近くを歩いて居て突然夕立と頭上に近い雷鳴に出遇ひ、たゞさへ雷嫌ひな私が此度々の天災の事を想出して身をすくませた事があるが、さうして一回から一回と燒失又再建を繰返へす間に、工事の細かい部分はいつか時代的進歩を取入れて變

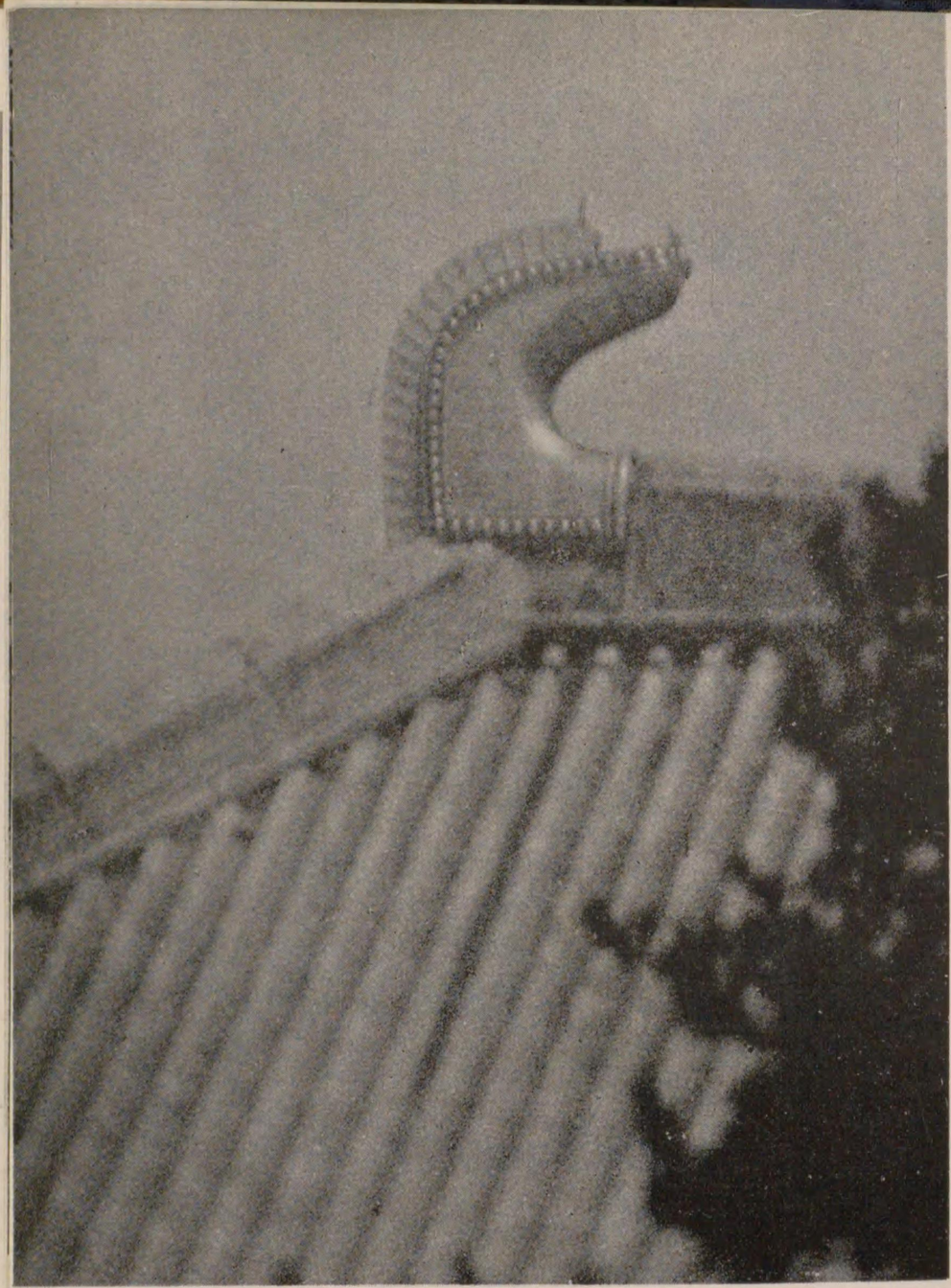
化して行き、完全なる舊態を忠實にとどめる事が漸時なくなつて行くものとしか思はれぬ。惜しみても餘ある次第である。

聖德太子が建立されたと云ふ大阪の天王寺の彼の有名な塔が、先年の室戸颱風によつて吹倒されて失はれたが、これも恐らくは以上の如く、次の再建には何處まで舊態を保つであらうか、まさか昭和時代だからとて鐵筋コンクリート製になるとは思はぬが、天平奈良時代の香りを何處までとゞめ得るであらう。

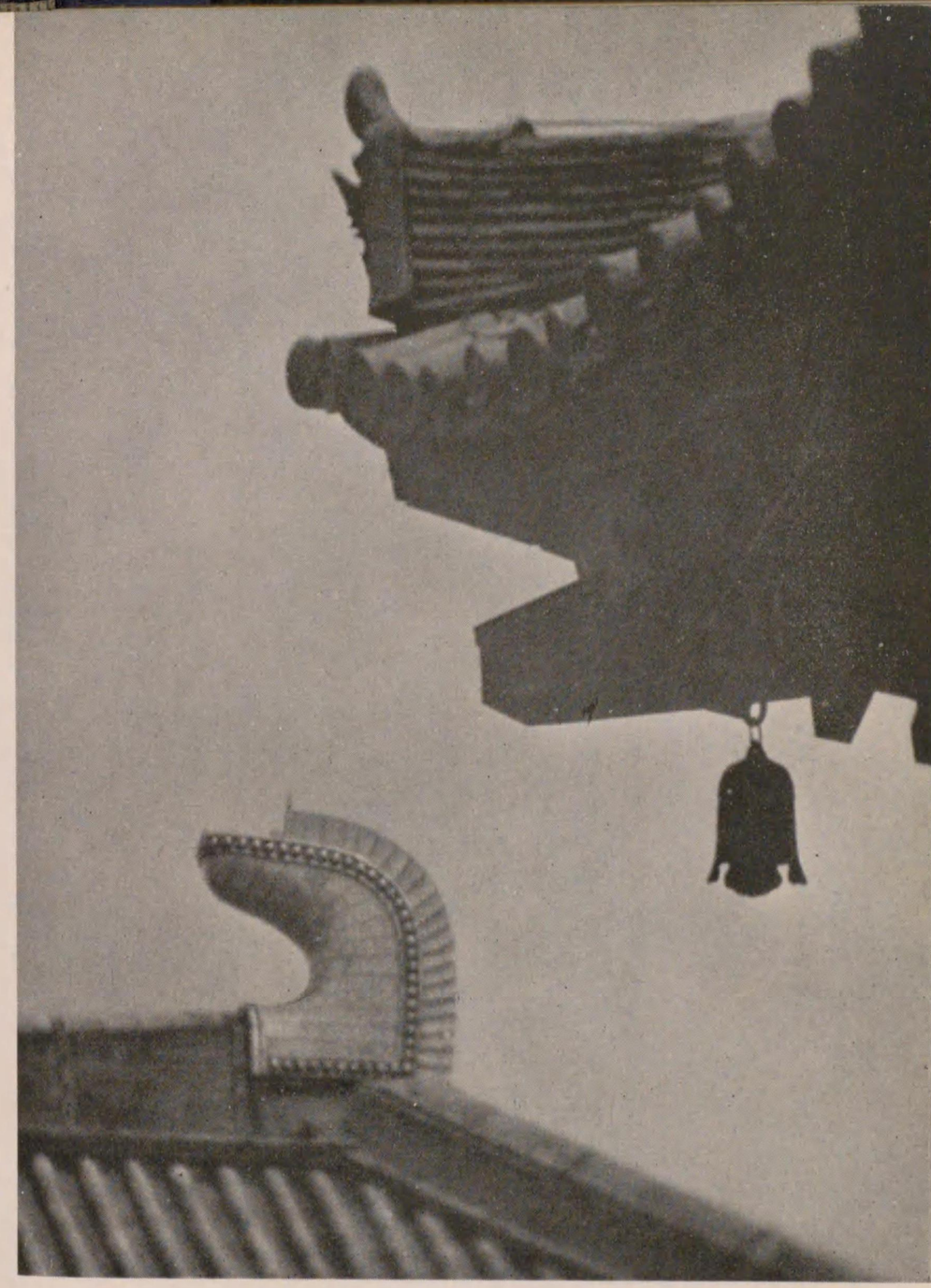
火災其他の天災の外に寺運の隆衰もある。彼の大安寺と云ひ西大寺と云ひ、隨分昔の素晴らしい有様を讀んで居た眼には淋れて居るではないか。境内が極度に縮少したものや又名のみとゞめて殆ど昔の堂塔を失つてしまつたものさへある。町の北にある磐若寺などもその例で、殊に吾々には元弘三年大塔宮護良親王が當寺に逃れ給ひ經櫃の中にかくれて難を免れ給ふた有名な話も、現在の荒廢した有様では如何やうにも想像し得られないのである。これもやはり後に平安朝になつて戰國時代に三好對松永の亂の時兵火に全燒したからである。原因が何にあるかは別として失はれて行くそれが惜しい。

火災の話をすれば盡きないが、前に詳記した結構極まる東大寺大佛殿が落成してから約四百年の後高倉天皇の治承四年に平重衡の亂によつて興福寺などと共に兵火にかゝつて燒失してしまつた。それを後に源頼朝が再建して居る。然しそれも又其後四百年を經た永祿十年（皇紀二二二七年）に前記松永と三好の亂に燒失して居る。これは平安朝の戰國時代の眞最中とは云へ惜しい事だ。堂を失つた大佛様はこれから百四十年程も雨晒になつて露坐のまゝ奈良の野に立たせられて居たと聞くが、其なさけない光景も眼に浮ぶ。

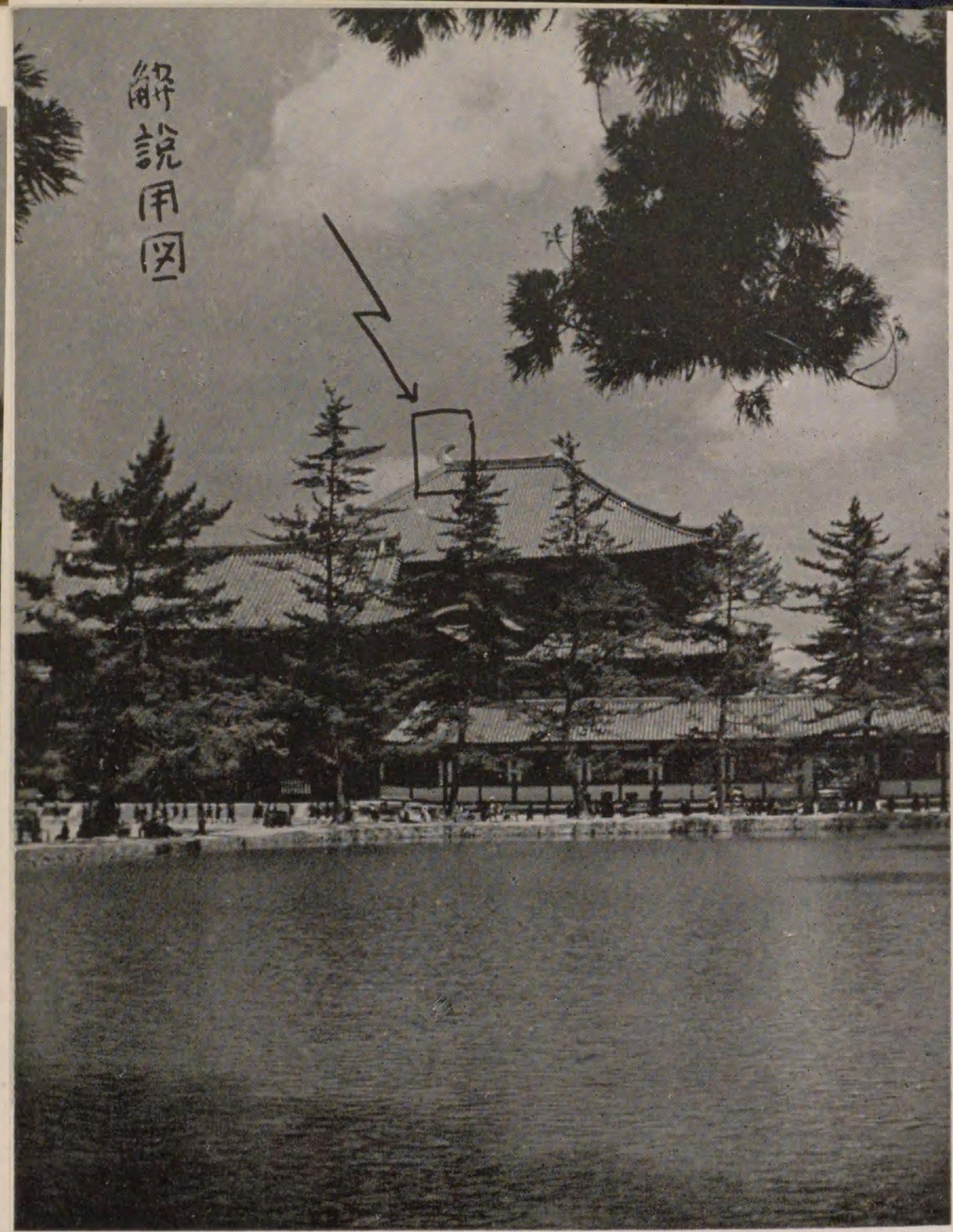
奈良の寺々の中には、當時の朝廷で起されたものと、藤原氏によつて建立されたものとがある。例へば興福寺は藤原氏の造つたもので、今茲で問題にして居る東大寺は朝廷で起されたものである。此治承四年の戰の原因は詳しく取扱はぬとして、當時のあれ程權勢を恣にした平家に對し武力的反抗さへ企てた南都の興福寺や東大寺が、源頼政などのすゝめで平然と平家に楯ついたその爲に起つた戰と云つてもよい。平家は大將として重衡を送つた。重衡とて興福寺や東大寺を燒打つまでの考は無かつたに違ひない。



大佛殿



の印象



第二圖は別に興福寺の塔に試みたと同じ私のミクロン双眼鏡使用望遠裝置をベビーパール　ヘクサーレンズの前方に附して試みたのである。

第一圖は第二圖より近くで寫してある。卽ち第一圖は大佛殿前中門の傍らから寫したもの，第二圖は鏡が池を隔て大佛殿屋上の鴞尾まで約三百メートルと思はるる遠方から寫した。勿論三脚を使用しBを以てした。

東大寺大佛殿

此平重衡の亂の火災（第一回目の火災）について私共は深い關心をこゝに持つものである。

治承四年（即ち皇紀一八四〇年）の此火災の時である。當時は上に後白河法皇あり、政權は平清盛が恣にして居て即ち平家一門の榮えた頃、勿論奈良朝は夙の昔、此時はすでに平安朝になつて居る。

時は治承四年の十二月二十八日、寒風吹荒む冬の日暮方であつたと傳へられる。南都勢は今の奈良市の北方で支へ切れず總崩れの態勢となつて來た。日が沒して邊りは漸く暗く、軍の行動に不便を感じた平家方は、暗いから少し明るくしろとて附近の民家に火を放つたのである。

折しも強い北風は啻に民家にとゞまらず、火焔はそこにもこゝにひ飛火し始め、益々延燒して紅蓮の焔は狂ひ迫る。興福寺にも點いた。遂に東大寺にも移つた。一面の火の海と化した奈良の都は最早人力で如何ともするすべがなくなつてしまつた。人々の逃げ場を求めてさまよふ有樣、念佛を唱へつつ狂ふ慘狀の中に、衣服も亂れ黑髮もばら〳〵に亂して駈け廻る美しい姫君があつた。それは平氏の大將重衡の女（むすめ）である。彼の尊い大佛殿を燒いたのは誰か。それが己れの父君と聞いて佛罰の恐ろしさを想つて今は氣が狂つてしまつたのである。さまよふ其處は地に崩れて餘燼をあげる屋根瓦の山、こは又無慘にも半ば燒け失せて倒れて居る佛像、泣くにも聲が出ず、徒らに狂ひ廻る其有樣は、數年

前歌舞伎座で名優歌右衞門によつて演ぜられた事を私も見て感ずるところが多かつた。即ち「南都炎上」と云ふ外題であつたそれである。

それから七年の後、文治三年（皇紀一八四七年）二月になつてまた一つの話題が殘されて居る。歌舞伎十八番に、又長唄物として誰にも餘りに御馴染の勸進帳が此第一回目の時の大佛殿火炎に關係がある。即ち當時頼朝と不和になつた判官義經は、辨慶以下四天王を從へ作山伏となつて陸奥に落ちて行く途中、時しも頃は如月の十日の夜、月の都を立ち出でて通りかゝつたはこゝぞ加賀國安宅新關である。一同は警戒の關守にそこでせき止められる事になつた。先達の辨慶は南都東大寺の再建の爲の勸進行脚の山伏であると名乘り、勸進帳を讀めと命ずる關守に對し、苦肉の策として往來の卷物を取出して出鱈目に讀み上げる。これにつゞいて色々山伏問答に會ふが、これも難なく其博學によつて切上げて漸く疑が解け、いざ通らうとするや、强力姿の義經が怪しと睨まれて最早免れぬと云ふ大事の場合、涙を呑んで主人義經を打つ辨慶の苦衷を憐れと察した涙ある關守富樫介家直の情にこを漸く見のがして貰つて無事に主從は虎口を逃れるが、辨慶は大地に手をついて主人に詫びる其感激の場面は、餘りにも大作として知らぬ人はない。斯うして平泉の藤原秀衡の館に落着いたと云ふ

が、其月日も經路も傳つて居ず、謠曲安宅に作話として叙されたのが勸進帳や安宅關として劇化されたのであると云はれる。長唄の文句などを見ても實に堂々たる名文で、又佛教の知識無い作者だつたらこれだけの大作は出來なかつたであらう。

兎もあれ、若し東大寺の火災が無かつたとしたら、辨慶もこれを口實に免れ得なかつたらう。或はそれ切り捉へられてしまつて、芝居にも長唄にも殘らなかつたかも知れない。幸四郎の辨慶が見られるのも此火事の御蔭だなどと喜んで見てしまつてはならない。

當時國力を擧げて建設への努力、月を重ね年を經て漸く其完成への喜びと祝典、總國分寺としての威力と誇とが一瞬にして灰と化する、餘りにもそれは遺憾な事である。

吾々は奈良のみではない、全國至る所にある吾々祖先からの賜物であるあらゆるものを、永遠に保護して行かねばならぬと思ふ。

勸進帳の話は兎も角として、此時の火災で失はれた東大寺は早速再建にかゝられ、先づ大佛樣の方が文治元年（皇紀一八四五年）の八月二十八日に後白河法皇の御手で開眼供養が行はれ、大佛殿の方は尙も此時工事中であつたが、間もなく建久六年（皇紀一八五五年）に落成供養の式が擧げられたのである。此時は後鳥羽天皇が頼朝の一行を隨へて東大寺に行幸あらせられたが、謠曲の「大佛供養」

机　上　劇

夫山伏といつは，役の優婆塞の行義を受け，卽身卽佛の本體を，此處にて打ちとめ給はんこと，明王の照覽はかりがたう，熊野權現の御罰當らんこと，立どころに於て疑ひあるべからず唵阿毘羅吽見と……

勸　進　帳

面白や山水に，おもしろや山水に，盃を浮べては，流に引かるゝ曲水の……

（博多人形・背景は引伸廢物印畫）

ロライコート　トリオター 3.5

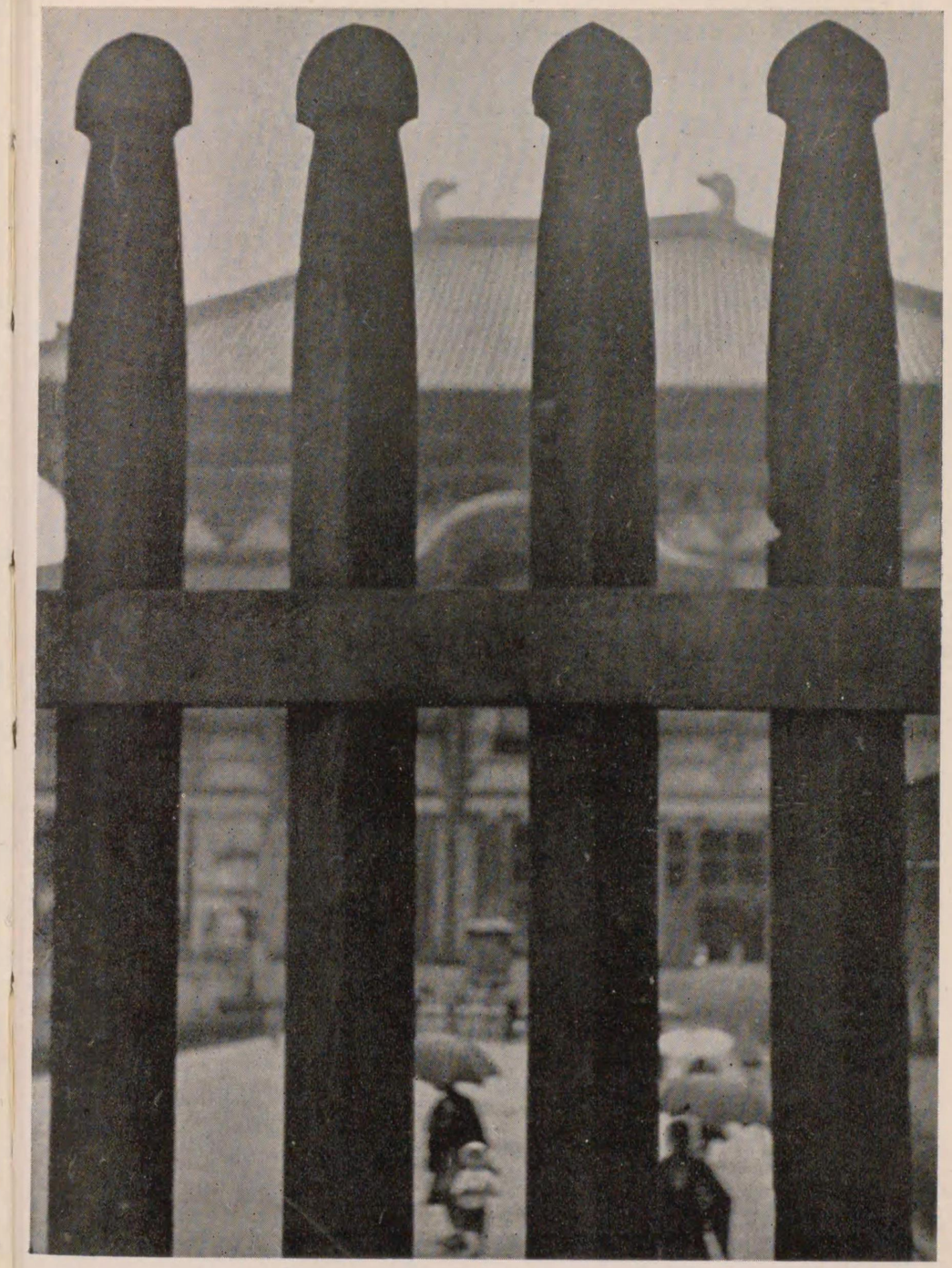
パン F　プロクサー 2 號 f 5.6　1/25 秒

は此大佛殿の出來た供養に當つて、惡七兵衞景清が頼朝を殺害しようとして失敗し、姿を春日山中に晦したと云ふ作り話を叙したもので、景清は東大寺の轉害門にかくれて居たと言ひ傳へられて居る。

此物語は何うでもよいとして、轉害門は實に東大寺創建當時の建築が保存なされて居るので、實に尊いものである事に人々は注意して欲しい。天平時代の門の遺構は今一つ法隆寺の東門である。共に絶對に火災などにかけぬやうにしたい。

轉害門は私が前章の物語を想ひついた正倉院前の溜池の直下に人家に交つて在るが、附近に大火でもあれば無論燒失は免れないと思ふ。今の内に心配して置く必要がある。

私の寫眞は、此門の一部分を寫したものであるが、最近修理せられたと見えてさう古びて見えてない。何にしても防火宣傳をこゝで徹底的にして置く。



雨の日大佛殿に來て

是は私の古い作品の一つであるが，氣に入つて捨て難いので又こゝにのせた。廣い境内を中門の外から隙間見た時一際感興が湧いた事を想ひ出す。

ロライフレツクス 4×4
テツサー 2.8
パン F, フイルターなし
絞 f 5.6 1/50 秒

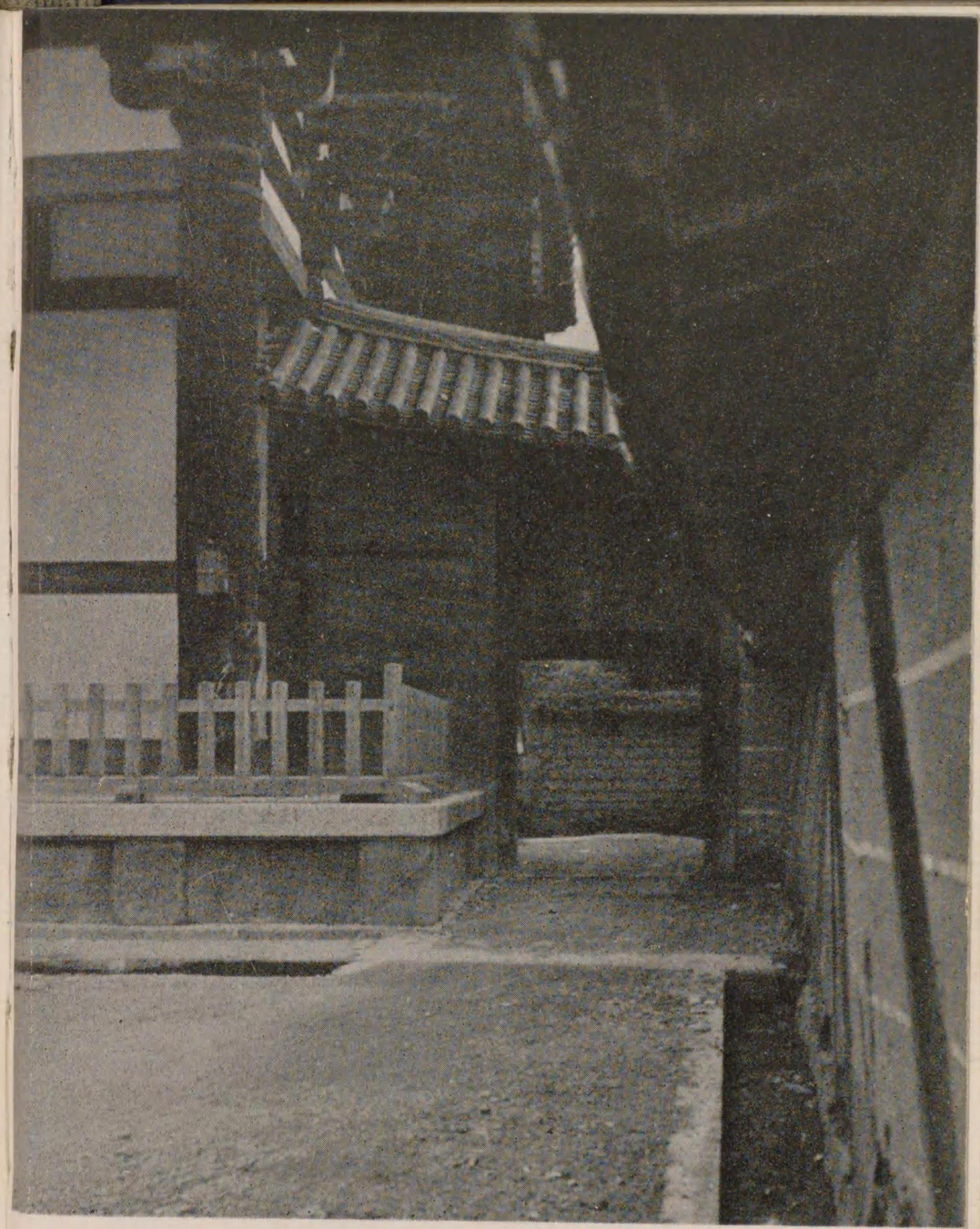
奈良の北隅

奈良に始めて來る人は、大概春日山附近に足を向けるであらう。そして町の北に行く人は割合少いやうに思ふ。

町の北には轉害門や般若寺などがあり、是非共これは見落せぬ史跡である。又少し此西北に歩を向けるならば、法華寺尼寺や又大内裏の跡卽ち奈良の都跡の最も大切な所があるし、更に大軌電車の西大寺驛の眞近に西大寺がある。

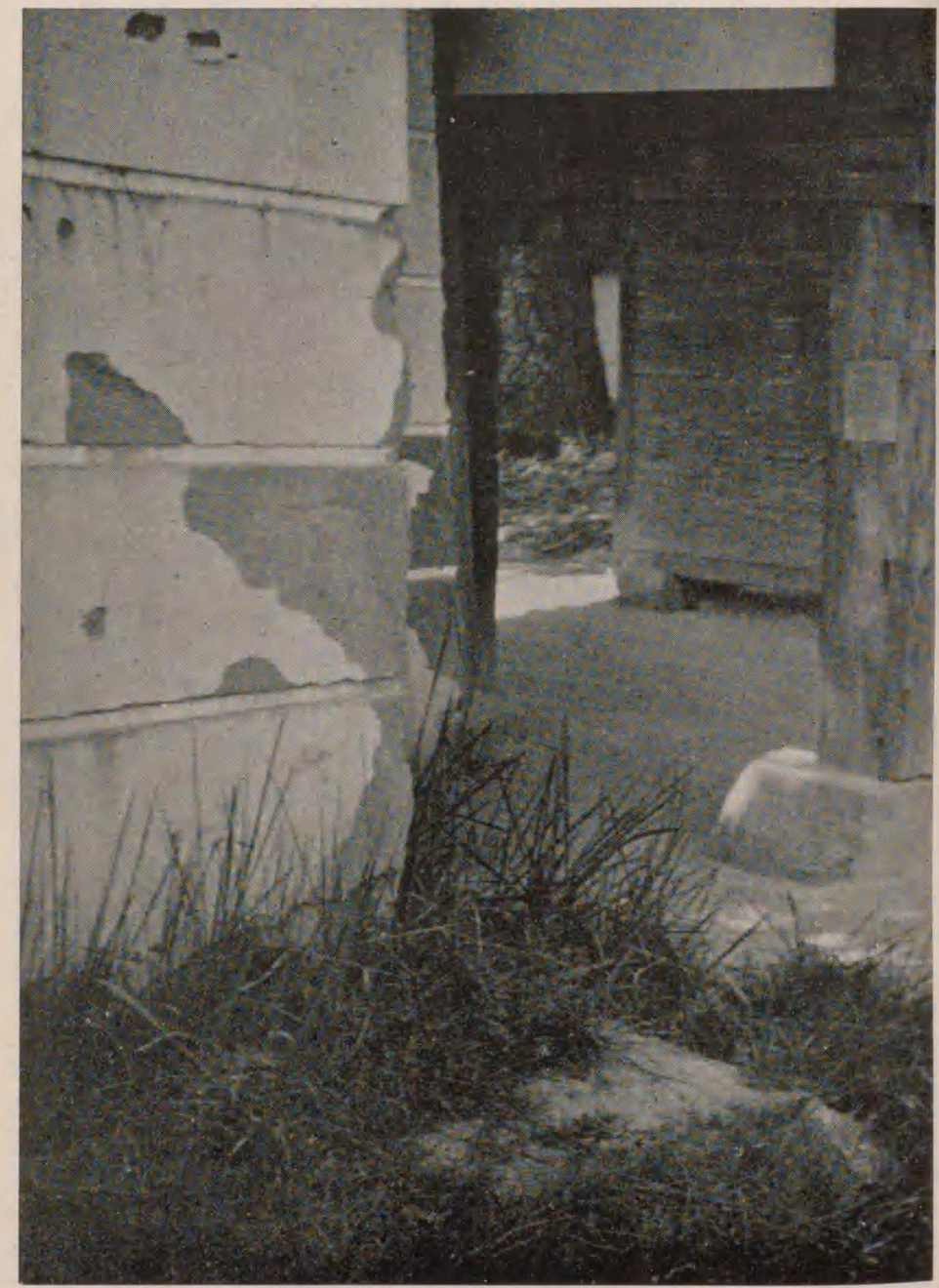
この邊りを前に眞夏の頃、私は遠雷をきゝつゝ歩いた事があり、前に拙著にも其記行を揭げたことがあつた。

西大寺の北數丁のところに秋篠寺(あきしのでら)と云ふのがある。これも西大寺へ廻つたら必ず訪れるべきところ



東大寺轉害門

ベビーパール　オプター 4.5
f 5.6　$^1/_{25}$ 秒

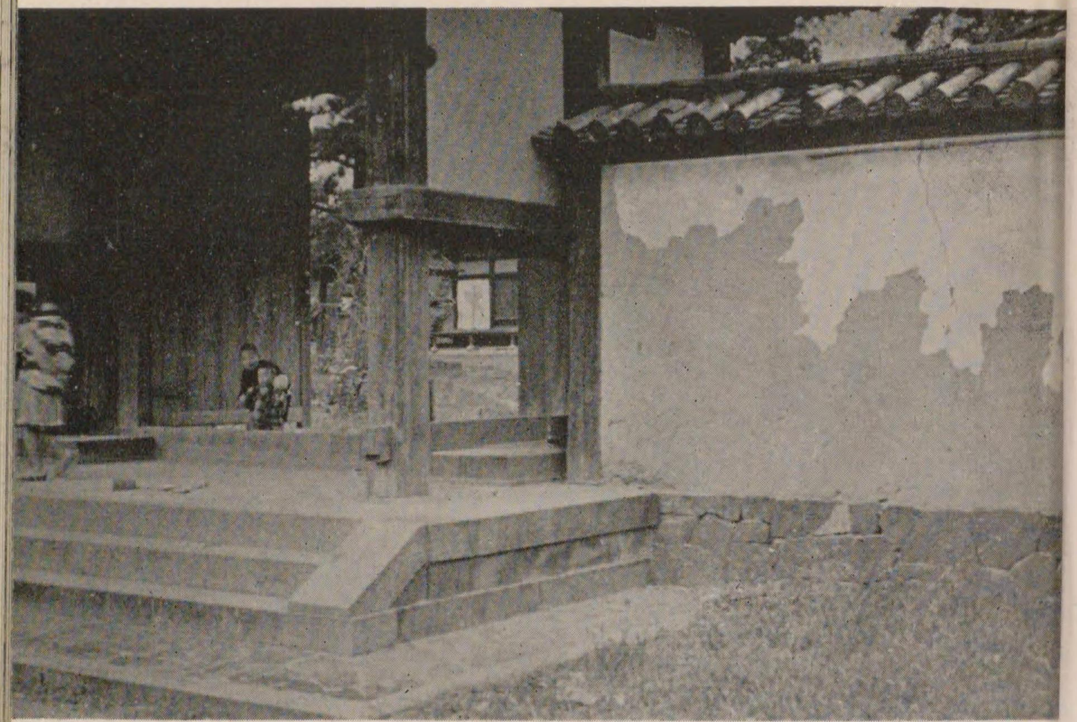


西大寺の夏

これは前の拙著に掲げた事があり，又其節詳しく解説したから改めて記述しない。然しベビーパールカメラの眞價を最もよく示す例でもあり，また私の氣に入りの作品であるため改めて陽畫の製作を試みた。幾分前より調子を度ぎつくしてある。

で、町からひとり飛び離れて居るので、知つて居る人ぐらゐしか行かないのは惜しい。

其他奈良附近には町中と云はず、淋しい野邊や森の中と云はず、歴代の帝の御陵が散在して居る。今や國民精神總動員の秋に當り、御陵廻りは單なるハイキングより意義ある事と思ふ。但し私は寫眞を寫しては畏いと思ふので、一切慎んで撮影して居らぬから、本書には一つも掲げられない。



般若寺の表門

家並の街に接して狹い往來に面して此表門がある。附近の子供達のよい遊び場になつて居るらしい。門の柱の間からちらりと本堂が見えて居る。草は伸び放第，砂塵に汚れて手入のとゞかぬ荒廢のさまは哀れである。

ロライレツクス 4×4 テツサー f 2.8
さくらパン F，黄 2 號 フイルター
絞 f 5.6 $^1/_{50}$ 秒
（以上四圖共データ同じ）

般若寺の石塔

般若寺で古いものは石塔だけであると云はれる。記念碑のやうに一段と高い其構造は見事なものである。私は玆に其一小部分のみを想出の爲に掲げて置く。

般若寺境内にて

般若寺は淋しい。こゝは割合町の近くにありながら，非常に荒廢して居る勢でもあらう。それにまた建物の一切は奈良のまゝのものはなく，皆後世のものである事に私共の興味が薄い爲でもあると思ふ。たゞ歴史に殘るこゝの物語が私共の心を強く惹きつけて居るのみである。これは本堂ではない。

淋しい門

何處へ拔ける道か知らないが，般若寺の奥の草を分けて行つたところに淋しい門を見出した。秋である。半ば黄ばんだ木々の中に少しく紅葉した赤い葉が風に搖らぐのも見える。葛は崩れ落ちた瓦の上を遠慮なく匍ひ廻つてからんで居る。たゞ名高い寺を見るよりも斯うしたところに古い奈良の香が高い。

般若寺表門の背面

本堂は寫眞につまらないと思つたのでこゝに掲げない。境内表門の横の水溜りだか池の跡だか判らぬが小さな池のやうなものである。水も汚いが土壁の民家が其畔に迫り，老婆が此水で何か洗つて居るあたり，又繁つた樹木と水面に映ずる有名な門とを一つにまとめて見ると支那にでもありさうな風景に見える。油繪にしたい色彩美であつた。

朱雀大路の春

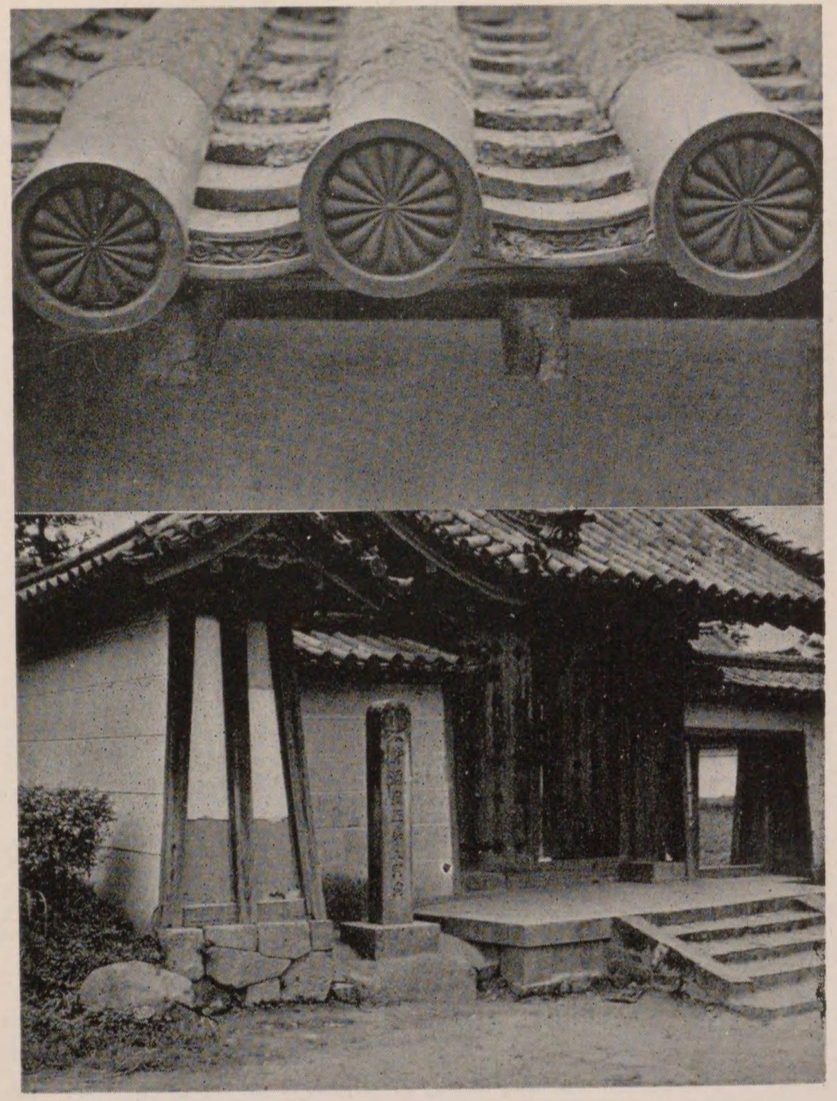
春の朝、奈良ホテルを出て街を北に拔け西に折れて一條街道を暫らく行つて、私は法華寺(尼寺)を訪れた。そこから更に足に任せて畑や田の道を歩いて大内裏のあつたところへ立つた。召波が句に

「菜の花や此邊りまで大内裏」

邊りは一面の廣野原、春日の山は鮮かに、若草山は樹木が全くなく三段に重なつて若綠にくつきりと其麓に描き出されて居る。都跡の標柱に深い想出を走せて大軌電車の線路を越えて立てば、南に走る一條の細い田舍道、これは昔の朱雀大路の名殘である事が判る。

美しく着飾つた男女が嘗てそろ〳〵と歩いて居たところであらう。

此朱雀大路を街の南北に走る中心の大路として、周圍には諸官省や立派な住宅が風雅な高塀を廻らして並び、民家も榮えて碁盤目のやうに整頓して居た昔の奈良の都がこゝにあつたのであらう。



法華尼寺と其瓦

(十六の菊の御紋と同じである)

ライカ　エルマー 3.5
パン X　フイルターなし
f 5.6　1/50 秒

「青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふがごとく今盛りなり」　（小野朝臣老）

有名な歌として、今も其盛りの様が歌ひ傳へられて居る。そこの野に立つて東の方を眺めると春日の森の一帶が繪卷物のやうに眼底に映じて來る。

遙かに目立つて見える大佛殿の甍、その向うのは二月堂。

二月堂の御水取の式は未だ寒い夜であるが、それがすむと、軈て春日山を流れ下る清水も漸くぬるみ、極めて靜かに春は奈良の都に忍びよる。

「春日野の雪消の澤に袖ふれて君がためにも小芹をそつむ」　（古今集）

「春日野の飛火の野守出て見よ今幾日ありて若葉つみてん」　（同）

此二つの歌で其時分の氣分が想はれてくる。

すると間もなく春日山から三笠山にかけて櫻が咲き初める。

「百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして今日も暮しつ」

たゞもう世は太平、夢の如き佛都の春である。塗料の香も未だ高い堂、金色燦然たる佛像に溫い春の陽光は照り映えて、何んとも云はれぬのどかな日が續いたであらう。

又秋の夜は野邊の月も清く澄み、仲麿をして三笠の月の深い想を遙かの異境に想はしめた風景は毎夜の如くであつたらう。「仲麿のたままつりせん今日の月」の句がある。西方生駒の里近くには萩が咲き亂れ、夜毎妻戀ふ鹿の聲も晝とは違つて趣を感ぜしめたに違ひない。森に山に野に寺に街に此奈良の都は四季に美しく住みよい所とされて居た。

生駒から春日まで此間の廣々とした今私共が歩く一面の野原、所謂奈良盆地の大部分に擴がつた舊都は、徒らに史書に古書にそれと想像するに任せて物淋しくも哀れである。

水筒を持たずに一人で喉を渴かして茶さへ求められず私は歩いたが、其昔、此邊は銀座のやうな所だつたかも知れないと思つた。

「白銀の目ぬきの太刀をさげ佩きて奈良の都をねるはたが子ぞ」

と歌はれた萬葉集にある歌の地は今何處であらうか。想像しても及ばない。

平城京は唐の長安（今の西安）の都制に準據して造られたと云はれる。寺も宮殿も皆唐式、京師は帝王の居ますところであり、萬國の朝する地であるから莊麗にすべしと云はれて、有司五位以上及び

庶民とて資力あるものゝ家は瓦葺にし、赤白の彩色を用ひる事を奬勵したから、我が國の建築樣式は一變したらう。然し民衆の家屋の構造に就いては徵すべき資料が一向に殘されて居ず、民家は一般に非常に粗末であつたらしいとの說がある。交通機關は不便であり、國學はあつても一般民衆の間には關係なく、教育はなし、文化は低く非常な粗末な生活に甘んじて居たと云ふ事は事實に違ひない。

「家にあれば笥に盛る飯を草枕、旅にしあれば椎の葉に盛る」

と云ふ古歌も此頃の風であつたと云はれる。衣服も官吏は靑赤黃白黑と階級により色分けのものを用ひたが、民衆は極めて單純な風俗をして居た事は當然とされる。

私が朱雀大路を西に離れ暗越の街道から法隆寺への道に漸く出た時、大型のバッカードで風を切つて來た斷髮のモダーンな娘達に會ふ。急に世の變遷が想はれて來た。

古い土塀に身を倚せて

奈良の自然に色彩を添へるものとして勿論古寺の建物があるが、それよりも一層深い趣を持つものには外皮が剝脫し盡され、芯の黃土に交つて重ねられてあつた瓦の層が露出して居ると云ふ半ば頹れた土塀がある。

雜木林や竹藪の蔭にそれが續いたり跡絕えたりして居る樣を眺めると、本當に舊都の靜けさと物寂しさとが身に染みて來る。恐らく茶道に花道に古典的な淸楚な氣分を解する日本人ならば、誰れ一人も此風雅な味を尊ばぬものはなからう。

此やうな古い土塀は唐招提寺に充分に見る事が出來、又盤若寺の裏にも藥師寺でも見る事が出來た。語り合ふ相手もなく一人こゝへ來るならば、あゝ何んと云ふ趣だらうと獨り口ずさみたくなるもの

である。暫しそこに佇むならば、或は誰か自分の今の氣持ちも知らず、怪しむ人が邊りに見て居はしまいかと見廻す事さへある。古きに慕しむ氣持ち、其遠い昔の華やかなりし世の事々を色々に想像しつゝ一層それに身を寄せて眺め入るならば、黄土の間には何か知らぬ草の可愛らしい若い芽が生を營んで伸々として居る。又遠慮なく蔦葛がはひ廻つて居るのが見られるであらう。

それが殊に秋であれば美しい。籔は黄綠に變つて、そこを通して來る光も黄綠に染つて居る。その樹の間を通して澄み亙つた青空が透され、軟かい白雲が無言で靜かに流れて行くのも眼にとまる。それが想ひ出したやうにさつと來る風に大きく搖られたかと思ふと、土塀の紅葉した紅い蔦の葉まで、何もかも忙しく搖れるのである。萩も美しい。萬葉集の古歌

「秋風は涼しくなりぬ駒並めて、いざ野に行なん萩の花見に」

此私の大好きな歌の一つが思ひ出される。

落葉は馬醉木の上にも降る。又私の頭上にもカメラの上にも降り注ぐ。此やうな徑をあてもなく歩くと、自然と寺の建物のあるところに來るであらう。

唐招提寺の秋

唐招提寺でもさうであつた。靜かな雜木林の中を流れる秋篠川の小橋を渡り、落葉を踏んで生垣を折れ曲るや、人の居ない白壁に赤い柱の寺が直に眼の前にあつた。舍利殿である。

境内を進むと數人の僧侶に出會つた。私は會釋した、僧も丁寧に迎へてくれた。其兩手には皆何か胸の前に重さうに持つて居たのであるが、床下の支柱の馬鹿に高い倉らしい建物の扉は一杯に開かれて居た。これは寶藏であつたが、中にも人の居る氣配がある。そこへ品物を運んで行くのであつた。私は虫干ではないかと思ひながら前を過ぎた。

境内は落葉が一片も殘さぬまでに掃き清められて廣く靜かである。鐘樓、鼓樓、講堂等の建物は近く修復されたものか白壁は美しく鮮かに、朱塗の柱も生々しい。殊に金堂は世に知られるだけに餘りにも尊く美しく、形容の言葉を知らなかつた。雄渾とか偉觀とか云ふ言葉をこゝに初めて當てはめて

見たいやうな氣がして來るばかり。其細部の一々が比類なき美の極致、それが又綜合の上に現れて、その絶大な美の力に吾々は魂まで打たれてしまはずには居られないのである。實に天平藝術の粹とは此事であらう。

靜かに堂に上つて扉の間から中を覗く。そこの盧舍那佛は創建當時さながらの姿を今にとゞめ、名佛師曇靜、思託の腕の冴えは胸のすくばかり。其像に今見らるゝ威嚴は天平當時の活氣が今に滿ち溢れ、大なる精神力の程がそれから察せられてくる。

音もなく聲もない此靜かな世界に私共の注意は視力にのみ集中されて、夢中で見入る一時が如何に強い記憶と印象とを齎さずには居やう。

千手觀音もある。大日如來もある。彌勒佛もある。其等佛樣の由來も功德をも一向知らぬ私でさへ去り兼ぬる想があるから、若し熱心な信仰の人や彫刻家なり建築家なりが見たらば、如何に心を滿足させるものであらうかなどとも思つた。

金堂の背後にある低く長い大きな建物は講堂である。それは昔の平城京の東の朝集殿を賜はつて、

それが今もこゝに殘つて居るのであるときく。尤も外觀は一變して居るさうではあるが、こゝに其遺構の少しでも實際に見られ、當時を偲ぶ事が出來るのも誠に結構な事と思ふのである。

ここの境内を圍む高い松林の其幹には、楢の葉が美しく紅葉して居た。それが綠に苔蒸した地面と赤い柱と白壁の建物に譬へやうもない色彩美を示して居る。

西の京の秋景色

唐招提寺の境内を南に出ると民家が集まつて居る。小さな村である。路傍の草は黄ばみ或は既に褐色に變つて、カラ〳〵と風に鳴りながら枯葉が淋しげに幹に踊つて居る。草葺屋根を取かこむ松の立木の間には、枝もたわわに赤い熟柿が美しい秋の青空を彩る。實に天然色寫眞的の風景だと感じた。

村落を圍む邊りは野が一面に開けて廣く、東には既に遠くなつて居る春日山、南には金剛山のあたりまで眼も及ばぬくらゐ。その遠くまでも黄金色した豐撓の秋の田畑が伸びて居る。

明るい眺めだ。何んと云ふ伸び々々した風景であらうと、急に爽快な氣分になつてしまふ。

晝間こゝへ來た私は、其廣い野邊に豆のやうなバスが走つて居るのを見る。又大和へ急ぐ電車や遠く遠く何處かの汽車の煙が見られる。

秋の野の中に出征兵士を送る幟の幾本と國旗が、風に飜つて居るのが眼にとまる。此平和な美しい生れ故郷を後に誰やらの子なり若者なりが、殺風景な大陸の戰線に、今身命を賭して身を君國の爲に働いて居るのであると思ふ時、感謝の念で一杯になつてくるのである。

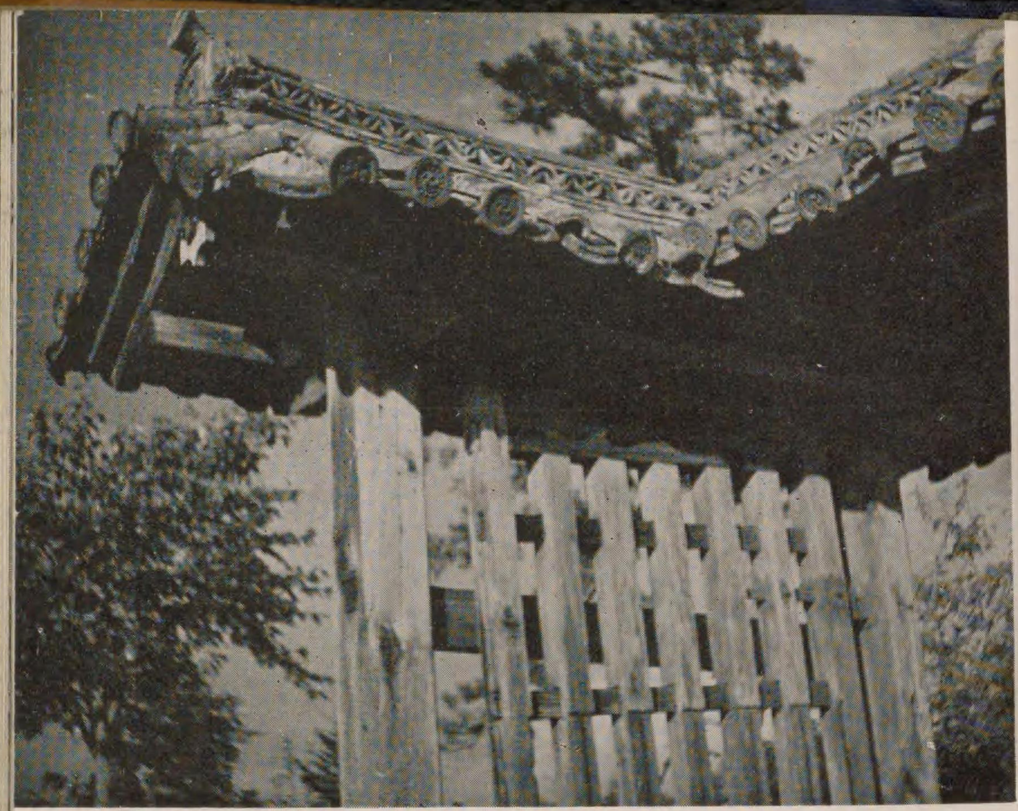
それでも田の面には刈入れに老若男女一家擧つて力強く働いて居る。家の戸口から門内を見ると中庭らしい所に筵を敷き並べて、何か夢中で仕事して居る老婆が居た。悪い氣もなくカメラを向けたとたん、緊張した顏で睨まれたのは是非もない。私は遂にこゝは寫さずにしまつた。

此前こゝへ來た時は、やはり丁度今と同じやうな秋の日であつた。途中出會つた僧に藥師寺への道を尋ねた事がある。其時はライカとロライフレックス 4×4 判とを持つて居た事を想ひ出した。此度は別のロライコートとベビーパールとシネコダックとを携へて來てゐるが、もう僧には出會はなかつた。然し景色は少しも變らず、目標とした野菊がやはり同じやうに咲いて居る。二年や三年でさう變るものならば、千數百年の誇は今日こゝに見られるものではないと思つた。

唐招提寺附近の眺め

唐招提寺の東門に來る前に先づ其邊の野邊をふり向いて見るがよい。南方西の京邊りの一帶は，一眸の中に此寫眞の如く眼に入つてくる。實りの秋の美しい野邊の色彩美は此時私のコダークローム映畫ともなつた。其色彩の美は形容の外である。黄金の畑つづき，手前には眞赤な烏瓜が乾草にからんで居た。

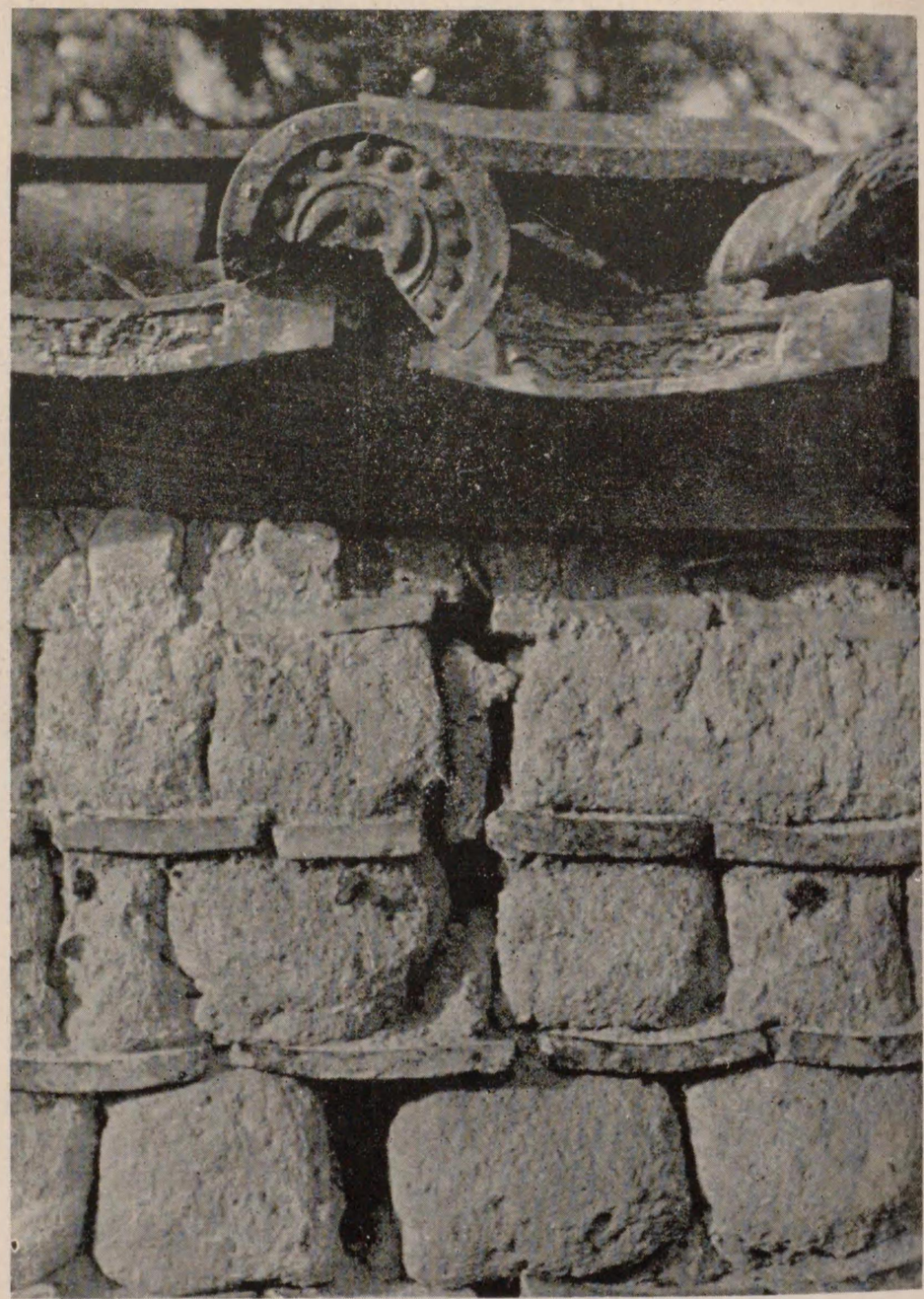
ベビーパール　オプター 4.5
パン F，橙フイルター
f 4.5　$^1/_{25}$ 秒



唐招提寺の東門

法隆寺への街道から折れて秋篠川の畔にこの門を見る。唐招提寺の東門で，南門が正面であるから，これは横手の門に當る。それだけに此邊は實に淋しい。邊りは雜木林で高い木の間に洩れて傾きかけた午後の陽が所々明るく朽ちた門を照らして居る。

ベビーパール　オプター 4.5
パン F，橙フイルター
f 4.5　$^1/_{25}$ 秒



土 塀 の 姿

それを接寫して見ると，よく構造が判る。如何にも古い趣が出て居る。奈良を慕つて來る人は是非こゝを見逃す事が出來ないと思ふ。

崩れた土塀に憧れて

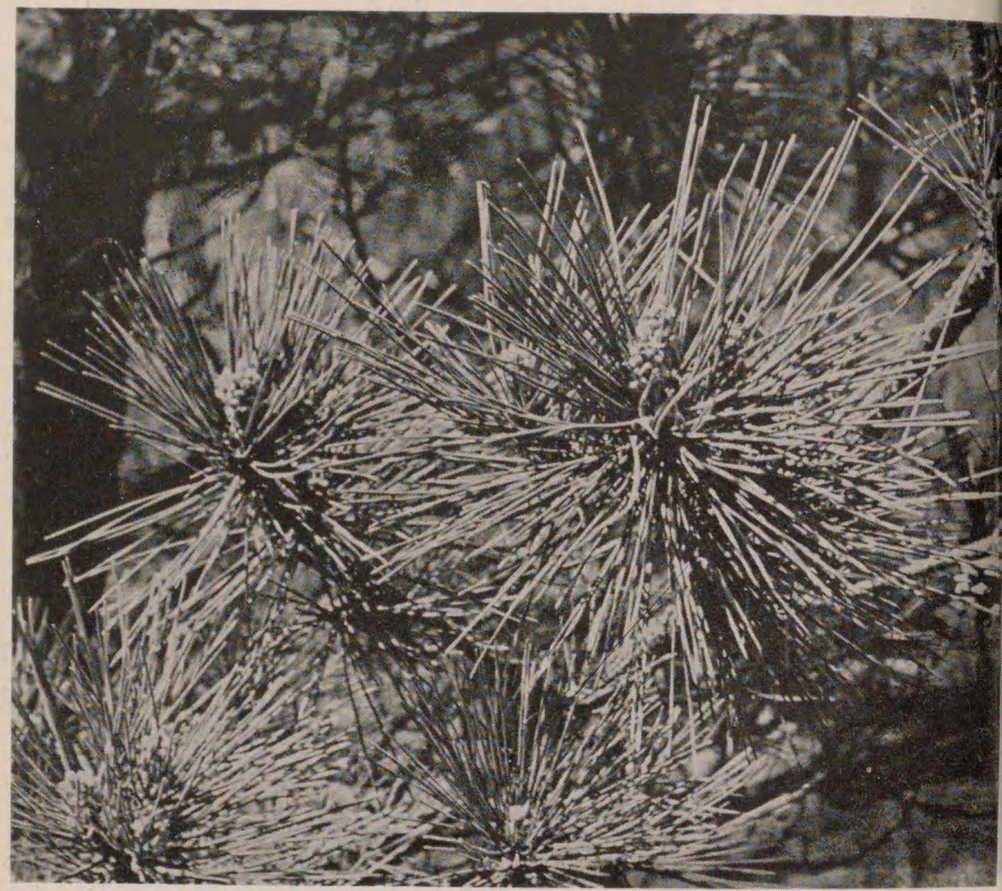
東門からはいつて右側に私の探し求めて居た寫眞の種があつた。傾いた陽に照らされた古い土塀である。私はロライとベビーパールを夢中で働かせた。此作品は舊作であるが，捨てられぬので再びこゝに採つた。

ロライフレツクス 4×4
パン X, f 8 $^1/_{25}$ 秒

靜かな木下道

これも前の時に掲げたことのある畫だが，寫眞の如何は別として，誰も人の居ない此道に古い土塀が斷續して殘り，それに傾く陽が照つて居る氣分は私には忘れ難いものがあるので，再び掲げる事にした。

ロライフレツクス　4×4 にて



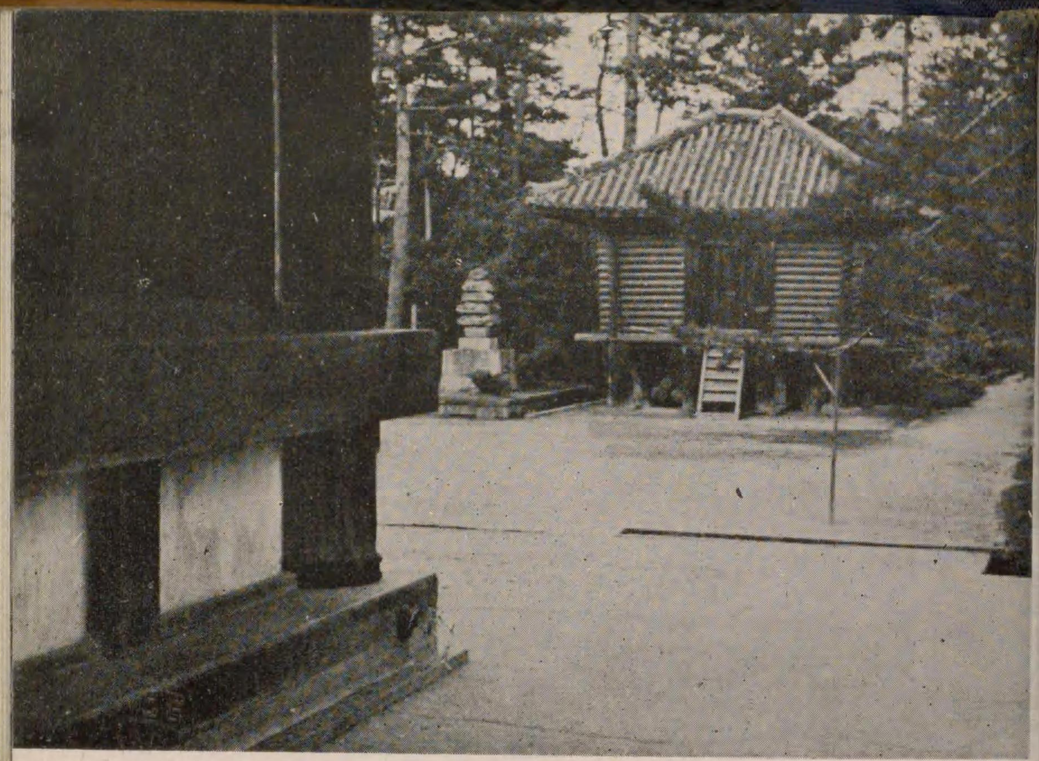
千歳の綠

ロライフレツクス　4×4
テツサー f 2.8
パン F フイルム
プロクサー 2 號
フイルターなし
f 8　$^1/_{25}$ 秒

唐招提寺の境内

本文に書いた通り，崩れた土塀を寫してから暫らく雜木林の道を歩いて，一寸左に折れたところで唐招提寺の御堂が眼についた。腰をかがげて何か抱へて行く白衣の坊さんが此畫にも寫つて居る。道を突當つて堂の前を右に曲ると有名な講堂や鐘樓のところに出る。

ベビーパール　オプター 4.5
さくらパン F　フイルターなし
f 4.5　$^1/_{25}$ 秒



唐招提寺の境内

正倉院のお藏を小さくしたやうな建物である。本文にも書いて置いた。私は此寫眞では物足りなかつたくらゐ。こゝでは色彩美に魅惑された。繪で行くべきを惜しい事と先を急いだのでたゞ記錄をカメラで殘したに過ぎない。

ライカ　エルマー 3.5
パン X, f 8　$^1/_{60}$ 秒

靜かな境内

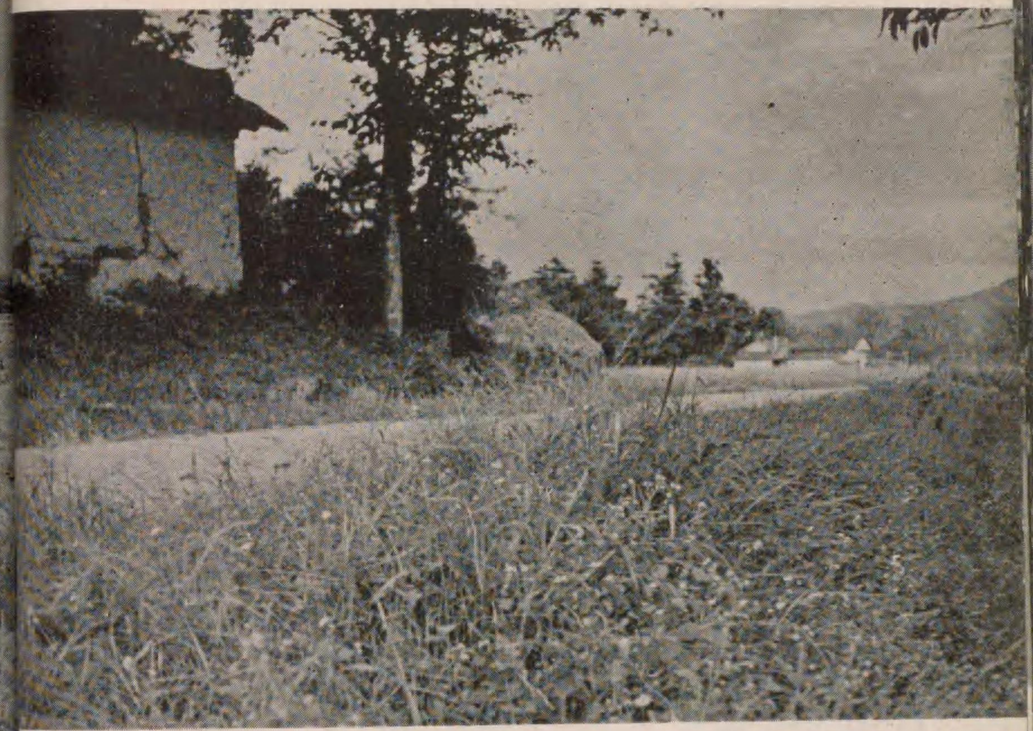
此寺の金堂と講堂は奈良朝のまゝ遺されてゐる代表的建築物で，これに比べられるものは他に東大寺の三月堂，法隆寺夢殿外四棟，新藥師寺本堂，正倉院寺である。講堂はかなり荒廢して居たが，撞樓其他は修理されて美しい。こゝにはかなり多勢の寺の人達を見かけた。手が揃つて居るためか何處も彼處も淸らかに掃除されて，靜かではあるが心から明るい感じがした。寫眞では，やはりこゝの色彩感が再現出來ない。

ロライフレツクス 4×4 テツサー 2.8
さくらパン F, f 5.6 1/50 秒

南門の外に來て

後髪を引かるゝ想ひ，未だ去り得ない心を殘して寺を南の門に出て，再び顧みるとき，門の奥に深い落着を持つ金堂の姿が尙も私を見送つて居るのであつた。門の袖にある附屬の建物は趣があり嬉しいものであつた。

ベビーパール オプター 4.5
パン F 黃 2 號 フイルター
f 4,5 1/25 秒



西の京の眺め

同じ場所から東を眺めると遠く春日の山續きが眼に入る。白壁の家の散在する美しい村。此邊は奈良附近で最も寫眞や畫の種が多くあるらしい。

ライカ　エルマー 3.5
パン X
黄 2 號 フイルター
f 6.3　$^1/_{40}$ 秒

西の京の野邊

「道問へば珠數が答へる西の京」
前に『私のロライ』に掲げた事がある作品だが，私の最も好むものであるから再錄した。唐招提寺から藥師寺へと向ふ途中の野邊の秋の夕方であつた。一面の黄色い稻穗は夕燒に照り映えて何んとも云へぬ美しさである。

ロライフレツクス　4×4　テツサー 2.8
パン F，黄 2 號 フイルター
f 5.6　$^1/_{50}$ 秒

野末の秋

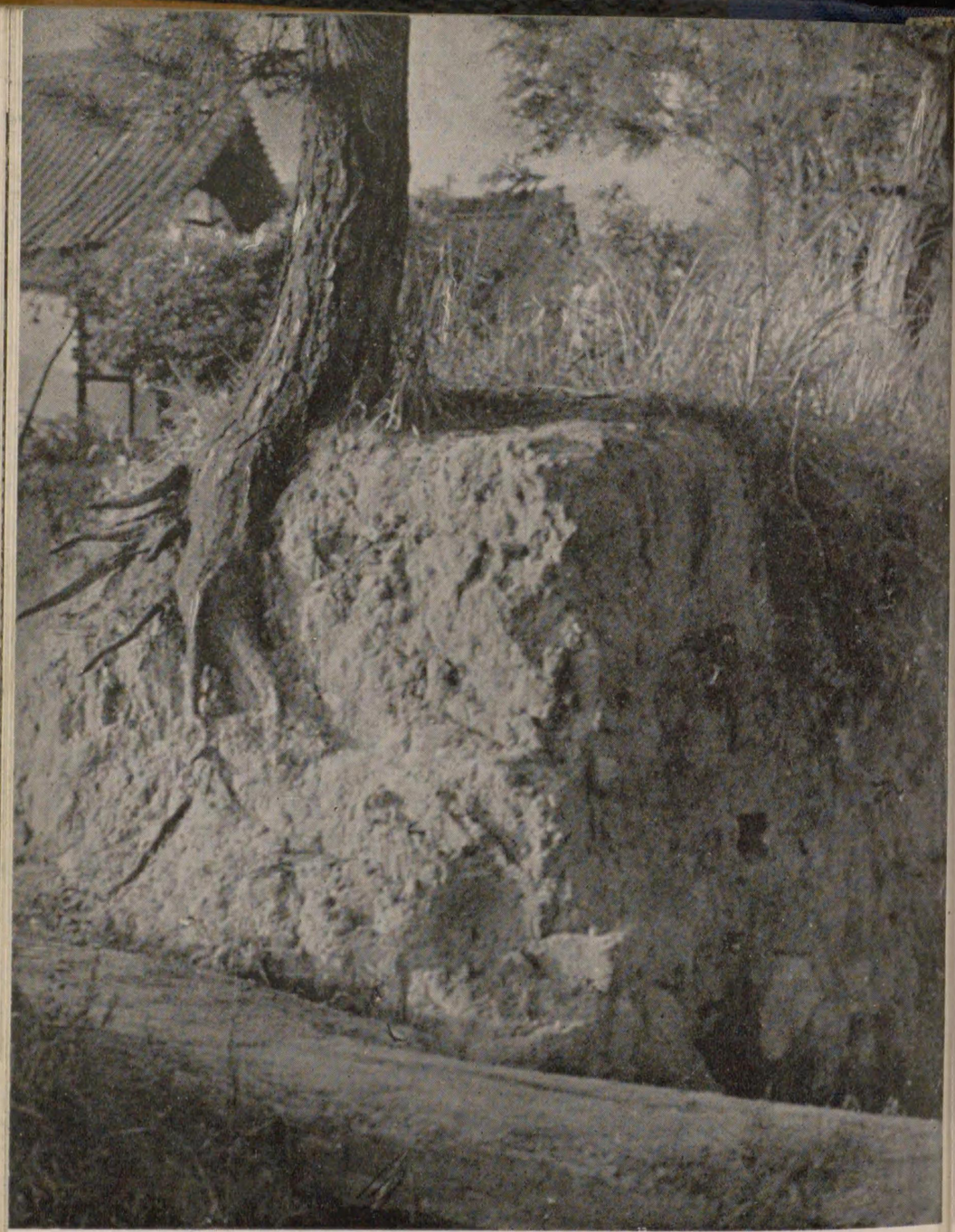
西の京の野の秋は黄に赤に褐色に紫に殘りの綠に繪の具箱をひつくり返したやうな色彩美である。遠く煙る春日山，はげて見えるのが俗稱三笠山である。本來若草山と三笠山とは別になつて居るが混同して人は呼ぶ。色彩のない此作品は實にものたりない感がある。

ロライフレツクス 4×4 テツサー 2.3
パン F, 黄 2 號 フイルター 5.6 1/50 秒

西の京の農家

唐招提寺から藥師寺に向ふ途上風景の一つである。其邊の農家の外觀と眞赤に熟する柿の木を心ゆくまゝ寫した記錄に過ぎない。

ベビーパール オプター 4.5
黄 2 號 フイルター
f 4.5 1/25 秒



藥師寺への道

ロライフレツクス 4×4 にて

藥師寺の夕ぐれ

藥師寺は唐招提寺の南に近くある。唐招提寺を出て村落の白壁の家に魅力を感じ、廣々とした其邊の野邊の眺を恣にするならば、誰しもよいハイキング場所だなと思ふであらう。こゝは西の京一帶の野邊で、度々私は此邊りを逍遙したが、奈良に來て一番氣に入つたところと云へる。此前拙著『私のロライ』にも書いた事がある。

唐招提寺から藥師寺へと順路を選べば、藥師寺の彼の有名な三重の塔に來るまでは、寺内に入つてからも、かなり長い間境内の道がつゞく。其兩側は高さ一メートル位の不規則に斷續する築堤のやうな堤がつゞき、上には松の木が植ゑられて居る。樹の幹の間からは、附近の農家の姿や竹林、雜木林などが見られ、時々家の間からは遠くの野原や春日山や生駒の山肌が眺められる。又道の兩側には古びた寺の白壁に葛が垂れて居たり、其上から眞紅に熟した柿が鈴成りになつて覗いて居る。烏(からす)の聲の外には音もない靜かなところである。然したまに右手程遠からぬところを大軌電車が轟々たる車輪の

薬師寺の夕陽

薬師寺の東塔

（三重の塔）

元は唐式に東塔と西塔と二基あつたものと云はれるのが、今は此一つしかない。然し此塔は實に古く、普通に奈良朝と云はるゝ七十餘年の一時代より更に三十年程前の天武天皇の白鳳時代のものと云ふので珍らしい。塔の屋根から天を指して居る飾り柱相輪を見上げると、頭の方に水焔と云ふ美しい裝飾が見えるが、尙も双眼鏡でよく見るならば、それには三人の天女が天駛けるところが見える。笛を奏して居るものと、香りの水を撒くものと、蓮華の雨を降らして居るものとあつて、實に見事なものだ。

ベビーパール　オプター4.5
フィルターなし
f 4.5　$\frac{1}{25}$ 秒

響を上げて通過する。電車さへなければ全く昔の奈良のまゝなのに。

藥師寺の三重の塔は、ちよつと見ると六重の塔の如き構造で、それはこゝのみで建築技術の上からは非常に興味あるものとして名高い。私の行つたとき塔には新しい修理の手が加へられて居なかつたから、生々しい色彩はなく古びて趣が深かつたが、寺内の他の建物の中には既に改修成つて新しく塗られたものも二三あつた。

こゝの境内の感じは、建造物の價値は別として、唐招提寺ほどには落着きがないやうに思はれた。然し何處も古寺だけに靜けさには變りはない。

寺の南の門を出て六條の辻には此前夕暮に憐れげな御遍路さんを見たが、あれから何處へ行つたかしらとフト思ひ出した。其時寺の西側に沿つて走る電車道を越した田圃の邊で夕燒雲の美しさを賞したが、偶然此度も、秋の時季と云ひ時間といひ、前の時と殆ど同じなので、今こゝで私が眺めて居る夕燒の景色が、數年前そのまゝの同じ日としか思はれない。竹藪も松の木も雜木林も、やはり夕陽に

オレンヂ色に染まつて居るし、柿の幾つかゞ枯枝に殘つて居る景も全く同じだ。時の歩みが奈良ではこれほど遲いものか、それであればこそ千數百年の姿が奈良だけに殘るのであらうか、などゝ考へたりした。

藥師寺への道

柿の實赤く熟する藥師寺の晩秋，白壁には夕陽が明るくさして居る。奈良へ來る人は橿原行の電車で西大寺驛から南し西の京驛で下車すれば雜作もなくこゝへ來られる。是非秋の深いころにこゝへ御誘ひしたい。

ベビーパール
オプター 4.5
さくらパン F
淡赤フイルター
f 4.5 1/25 秒

垂仁天皇の御陵

奈良から法降寺行のバスに乘つて尼ヶ辻で下車するか、或は、大軌電車の尼ヶ辻驛で下車してもよい。そこの電車の線路を西方に横切つて間もなく、垂仁天皇（第十一代の帝）の御陵に來る。

御陵の地は何處も勿論神々しいが、私は晴れて澄み亙つた日、こゝへ來て思はずあゝ何んと云ふ氣持ちのよい所であらうと感嘆しつゝ御陵の傍らに立つた。

御陵の四周は廣々とした堀で、丁度小さい湖水の中に形の良い丸い笠のやうな小鳥を浮べたかの如く、鬱蒼たる森が繁り、小波も立たぬ水の面に、青空に浮ぶ綿の如き白雲の小片がそのまゝ倒映して居る。私は黄はんだ草の上の綺麗なところを求めて携へて來た乾麵麭の包を開き、水筒の中から綠茶をコップに受けて一人靜かな中食をする。此やうな時に私はいつも生きて居る嬉しさを想ふのである。

人は生まれて必ず當然いつか來る死の日には、此やうな心の底から嬉しく思つて眺めて居る風景を

見られないやうになつてしまふのであり、又同時に今自分等が家に歸れば、共に卓を圍んで、樂しく話し合ふ家人とも會へなくなつてしまふのだ。なぜか、そんなやうな事を何げなく思ひ出したのである。又此今の自分の少しも屈托ないすがゞしい氣分を、亡い父や我子にせめても一度でも味はせたい。否必ず私の此氣持ちを、たとひ姿なくとも何かの形で感應してくれて居るに違ひないなどとも思つて、輕い氣持で諦らめてしまふ心も起るのである。

良きにつけ惡しきにつけて想ひ出すが、浮世の苦といふものを少しなりと感じる時には、あゝ父にも我子にもこれを味はさずしてよかつた、自分一人は別に何んとも感じはせぬ、これが浮世の常であるからと、却つて心に重々しい壓迫と云ふやうなものがなくなつてしまふが、斯ういふ美しい風景に接したり、樂しいものを見たり、愉快な出來事に會ふとか旨い好物でも喰べたりする時などには、自分一人が此世の幸福の全部を私して居て、亡い人達には誠に相濟まぬ、申譯ないと云つた感じが禁じられない。これが私の眞心なのである。落ついてこんな事を考へて用も仕事なども全く考へずに、斯うした念に耽つて居る私の今の身分は有難いと思ふ。

草原は清い、前景の水も清い、飛ぶ雲も清い、私の心も清い。何から何まで、何んと云ふ清らかな

感じだらう。斯う私は其場でノートブックに心のまゝを記した。別に急ぐ目的地と云ふものもないので、いつその事、夕方までこゝに居て見やうかなどとも思つた。

垂仁天皇様の御事は小學校の頃、さう云つても既に四十年以上前の事であるが、習つた事があつてよく覺えて居る。野見宿禰の議を容れて、土偶を以て殉死に代へられた御なさけ深い御方であると云ふ事だつた。

こゝから唐招提寺は直ぐそばである。

法隆寺詣で

一般の人は、奈良と云へば先づ猿澤の池、春日神社、大佛殿、三笠山を想ひ出すであらう。然し特に尊いところとして第一に正倉院を擧げなければならぬ。奈良朝文化はこゝに藏せらるゝ三千餘點の見事な品物を通じて現實に見る事が出來ると云はれるが、私共一般人としては拜觀は許されない。從つて正倉院はただ遠くから拜して居るに過ぎないから記す事が出來ない。

正倉院と共に尙法隆寺がある。これは奈良の町から遙か遠い郊外にあり、金魚の產地で海外にまで名高い郡山の町を過ぎて行かれる。又郡山の邊りの野邊は米の農產が多く、春には郡山城址を廻つて其邊は一面黃色い菜の原である。其角の句にも

「菜の花の中に城あり郡山」

全く其通りの美しい風景であるが、城址には天主閣も何もなく、石垣は立派に殘つて、其上が住宅地らしくなつて居るのが、電車の右窓から間近に眺められる。平端(ひらはた)の驛で電車を捨てガソリンカーに

法隆寺東門のあたり

乘りかへれば、直に法隆寺に來られる。前には奈良から乘合バスで唐招提寺、藥師寺を過ぎ、郡山、小泉の町などを通過して來た事があるが、電車の方が疲れを感じないやうに覺えた。

電車驛は寺から遠いが、バスは南大門前の傍らの松の木立の中に止る。こゝが終點となつて居る。南大門に面して立てば、私共には先づ其兩袖の土塀が嬉しい。尤も修繕されて新しくはあるが、如何にも此中に世界最古の尊い木造建築物を大切に藏するのかと云ふ感がする。

南大門は室町時代の建築で、餘り古くはない。たゞ此門から中を覗くと、忽ち氣分が新たになつてしまふ。

向うの正面に見えるのが名高い中門である。中門の建て方は建築上から注意して見ると盡きない特色あるもので、吾々素人にも氣がつくが、入口の眞中に柱が立つて、左右から入れるやうに分れて居るので稀な例であり、此門の柱をよく見ると、中程がふくらんで太くなつて居る。これは昔ギリシヤ建築の流れを汲んだものらしく、東西一脈相通ずる事を物語るエンタシスと稱するものである。此門の兩側にある仁王は最も勝れたものと云はれるからよく見るがよい。その睥睨叱咤の表情は如何にも凄く、握りしめた拳には實に強い力が滿々として、全身これ皆力と云へる。

法隆寺の外垣

ライカ　エルマー 3.5
パン X フイルム
黄 2 號 フイルター
f 5.6　$^{1}/_{40}$ 秒

ライカエルマー 3.5
パン X フイルム
黄 2 號 フイルター
f 5.6　$^{1}/_{40}$ 秒

中門柱のエンタシスと仁王像を示す

（山田氏寫）

中門に立つて見れば正面には講堂、左に五重塔、右手に金堂があり、皆幾度か寫眞で見、話にきいた懐かしいもので、私は一體こゝで何う云ふ所を觀察して見ればよいものやらと迷つてしまふ。其建築構造、其形態美、其細部の模樣、彫刻、堂の配置、さては中にある本尊の佛像やら玉虫厨子とやら壁畫とやら、拜觀を許すもの又常時許されぬものやらに心を配りつゝ、一巡する短時間に思ふ存分の觀察をしたい事のみ心に希つたのである。勿論何んで滿足し得る事が今出來やうか、私は自分を顧みて、たゞ此時得た收獲は一言「涙がこぼれる位の尊さ」と云ふ事より外になかつた。

此尊さは何んでカメラぐらゐの道具を以て描出出來やう。何うして拙い文筆で表現し得やう。

用明帝（聖德太子の父君）の御病氣平癒の祈願にと推古天皇の十五年に、天皇と太子と御協力で完成されたのださうで、金堂内金銅藥師佛の光背にある銘によつて明らかと云はるゝが、私共は見る事が出來なかつた。毎年一定の時に拜觀が許されるときいた。盡きぬ想ひを殘して廻廊をめぐりつゝ、そこから私共は夢殿へ向つて歩をすゝめた。